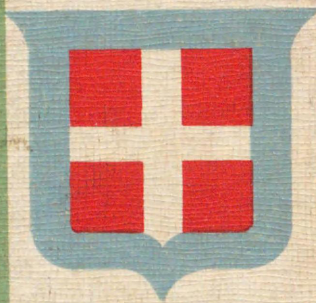
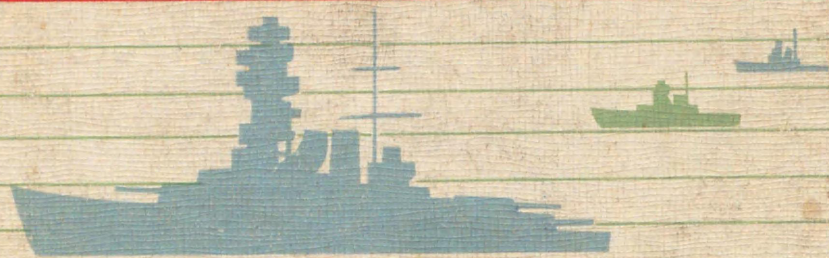


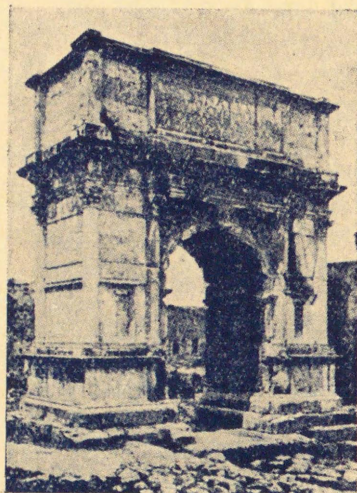
タイリ物語



東京會社 三友社發行

語物一リタイ

著 郎 二 原 荏



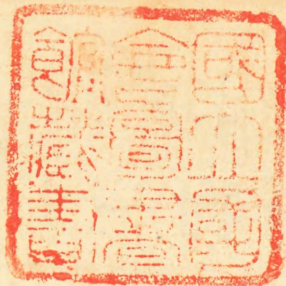
門 旋 凱 の 馬 羅

社 會 資 合

行 發 社 友 三 京 東



38
E



151718

此の本をお読み下さる

—親愛なる小國民諸君に—

親愛なる小國民諸君！

そう呼ぶだけで、私は何とも云えぬ、明るい氣持ちになるのです。

せまい、この書齋から、私は日本全國に、それは、秋の空の輝やかしい星の様に、まんべんなく、生活してゐる、諸君の生き／＼とした姿を思ひ浮かべてゐるのです。

町に、村に、山に、海邊に、潑刺たる諸君の存在を思ふ時、日本全體が偉大なる力の塊に見えてくるのです。

私は、この諸君を思ひ浮かべながら一生懸命で、イタリ―物語を書きました。

今、諸君の、お父さんや、お兄さんが、日本の尊い使命の爲に極寒酷暑の戦場に一

命を捧げて戦つてゐます。東洋平和の土臺石となつて、尊い血を流してゐます。

『我々は、この戦に生命を捨てよう』

そう決心する、私達のお父さんや、お兄さんは心の中で

『この後は、子供達が立派にやつてくれる』

かう考へながら、安んじて死んでゆくのです。

『後を頼むぞ、しつかりやつて呉れ』

そういう聲が、戦場のすみぐらから、諸君に、發せられてゐるのです。

その通り！ 眞の東洋平和の樹立といふ尊い日本の使命を、なしとげるのは諸君の

役目となつてゐるのです。

私達は、私達のなつかしい、お父さんや、お兄さんの尊い血の上に、輝やかしい、

東洋永遠の平和をうちたてゝゆかなければならないのです。

諸君の責任は重いのです。

諸君の使命は尊いのです。

三千年來の、どの時代の祖先よりも、諸君は輝やかしい歴史をつくることが出来るのです。

諸君は、日本の、どの時代に産れたよりも、今産まれた事が幸福であるのです。

産れ甲斐があつたといふものです。

いくら一生懸命に奉公申上げても、とても、しつくされない光榮です。

私は限りなく、諸君を祝福する氣持ちで、心が一ぱいです。

諸君は、全力をあげて、この光榮に報ひなければなりません。この光榮に報ゆることの出来る人間にならなければなりません。

そうした諸君のために、私はイタリー物語を書きました。

尊い使命を果たせる、血となり、肉とならせやうために、この本を書きました。

私も一生懸命で書きました。諸君の一人、一人の顔を、思ひ浮かべながら書きます。

した。

この本は、イタリーの事を知らせるのが目的で書いたのではないのです。諸君を、立派な日本人にするために書いたのです。

一生懸命に読んで下さい。

まごころをもつて読んで下さい。

そして立派な日本人になつて下さい。

私は、神様と、諸君の、力によつて、立派に尊い日本の使命が、なしとげられるのを思ひながら、この本を諸君の手もとに送りとゞけます。

— 父兄、 併に教師の方へ —

私達が子供であつた時代と、今の時代は、すっかり様子が、變つてしまひました。

私達が讀んできた、讀物は、その儘今の子供に讀まただけでは不十分になつて來

ました。

子供の讀物は、子供の魂の糧です。今までの讀物は、この魂の實體をはつきりと掴んでゐませんでした。抽象的な魂が目標でありました。

しかし、この魂こそは、日本民族の魂でなければならなかつた筈です。大和魂です。

日本の使命を果たす魂です。

東洋全土を抱擁して、天皇陛下の御聖業に翼賛し奉る魂です。正しい世界を樹立する魂です。魂の糧とは、實にこの魂の糧といふ謂でなければなりません。

そうした讀物は、今の子供の周圍にあまり貧困であるといはなければなりません。

私は、子供の讀物が、もつとく研究されなければならないと思つてゐるのです。

私は、そうした願のもとに、本書を書きました。少年期から青年期を目標に書いたものです。從來の讀物よりは、内容も、表現も、程度がたかくなつてゐます。私は理解

よりも、感銘に重きをおきました。從來の讀物は、あまりに子供をあまやかすすぎてゐます。

語句なども、かなり難解なものを使用いたしました。それは語句の解釋よりは、その響を、たつとんだからであります。

語句としてよりも、私はことばとして、或は形象體として、使用してゐます。要は未曾有の時局に、聖業を翼賛し奉る子供を思つて書いたものであります。

武漢三鎮陷落を目捷にひかへて

著者識

目次

一 イタリアはお友達 一

二 ローマの興起 五

1 狼の乳で育つた英雄 五

2 戦争部隊 一五

三 伸びゆくローマ 二四

1 海の女王カルタゴ 二四

2 ポエニ―戦役 二六

3 強敵ハンニバル 三九

4	峻嶮アルプス越え.....	四四
---	---------------	----

5	カンネーの戦.....	五一
---	-------------	----

6	ローマ遂にカルタゴを敗る.....	五八
---	-------------------	----

四	大英雄ユリウス・ケーザル.....	六五
---	-------------------	----

1	投げられた骸子.....	六五
---	--------------	----

2	英雄の末路.....	七八
---	------------	----

五	大ローマ帝國なる.....	九二
---	---------------	----

1	オクタヴィヤヌスの制覇.....	九二
---	------------------	----

2	ローマの文化.....	一〇〇
---	-------------	-----

六	キリスト教とローマ.....	一〇九
---	----------------	-----

1	キリスト生る.....	一〇九
---	-------------	-----

2 イエス十字架にかゝる……………二六

3 キリスト教ローマに入る……………一九

七 ローマ帝國衰ふ……………一五

1 ローマの皇帝……………一五

2 ローマの黄金時代……………一九

3 分裂するローマ……………一三

4 ゲルマン民族の移動……………一三七

5 ローマ滅ぶ……………一四二

八 中世のイタリー……………一四七

1 ローマ法王……………一四七

2 法王の破門……………一五一

3	十字軍	一五四
---	-----	-----

九	イタリー人の活躍	一六三
---	----------	-----

1	歐洲の中心地	一六三
---	--------	-----

2	時代の先驅者ダンテ	一六六
---	-----------	-----

3	地球は廻る	一六八
---	-------	-----

4	東方見聞記	一七三
---	-------	-----

5	コロンブスのアメリカ発見	一七九
---	--------------	-----

一〇	イタリーの統一	一八三
----	---------	-----

1	建國の志士ガヴール	一九三
---	-----------	-----

2	奇傑ガルバルデ	二〇〇
---	---------	-----

一一	驍雄ムツソリニー	二〇七
----	----------	-----

1	鍛冶屋の子ベニト	二〇七
2	不敵な少年	二一〇
3	故郷を出づ	二一七
4	中學校を放校	二二四
5	ムツソリニー先生	二三八
6	賢母ローザ	二三五
7	どん底生活	二四二
8	母の死	二五〇
9	ムツソリニータンク	二五五
10	世界大戦	二六三
11	陸軍々曹ベニト・ムツソリニー	二六八
12	銃後ゆらぐ	二七二

13 ムツソリニー獅子吼……………二七六

14 イタリアの苦杯……………二八二

15 ローマ進撃……………二九〇

16 新イタリアの偉力……………三〇一

一一 歴史は教へる……………三一

イタリ―物語

荏 原 二 郎 著

一、イタリ―はお友達

今、人類は大きな仕事をなしとげやうとしてゐます。今までの人間がとても考もつかなかつたやうな、立派な尊い仕事をなしとげやうとしてゐます。

平和な、正しい人間の世界をつくらうとしてゐるのです。日本の皇軍が支那に派遣されて、果敢な活動をつづけてゐるのがそれです。

正しい道に邪魔だてする者をこらし、迷つてゐる者を導くための戦争です。だから

こんどの戦争の事を聖戦と呼んでゐます。

しかし、世の中には正しい事の案外に判らない人が多いのです。一度道に迷ふとなか／＼出られないのおなじです。それだけに、この尊い使命を帯びた私達は心をしめてかからなければなりません。たとへ何年かからうとも、どんな苦しい事に出あふとも、決して途中でくづけてはならないのです。

私達がどうしてもやつてゆかなければならない、大切な務なのです。

世の中には判らない人や、迷つた人ばかりではないのです。正しい事は必ず誰の心にも判つて來ます。

遠い西洋に、もうすでにお友達が出來てゐます。一緒になつて、世の中を正しく、立派にうちたててゆかうといふ頼もしい國です。

それだけ云へばもうお判りでせう。伊太利ですね、皆さんにおなじみの深い、ムツソリニーと云ふ方が政治をとつてゐる伊太利です。

ヨーロッパに日本の二倍程もある大きさの地中海と云ふ内海があります。その地中海に島國ではないが、丁度長靴のやうな恰好をして、突出てゐる半島がありますね、それが伊太利です。ほとんど島國であるやうな伊太利は、日本とおなじやうな海國です。それから氣候の様子もたいへんよく日本に似てゐるし、火山や、地震の多い事も似てゐます。

それよりも、もつと大事な事は人の様子や考へ方、禮儀の正しい事、愛國心に燃えてゐる點など、たいへんに日本人に似てゐます。

よく寫眞に見るムツソリニーなども額がひろくて、眼玉がギョロツとしてゐますがどこか東洋人らしいではありませんか。

伊太利の人達も、それは／＼日本を尊敬してゐるのです。世界中で一番日本人をよく知つてゐるし、尊敬してゐるものは伊太利です。

日本と伊太利はずつと昔、日本が戰國時代と云つた時代から、關係があります。そ

頃の日本の大名達が、はる／＼とローマまでお使を出してゐます。日本人が西洋に行つたはじめてでありませう。そのお使の繪姿が今でもローマに残つてゐると云ふ事です。

それから日本を世界中に紹介したのも、マルコ・ポーロと云つてイタリー人です。丁度支那に元と云ふ國があつて、日本に攻めて來たことがありました。

これが有名な元寇で、この時には流石の大國元も日本のために、さん／＼に打破られてしまひました。マルコ・ポーロがこの時支那に來てゐて後に『東方見聞記』と云ふ書物を本國にかへつてから書きました。その書物の中に日本の事を『ヂバンダ』と云つて、たいへん立派な國であると紹介したのです。

西洋人は、この話を讀んで、東の方に立派な日本と云ふ國があるのかと心から羨ましく思つたのです。

考へてゆくと日本と伊太利はなか／＼關係が深いと云ふ事が判るでせう。世界で一

番仲よしの國伊太利！ この伊太利と日本がお互に手を取りあつて立派な世の中をつくりあげようとしてゐるのです。

そこで、このお友達ともだちの國伊太利と云ふのはどんな國であるかと云ふことを、私達わたしたちが知つておくことも大切な事ことですね。お友達ともだちの國ですから是非知つておかなくてはいいけません。

では、これからこの伊太利のお話はなしを一緒に調べて、一體どんな國であるかを研究けんきういたすことにしませう。

二、ローマの興起

1 狼の乳で育つた英雄

今のイタリーは、ヨーロッパでも、そんな大きな國くにではありません。

むしろ、イギリスや、フランスの方が、イタリアよりも意張つてゐます。領地なども、イギリスや、フランスとくらべれば、とてもくらべものになりません。

それでもイタリアは、

「今に見てゐろ！」

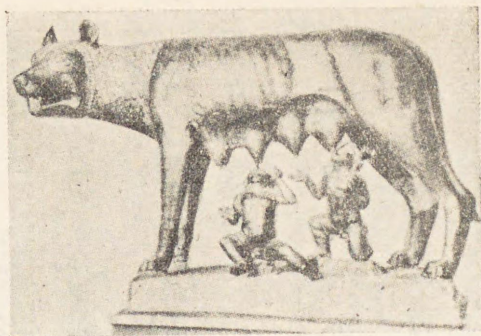
と、一生懸命です。今のイタリアをひきゐてゐるムツ

ソリニーは、よくイタリア國民にむかつて、

「諸君は、我々の祖先の偉業を思へ！」

と、はげましてゐます。

ヨーロッパでは、祖先のくらべつくらしたらどこ



羅 馬 の 狼

の國でもイタリアにはかなはないでせう。

今のイタリアは最近になつて建國されたものですが、ずっと昔、今から二千五六百

年も大昔になります、イタリアから興つた國にローマと云ふ國があります。

現在のイタリアの首府がローマと云ひますが、これは昔のローマの國名が残つたものです。ローマと云へば誰だつて知つてゐるでせう。このローマがイタリアの古い時代の話になるのです。

立派な國史を持つ國民程幸福なものはありません。

私は世界中の國々の歴史を調べてみて、つくぐと有難い日本の國史と、尊い日本の國體に感謝しないではいられなくなるのです。

むごたらしい祖先や、かんばしくない歴史をもつ國民はどんなに肩身がせまい思ひで生きてゐるのでせう。

イタリア國民が、小さな國になつて、しかも元氣一ぱいに、起ち上らうと云ふ意氣に燃えてゐるのはローマと云ふ歴史を遠い昔にもつことが出来たからです。

ローマは、西洋全體を統一した強い、大きな國でした。今、西洋で使つてゐる文字

をローマ字と云ふ程に文化も發達した國でした。

このローマの國を建てたロムレスと云ふ人におもしろい傳説があります。

東京に住んでゐる人や、東京に來たことのある者は日比谷公園に妙な銅像があつたことに氣がついたでせう。

未だ、東京を知らない人でも寫眞などできつと、知つてゐるに違ひないと思ひます。二人の男の子が一匹の狼のお乳を吸つてゐるところの不思議な銅像です。

これはイタリーから日本に寄贈されたもので、イタリーの古い傳説を銅像にしたものです。

この二人の子供の中の一人がロムルスと云ひます。ロムルスは、この銅像によつてわかる様に、狼のお乳を呑んで育つた子供です。牛乳や山羊の乳を呑む者はありますが、狼のお乳を呑むのは一寸めづらしい事でせう。

金太郎は、熊や猿を相手に育つたと云はれてゐます。

ロムルスは、おほかみ狼の乳を呑んで、おほかみ狼によつて育てられたのです。

おほかみ狼のお乳を呑んでゐるもう一人の子供はひとりのこどもロムルスの弟レムスです。弟といつて

ふたりも二人は双子であつたとの事です。

イタリーの中程にさら／＼と流れるチベル河と云ふ川があります。

この川のほとりに美しい七つの丘があります。

この丘の上にアルバ・ロンガと云ふ國があつたのです。このアルバ・ロンガの王様

アムリウスと云ふ者は、兄の位をうばつて王様となり、兄一族の者を皆ひどい目にあ

はせてしまひました。

ちやうど丁度その頃ロムルスとレムスは生れたばかりの赤坊でしたが、生かしておいては大

きくなつて何をするかわからないと考へて、チベル河に沈めてしまふことにいたしました。

した。

ところが王の命令をうけて、チベル河に沈めに行つた家來達は、無邪氣な子供を水

に沈めて殺ろしてしまふのは、あまりにもかはいそうに思つて、こつそりと川下の方へ簗にのせたまま流してやりました。

流された双子はやがて川岸にうち上げられ牝狼に拾はれて、森の中に育つてゐたと云ふのです。

かうして狼の乳に育つた王子はやがて附近の丘に羊飼ひをしてゐたファウスツルスと云ふ者にすぐはれ名もロムルスとレムスとつけられたのです。

二人の子供は羊飼ひの子としてだん／＼に成長して來ました。

しかし、生れはどことなく違つて、氣品は自然に備はり、性質は勇敢で、頗る強くなり、たちまちの中に仲間から頭におされました。

ある時、仲間の羊飼ひ達は王様の家來達と戰をして、たくさん捕へられてしまひました。弟のレムスも亦捕へられて王の前にひきだされました。その時レムスの様子が氣高く、とても普通の人とも思はれなかつたので、王は不思議に思つて、くはし

素性を調べさせました。そして始めて前の王様の實の孫であることが明らかになつたのです。

一方ロムルスは、仲間がたくさん捕へられたときいて、更に仲間の者共をかりあつめ、突如宮殿に攻め寄せました。それがあまりに急であつたために、油斷をしてゐた王様の家來達はたちまちに敗北して、遂に王様もその場で殺されてしまひました。そこでロムルス、レムスの兄弟は、久しく日陰の身となつてゐた祖父さんを押したてて王の位につけ、自分たちはチベル河の河畔に、新しい國を建てることになりました。

かうして、ローマの國は美しいチベル河のほとり七つの丘の上に、英なロムルスによつて、打ち建てられました。

狼の乳に育つたロムルスは、勇敢な大將でありました。ローマと國が名づけられたのはロムルスの名をとつたものであります。

これから、次第に近くの國を平らげては、國を大きくしてゆき、新らしく降参してローマ人になつた人達も、一緒に仲よく助け合つて、これより先からたいへん強く盛んであつたギリシヤまでも降服させてしまひました。

ローマ人は強いばかりでなく、世の中を治めてゆくのも、たいへんすぐれてゐました。

始のローマは小さい國でしたから、だん／＼に新しく征服されて、ローマ人になる者の數がましてくると、後にはローマ人よりも、それ等の人達の數が多くなつてきます。

もと／＼のローマ人は貴族と云つて、高い階級に屬し、新たらしくローマ人になつた人達は平民になつたのです。

それでも平民はよく貴族と協力一致して、國のために働いたのです。最初のうちは平民の中には貴族のやうに偉らくなれないので、不平に思ふ者もあつ

たのですが、それ等の人達にローマ人はかういふ話をして聞かせました。

おもしろいお話であるばかりでなく、世の中のしくみを上手に説明したのもあります。

昔、人の體がまだ一つにまとまらないで、手や足や口、舌、鼻などが、皆別々の時がありました。

こんな者どもは、胃が體の眞中にゐて、別に何も働かないで、御馳走ばかりもらひほかのものはただ働くだけで、うまいものは皆胃にとられてしまふのを非常に不平に思ひました。

ことにその中でも手と足とが一番不平に思つて、他のもの達と相談いたしました。

『諸君！ どうも我々はつまらない身分ではないか、
つらい仕事や、嫌な事はみんな、我々がやり、うまいものをたべるのは遊んでゐる胃袋一人である。馬鹿々々しい事である。』

これから一つ、足は食事の場所にゆくことをやめ、手は食べ物を口に入れることをやめ、歯や舌は食べ物をこなすことをやめ、喉は呑みこむことをやめ皆で胃袋を苦しめてやらうではないか』

『それはいい』

『それはいい』

と、それから、食事のしらせがあつても、足は歩るいて食堂に行くことをやめ、手は決して食べ物をお口にもつて行かうとしなくなりました。

ところが胃袋も飢ゑてきましたが、同時に手も足も、その他のものも皆飢ゑてきました。

そのままですつづけると、皆總だほれになりそうになりました。

そこで胃袋は始めて、自分の役目を説いてきかせ、他のものも始めてわかつたと云ふ話です。

かうした考^{かんがへ}違^{ちが}ひはよく、私達^{わたしたち}も起^{おこ}しやすいいものです。

勿論^{もちろん}ローマ人は平民^{へいみん}に手^てや足^{あし}となつて働^{はたら}いて貰^{もら}ひましたが、胃^ゐのやうに、うまいものを一人^{ひとり}じめにするのではなく、手^てや足^{あし}の方^{ほう}にも、それ^{それ}ぐにわけてやりましたので世^よの中^{なか}はよく治^{をさ}まりました。盛^{さかん}になつてゆきました。

どんな強敵^{かうてき}があらはれても、國中^{こくちゆう}が一つのからだの樣^{やう}に協^け力^{りき}一致^{いち}して戰^{たたか}つたものですからぐんぐん國^{こくりよく}力が伸^のびてゆきました。

世^よの中^{なか}で舉^{きよこく}國^{こく}一致^{いち}程^{ほど}強^{つよ}い力^{ちから}はありません。ローマの結^{けつ}合^{がふ}の力^{ちから}がどんな難^{なんくわん}關^{とつば}を突^{とつ}破^ぱしていつたかを、次^{つぎ}々に話^{はな}してゆくことにしませう。

2 戰 争 部 隊

ローマが盛^{さかん}になつてくれば、當^{たうぜん}然^{ぜん}こに衝^{しやう}突^{とつ}しなければならぬ大^{たい}國^{こく}がありました。それはギリシヤとの爭^{あらそひ}です。

ギリシヤは、ローマより一足^{あし}さきに、榮^{さか}えた國^{くに}です。

文化^{ぶんくわ}も進^{すす}んでいるし、國力^{こくりき}も張^はつてゐた國^{くに}です。インクの中にアテネインクや、プラトニンクなどありますが、そういふのはギリシヤの町^{まち}の名^なや、學者^{がくしや}の名^なをつけたものです。

それよりも四年^{ねん}に一度^どづつやるオリンピック競技^{きやうぎ}を知らない人^{ひと}はないでせう。この競技^{きやうぎ}は、近頃^{ちかごろ}新しく始^{はじ}まつたものであるが、然^{しか}しこれはもう二七〇〇年^{ねん}も昔^{むかし}に、ギリシヤ人^{じん}がやつてゐたのを真^ま似^ねしてはじめたものです。

その頃^{ころ}のオリンピック競技^{きやうぎ}は、今^{いま}のよりも、もつと人氣^{にんき}があり、そしてもつと力をいれてやつたものです。

ギリシヤで一番^{ばん}偉^{えい}い神様^{かみさま}がゼウスと云^いふのですが、その頃^{ころ}ゼウスをまつる一等^{とうりつ}立派^はなお宮^{みや}がオリンピヤにあつたのです。

そのオリンピヤで、この神様^{かみさま}をお祭^{まつ}りしようとして、ギリシヤ人^{ひと}が始^{はじ}めた大競技會^{だいきやうぎくわい}

がオリンピツク競技きやうぎです。そのほかに、彫刻てうこくでも建築けんちく、詩し、芝居しばゐ、學問がくもん、すべて、今の時代じだいでも、とても及びおよぶもつかぬ程ほど進すすんでゐたものです。領地りやうちもたいへん廣ひろくもつてゐて、イタリーの一部ぶもギリシヤの植民地しよくみんちになつてゐました。

今や將いまに起まさらうとしてゐる質實剛健しつじつがうけんなローマ人じんがこの不名譽ふめいよを捨てておくわけはありません。

しかし一方はうは大國たいこくギリシヤです。東西とうざいの諸民族しよみんぞくと幾度いくたびか大戰爭だいせんさうをしてきてゐる、戰爭せんの方法はうはふも、新しい立派りつぱな武器ぶきもたくさんあるギリシヤです。

イタリーにあるギリシヤの植民地しよくみんちは、だん／＼とローマにおかされてきましたから本國ほんこくギリシヤに援たすけをもとめました。そこでその頃ころの王様わうさまピロスは直たゞちに大軍たいぐんを率ひきゐてイタリー半島はんたうに上陸じやうりくしてきました。

あらゆる文明ぶんめいの利器りきをもつ三萬五千さんまんごの老大國らうたいこくギリシヤ軍と、新興しんこうローマ軍が一大會戰だいくわいせんをするといふのです。

りやうこく
兩國にとつての關原せきがはらの合戦かつせんです。

新興しんこうローマがおさへられてしまふか、ギリシヤをおしのけて、ローマが進すすんでゆくかの戦たたかひです。ローマ人も強いのですが、しかしギリシヤ隊たいの中には、その頃ころの世界せかいをふるへ上あがらせた長槍密集隊ながやりみつしふたいがあります。

殊ことにローマ人をびつくりさせたのは戦象部隊せんぞうぶたいでありました。

昔むかしのタンク隊たいです。

これはギリシヤ人じんがベルシヤやインドを攻めたときに、おぼえてきた東洋とうやうの戦法せんぽふです。

巨大きよだいな戦象せんぞうを第一線だいいせんに、側面そくめんに長槍密集隊ながやりみつしふたいを配陣はいちんして、突貫とつくわんしてきたのですから、流石さすが勇猛果敢ゆうもうくわかんなローマ人も手てが出だせません。

大體だいたいがローマ人じんは象ぞうといふ動物どうぶつを知らなかつたのです。

巨大きよだいな體軀たいくをした牛うしだと思おもつてゐたのです。

この鼻のながい牛は、グズ／＼してゐれば人間をふみつぶす、鼻でまき上げる、目茶苦茶にあばれまはる。まつたくの手の下しやうがありませんでした。

しかし愛國の精神に燃えるローマ人は舉國一致よく戦ひました。

當時のローマ人が如何に廉潔剛直な武士的美風を持つてゐたかの實例を話して見ませう。

將來大國家をつくり上げる様な國民の性質には流石立派なところがあります。

ローマとピロス王と一激戦をした後、捕虜を交換するためにファブリチウスと云ふ勇士がローマから使者としてピロスの陣中に送られました。

ファブリチウスは木村重成のように勇氣もあり、愛國の念も強く、心の正しい人として評判のたかつた人です。

ピロス王はファブリチウスをためしてやらうと思つて、たくさんのごちそうをしたあとで、めづらしいたからものをいろ／＼と贈物として呉れました。本國から持つて

きたものや、東洋印度の方面のたからものを山のように贈物したのであります。しかしファブリチウスは少しも喜ぶ風もなく、みんなかへしてしまひました。

そこで翌日はファブリチウスの勇氣をためしてみようとして、幔幕の蔭に大きな象を一頭しのばせておきました。ファブリチウスが入つてくるや、いなや突然幕を開かせました。巨象は忽ち現れて、其の大きな鼻で、彼の頭をボタンと叩いたのです。

けれどもファブリチウスは、泰然自若、につこりと笑つて、

「王よ、昨日の黄金も今日の巨獣も、われ／＼ローマ人を動かすにはあまりに、かるからう」

と、云つたので、流石のピロス王も深く感心し、捕虜全部を無條件で引渡したといふ事です。

ローマ人はたいへんに日本の武士に似てゐるではありませんか。

かうしたローマ人は、どんな窮地に陥つても決して屈服しませんでした。

負ければ、いよ／＼志をかたくし、敵の戦争のしかたや、武器を研究して、あくまで戦ふ。堅忍持久の國民でありました。

ギリシヤは、ながい事、ローマとにらみあつてゐたが、なか／＼に降服してこないのていよ／＼ローマの周圍の國と同盟を結び、一舉におしつぶしてやらうと、決心しました。

しかし、その頃はローマでもすつかり、ギリシヤ軍と戦ふ方法を案出してあつて、勇敢に防ぎたたかつたものですから、なか／＼に思ふようにかたづきませんでした。そこでギリシヤは例の戦象部隊をくりだして、ローマ軍を困らせてやらうとしたのです。

ローマの方だつて、そう幾度も戦象に悩まされる筈がありません。戦象部隊が第一線に現はれると、ローマ軍は待つてゐましたと、矢を雨のやうに射かけたので、大きな針鼠が出来上がつてしまいました。

そこへ、車の前に鐵棒を結びつけ、その端に鐵の籠をつり、その中に猛火を入れて之を象の鼻先に突きつけてきました。

さあ驚いたのは象です。動物は猛火が大きらひ、火を見ると、味方の陣に逃入つて目茶苦茶にあればだしました。あばれたした象は始末がわるい。ギリシヤ軍は逆に自分の方の戦象部隊のために、さん／＼に傷つけられてしまひました。

長槍密集隊に對しては、側面からはさみうちにする方法をもつてしたので、さすがのピロス王も南イタリヤのデンタツスに大敗して本國に逃げかへつてしまひました。かうしてチベル河のほとりの田舎町から起つたローマは、今や大國ギリシヤを打ち破つて、イタリー半島の大部分を征服してしまひました。

藤原氏を破つて都に入り、都の風にしみた平家は、勇猛果敢な鎌倉武士のために亡ぼされてしまひました。

美しい文化を築いた大ギリシヤでありましたが、愛國の至誠に燃ゆる田舎町のロー

マの勇敢ゆうかんさには勝かてなかつたのです。何十倍なんばいと云ふ領地りやうちと、進すんだ武器ぶきを持つてゐた

ギリシヤも、ローマに對たいして勝かつことが出来でませんでした。
強つよい國くにといふことは決けつして、大おほきな領地りやうちと進すんだ武器ぶきと、たくさんの軍隊ぐんたいをもつて

ゐることのみではありません。

國民こくみんの心こころがしつかりしてゐて、どんな困難こんなんにもうちかつてゆく堅忍持久けんじんちきうの力ちからが強つよい
かどうかといふことです。

『おごる平家へいけは久ひさしからず』といふように、立派りっぱな文化ぶんくわを産うんだ頃ころのギリシヤ人じんの心こころ
はだん／＼と弱よわつてきました。

一方はうは旭あさひのような勢いきほひで伸のびてきたローマですからたまりません。

一たまりもなくギリシヤは打ち破やぶられてしまひました。

三、伸びゆくローマ

1 海の女王カルタゴ

伸びゆくものは、あらゆる難關なんくわんを突破とつぱしてゆかなければなりません。

あらゆる難關なんくわんを越こえて、つき進すすんでゆく力ちからだけが伸のびてゆくのです。

どんな場合ばあひでも、困難こんなんなしに發展はつてんしていつたためしはありません。

丁度ちやうど日本にっぽんが、いま、世界せかいにむかつて、伸のびやうとしてゐる時ときなのです。祖國そこくにっぽん日本にっぽんは

朝日あさひのさし昇のぼる勢いきほひで發展はつてんしようとしてゐます。したがつて、苦くるしみや、困難こんなんは、當たう

然ぜんやつてくるのであります。

迷まよつた支那人しなじんが日本にっぽんと長期抗戰ちやうきかうせんをしやうとしてゐます。ロシアや、イギリス、フラ

ンスなどといった國が、その支那を助けてゐます。

イギリスや、フランスは國のなりたちや、國の様子がロシアと全然違つてゐます。

むしろ、ロシアはイギリスや、フランスの敵であるといった方がいいでせう。そういう國たちが一緒になつて、支那を助けてゐます。お互に睨み合ひをしながら、支那を助けてゐます。

イギリス、フランス、ロシアと云へば、これで全世界の半分以上の力のあつまりです。

これで日本の伸びゆく力をさまたげようとしてゐます。

私達は本當に心をひきしめて、どんな不自由でも、どんな苦しみでも、必ず我慢してやつてのけると決心をしなければなりません。

チベル河のほとり、一田舎町から起つたローマは一大強敵ギリシヤを破つたではありませんか。ギリシヤを破つて、イタリー半島を統一することが出来たのです。

しかも、ローマはこれだけで満足いたしません。はりきつたローマの力は國外にまでほとばしり出ないではいられなかつたのです。

ローマは更に一段と伸びようとしてゐます。更に一段と發展しようとしてゐます。だが、伸びる力の前には必ず難關が横たはつてゐます。この伸びんとするローマの前に横たはつてゐた力はとても支那などくらべものにならない程の怪物です。ローマはこの怪物をたたきのめさなくてはなりません。これからのお話と、現在の日本と、よく似てゐます。私達は神州日本國民です。ローマ人以上の力がある筈です。この話は私達にいろ／＼と教えてくれるところがたくさんあると思ひます。

では一體、伸びるローマの前に山の様にたちふさがつた怪力とはそも一體何者でせう。

それはアジヤのシリヤの北から起つたフェニキヤ人であります。

フェニキヤ人は商賣の上手な民族で、ギリシヤ人がまだ盛にならない頃から、地中

海かい一帯たいに船ふねを乗のり廻まはして、手廣てひろく商賣しやうばいをやり、そのために、行ゆく先々さきくに植民地しよくみんちをつくりました。

ギリシヤが興おこつてからは、東ひがしの方はうではギリシヤに押おされてきたから、次第しだうにイタリ
ーから西にしの方はうへ勢力せいりよくを伸のばしてゆきました。

そして、その一番大切ばんたいせつな根據地こんきよちがアフリカのカルタゴでありました。

カルタゴの町まちは人口じんこうは數十萬すうまんもあり、町まちの廻まはりは堅固けんこな城壁じやうへきで固かため、港みなとには出船入でふねいり
船ふねの帆柱ほばしらが何時いつも林はやしのように群むらりたち、そのころの世界せかいで一番富ばんとんだ町まちでありました。
地中海一帯ちゆうかいの商賣しやうばいは一手てにカルタゴが握にぎつてゐました。それを守る海軍かいぐんがまた世界
第一だいいちの大海軍だいかいぐんで、その乗組員のりくみんの軍艦ぐんかんの扱あつかひようのうまいことでは、他たに絶對ぜつたいに比くらべる
ものがない程ほどでした。

カルタゴはかうして、地中海ちゆうかいの支配者しはいしやであつたから、『海うみの女王せやわう』と云いはれたもので
す。

剛健ごうけんな精神せいしんと、強烈きやうれつな愛國心あいこくしんのあふれる勇敢ゆうかんな陸軍りくぐんで、イタリー半島はんたうを征服せいふくしたローマが、尙なほ、それ以上いじやうに發展はつてんしていかうとすれば、どうしても海上かいじやうに乗り出だしていかなければならない。

海うみには海うみの女王ぢやうわうカルタゴがゐます。

ローマ人は陸りくではギリシヤを破やぶつた自信じしんをもつてゐますが、海うみの方は不得手ふえてです。カルタゴの方は海うみでは世界せかい一いちです。

だが伸のびんとするローマはどうしてもカルタゴと衝突しょうとつする運命うんめいは逃のがれられません。新あたしく興おこつたローマと世界最強せかいさいきやうの海軍かいぐんをもつカルタゴとが、これからながいあひだ争あらそふことになりました。

2 ポエニ戦争役

イタリー半島はんたうを長靴ながぐつにたとへるならば、その爪先つまさきの向むかうに、三角形かくけいの大きな島しまがあ

ります。

それをシシリ島と申します。

この島の大部分はカルタゴの勢力の中に入つてゐました。

ローマと、カルタゴはせまいこの海峡を隔てゝ睨みあつてゐた譯です。

ところが、このシシリ島の中のイタリーよりのシラクサと云ふ町で騒動が勃發いたしました。

シラクサの人達はこの騒動を鎮めてもらひたいとローマに頼んで來たのです。

しかし、カルタゴ軍がシシリ島には駐屯してゐる。ローマが出兵すれば、どうし

てもこのカルタゴ軍と衝突しなければならぬだらう。カルタゴ軍と戦争すれば、先

づ勝つ見込みがたぬ。

相手は世界最大の海軍國であり、國力も充實してゐる國である。

勇猛果敢なる國民を擁するローマではあつたが、流石に迷つてしまひました。役人

達は兵をだすまいとすら考へたのであります、しかしローマの國民はたとへ百年でも

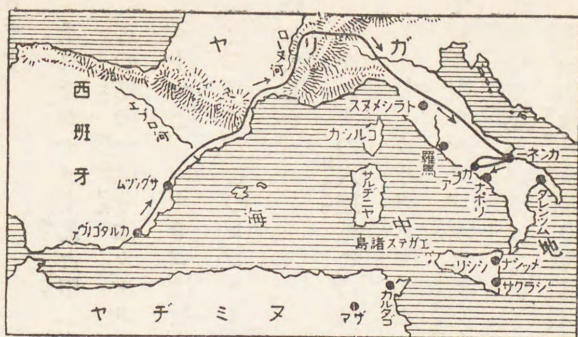
二百年でも必ず戦ひぬいて見せると、遂にシシリー島に兵を出すことにしました。

カルタゴは大いに憤つて、『生意氣なローマ奴』と直ちに宣戦を布告しました。

今より約二一七〇年程昔、西洋紀元がはじまる二四一年も昔のことであります。

そこでいよくこれまでの歴史で、最も大きな、そして、最もながくつづいたローマ、カルタゴの戦、ポエニー戦争の火蓋が切つておとされることになりました。

ローマの大非常時です。ローマは半島で海の中に



ポエニー戦争の地図

ある國くにです。しかもローマには海軍かいぐんはありません。カルタゴの海軍かいぐんはローマのぐるりをとりまくでせう。

これから前後ぜんご百年ねんにわたる一大長期抗戰だいちやうきかうせんが展開てんかいされるのです。

シシリー島たうに上陸じやうりくしたローマ軍ぐんは天てんを衝つく様な元氣げんきでぐんぐんと、カルタゴ軍ぐんを破やぶつてゆきました。

しかしシシリー島たうの西にしの方はカルタゴの得意とくいとする海軍かいぐんが守まもつてゐるために、なか／＼強つよく、流石さすがのローマの陸軍りくぐんでも陥おとしれることができません。

その中うちにカルタゴの海軍かいぐんはローマの本國ほんこくに出張でばつて行いつて、すつかり海岸線かいがんせんを封鎖ふうさしてしまひました。

これでは、海軍かいぐんを持もたぬローマは、絶對ぜつたいに勝かつことが出来できません。すつかり、弱よわつてしまひましたが、ローマ人じんは決けつして、へたばつてはしまひません。

かつて、ギリシヤの戰象部隊せんぞうぶたいに悩なやんだローマは、忽たちまち新あたしい戰争せんさうの方法はうほうを考かんがへて、

これを打ち破りました。

よし！ カルタゴが強い海軍をもつてゐるならば、こちらでも海軍をつくつてやう。しかも、カルタゴよりも強い海軍をつくりあげようと、戦争最中に不撓不屈のローマ人は決心いたしました。

勝つまでやらうと云ふのがローマ人の氣風です。國家のためなら、身を粉砕されても決して屈伏しないと云ふ義勇奉公の念の強いのがローマ人の美風です。

丁度、その頃イタリア沿岸の浅瀬に乗り上げて捨てゝあつたカルタゴの軍艦を一艘發見いたしました。

カルタゴの軍艦は、どこかの軍艦よりも、進んだ、大きいものです。

ローマではそれを手本として、たつた二ヶ月の間に大軍艦百艘、小軍艦二十艘をつくり上げてしまひました。軍艦をはじめつくつたローマ人です。まづたく驚くばかりの早業ではありませんか。

そればかりではありません。ローマは、ローマ特有の軍艦を、そして戦争の仕方
を考案いたしました。

カルタゴの軍艦をまねてつくり、カルタゴの海軍と同じ海軍を、ローマでつくりあ
げて見ても、とても、かてるものではないのです。

船をあやつり、船で戦争することにかけては、世界中、どこだつて、カルタゴに勝
てつこないのです。

さて、ローマには軍艦ができたが、海軍が一人もゐません。乗組員がないのです。
陸軍が船に乗つたつて、船がうごきません。しかし、陸軍が乗るより別に方法があ
りません。

そこで、ローマでは、どうしても陸軍が海上で戦ふのですから、カルタゴ人の得意
とした艦首の衝角で敵の艦腹を貫くとかわが艦腹で、敵の櫓を折りとつてしまふなど
と云ふ、むづかしい戦法は到底出来ません。

船を漕ぐことすらうまく出来なくて、ギリシヤ人を雇つた程ですから、ローマにはローマ特有の戦争方法が必要になつてくるわけです。

それは船の帆柱に吊り橋を吊し、それがどの向きへも自由に廻るようにし、その吊り橋の端にはすばらしい大きな釘を下向けにつけたのです。

海上で敵の船に出會えば、その側に近づき急いで吊り橋を下ろして二つの船を結びつけてしまふのです。かうなれば、もうしめたものです。強い陸兵が、その吊り橋を渡つて、敵艦に斬りこむのです。

弘安の役の時、蒙古の大船に斬り込んだ、日本武士によく似てゐるではありませんか。

これから戦況が一變いたしました。そのわけはこの吊り橋戦法が成功して、弱い手な筈のローマの海軍が、非常に強いカルタゴ海軍を苦しめたからです。

ローマの新海軍は、まづ最初にシシリー島の北の角の沖合ひで、カルタゴ海軍と衝

突いたしました。

カルタゴ軍は、何の猿の人眞似奴と突進してきました。

カルタゴ海軍は、その船が大きくて強く、その船の乗り廻しが上手ですから、敵の船の横腹に衝突して勝つ戦法をとりました。

ローマの方では、待つてゐました、とばかり、すぐに吊り橋を下ろして敵艦に渡し架け、その吊り橋を渡つて、敵の船に乗り移り、劇しく斬り込みました。

強いローマの兵に斬りこまれたらたまりません。そのまゝ、そつくりローマ軍に奪はれた軍艦が五十艘、その他の敵艦は、或は碎かれ、或は逃げて、ローマは初めてやつた海戦に大勝利を得ました。ローマは國をあげて喜びました。

四年の後に、第二回の大海戦が、こんどはシシリー島の南側の沖で開かれました。兩軍の軍艦併せて八百艘、これまでにない一大激戦でした。

カルタゴの海軍はしきりと衝突しようと、突進してくるのですが、ローマの軍艦は

待ちかまへてゐて、手早く吊り橋をひつかけ、勇敢に斬りこみ、カルタゴ軍はまたもむざ／＼と打ち破られ、三十餘艘は沈められ、六十餘艘は捕獲され、その他は逃げかへり、また／＼ローマの大勝利となりました。

かうして二十四年にわたる第一回ポエニ戦にはカルタゴが大敗いたしました。海軍を持たなかつたローマが、世界最大の海軍國カルタゴを打ち破つたのです。誰が考へたつて、ローマが勝つ筈がないのです。領地の點から云つても、お金の點から云つても武器の立派なものから云つても、決してローマは、カルタゴの敵ではなかつたのです。

その上にカルタゴは、ながい間榮えてきた國だし、ローマは建國して日尙淺く、イタリー半島を統一するのに、強國ギリシャと戦つてつかれてゐました。

第一回のポエニ戦争は二十八年も長い年にわたつて、戦つてゐます。

どうして、ローマは二十八年も戦をすることが出来たのでせう。一體、どうして

ローマがカルタゴに勝つ事が出来たのでせう。

このところは、私達がよく考へて見なくてはなりません。

とてもかてる見込みのない戦に勝つた。勝つには勝つだけのわけがなくてはなりません。そも／＼それは何であつたのでせう。何がローマの方がカルタゴよりすぐれてゐたのでせう。

それは全く、ローマ人の性質がカルタゴ人よりもすぐれてゐたと云ふ事なのです。カルタゴ人は、自分から第一線にたつて戦争をする事をきらつて、アフリカや、イスパニヤの土人を傭つて、兵士としてゐました。

ところが、ローマ人は全國皆兵、國民全部が兵役の義務を持つてゐて、しかもその兵士達が勇敢であり、義勇奉公の念に富んでゐたのです。

これです。給料を貰つて働いてゐる兵士と御國のために命を捧げて戦ふ兵隊と、それはどうしても力が違います。

備はれた兵士は、給料のために働くのです。給料を呉れなければ、したがつて、戦はぬといふことになります。

ローマの兵隊は祖國の爲に働くのです。これが強いのです。この力が何物をも打ち破つて進んでゆく力となるのです。

我が日本が何故強いのかと云ふことも判りますね、そして日本こそは一番強い筈だと判ります。ローマが強かつたのは、日本のような國であつたからです。

私達が銃をとつて第一線にたつのは、決して、自分の名譽や、お金の爲ではありません。せん。祖國日本のため、天皇陛下のために、一身を捧げて戦ふのですね、これこそは日本の誇りであり。日本の強いわけがらであります。そしてそれは召集されたからとか、義務だからと云ふのではなくて、かうしなければならぬ、尊い、日本人の血の流れが、私達にそうさせないではおかしいのです。

とにかくにも、ローマは勝つた、勝つたが二十八年も戦つて勝つたのです。戦争中

も戦^かちつづけたのみではありません。時には、ローマの艦隊^{かんたい}が全滅^{ぜんめつ}に近い^{ちか}うき目^めを見^みたこともあります。

全力^{ぜんりよく}をあけて戦^{たたか}つたのです。勝^かつには勝^かつたが、ローマの疲れ方^{つか}もずいぶんひどかつた譯^{わけ}です。

そこで恨^{うらみ}をのんで和議^{わぎ}を結^{むす}んだカルタゴはシシリー島^{たう}をさき、たくさん^{しやうきん}の償金^{しやうきん}をやることにしましたが、この仇^{かたき}はかならず、とつて見^みせると、國中^{こくちう}の人が齒^はぎしりをかんでゐるのですから、まだローマは油斷^{ゆだん}をすることが出来^{でき}ません。

これからカルタゴは百年^{ねん}もつづいて、ローマに寇^{あだ}をつづけるのです。そのうちにカルタゴには、天下^{てんか}の名將^{めいしやう}とうたはれるハンニバル^{はんにばる}が^で出てまいりました。

さて、ローマは、英雄^{えいゆう}ハンニバル^{はんにばる}をむかへてこの大非常時局^{だいひじじきよく}を如何^{いか}にきりぬけてゆくことでせう。

3 強敵ハンニバル

物の數にも思はなかつたローマに慘敗したカルタゴ人の血は無念にたぎつた。

何としても、この恥を雪がなければならぬ。泣き寝入りをしてはならぬとカルタゴ人はくやしがりました。

この代表者が、勇將ハミルカル・バルカスです。

バルカス將軍は誓つてローマを打ち破つて仇をうたなければならぬと思ひました。ローマに勝つには、第一にローマから受けた損害を補ふ方法を考へなければならぬ。そして、その上にローマと戦ふだけの準備をしなければならぬ。

この目的を達する爲にバルカスは、イスパニヤ征伐をする事に致しました。

イスパニヤを征伐して、そこでローマと戦ふ準備をすすめることにいたしました。

バルカスは大望を抱いて、故國を去るにのぞみ、やうやく九歳になつたばかりの子ハンニバルを、國神の神殿前に連れて行つて、熱い涙を流しながら言ひました。

『ハンニバルよ！



ル バ ニ ン ハ

お前はまだ子供であるが、父の言葉を、よく聞きなさい。

ローマ、あのローマは實に憎い國ぢや、祖國カルタゴに再三恥をかゝした敵ぢや。これに怨を返すことは瞬く隙も忘れてはなりませんぞ』

少年ハンニバルの瞳は熱し、輝いた。

『父上！』

命のあるかぎり、祖國カルタゴのために、誓つてローマを打ちほろぼします』
そう言つて、神殿にむかひ

『神よ願はくば我等父子にローマを討たしめ給へ』
と、父と共に祈りました。

かうして、電火將軍と云はれたバルカスは、一族郎黨を引きつれて、イスパニヤに渡りました。

それから八年程は月日が水のやうに流れ去りました

その間、ハミルカル、バルカスとハンニバルとの復讐心には少しも變りはありませんでした。

父子は兵卒と共に汗と血にまみれて、イスパニヤの大部分を征服いたしました。

土人を征服して、大きな軍隊も作りしました。銀山を掘つて、軍資金も出来ました。

準備が著々と進んで、今やローマ攻撃の時の来るのを待つてゐましたが、残念なことにバルカスは蠻人との戦ひに討死し、空しくローマの天を睨んで異國の土となりました。

この父の後をついでたつたのが、當時十九歳の青年ハンニバルです。

ハンニバルは生れつき賢く、元氣のある立派な若者でした。

カルタゴの將兵達は、ハンニバルの温かい情と、その賢さうな人となり心をはかれました。

猛將ハミルカルの血をうけ、戦争の中に育ち、體格强健、百般の武技に長じ、心身

共に戦場の艱難に慣れ、一週間は眠らず食はずにゐて、しかも疲勞をしなかつたと云ふハンニバルです。

戦争の方法がうまく、やりかたが機敏で、立派な大將としての資格をもつてゐました。そこで、カルタゴ人は、ハンニバルを神様のようかみさまに敬ひ、とう／＼大將軍に押したてました。

大將軍になつてからも、彼は兵卒と共に苦勞を共にいたしました。自分ばかりゆつくり眠るようなことは決してしませんでした、番兵の立番してゐる横にごろりと横になつて、夜をすごすこともありました。

こんな風でしたから、カルタゴの兵士達はこの大將のためならば、身も心も捧げたと思ふようになりました。

ローマにとつて恐ろしい強敵が出現したわけでありま

す。あけくれ、ハンニバルの胸を波立たしめてゐるものは、無念の涙を呑んで異國の土

に化^{くわ}した父^{ちち}の心^{こころ}であり、ローマ復讐^{ふくしゅう}のことばかりであります。

しかも兵力^{へいりきよく}はととのひました。軍資金^{ぐんしんきん}も十分^{ぶぶん}です。ハンニバルの胸^{むね}の血潮^{ちしほ}は燃^もえたちました。臥薪嘗膽^{ふしんじやうたん}二十年^{ねん}。宿望^{しゆくばう}を果^はたす準備^{じゆんび}は出^で来^き上^あつた。

おゝ、祖國^{そこく}カルタゴよ、今^{いま}や熱血^{ねつけつ}の青年^{せいねん}ハンニバルが、一鞭^{いちち}あげれば、雪辱^{せつじよく}の火蓋^{ひぶた}は切^きつておとされるのだ。

東ローマの天^{てん}を睨^{にら}んで、ハンニバルは獨^{ひと}り微笑^{ほゝえ}んだ。

征^ゆけ！　ローマへ！　ハンニバルの腫^{ひとみ}は熱血^{ねつけつ}に燃^もえてゐます。

まこと、ローマは風前^{ふうぜん}の燈^{ともしび}と云^いはなければなりません。

4 峻嶮アルプス越え

果然^{くわぜん}、ハンニバルは起^たち上^あつた。

父^{ちち}の遺志^{ゐし}だ、祖國^{そこく}の仇^{あだ}だ、十萬^{まん}の軍勢^{ぐんせい}に命^{めい}令^{れい}が下^{くだ}つた。

途中、ローマの植民地を、軍門の血祭りにあげて、旗鼓堂々ローマ出征の進軍が開
始された。西暦紀元二一八年前、我が孝靈天皇の七十三年である。第二回ボエニ戦
争はかくして破裂しました。

エプロ河をわたり、ガリヤを過ぎ、イタリア半島を目指して、無敵ハンニバル軍は
勇ましく進軍いたしました。

しかし、イスパニヤからローマに攻め入るにはあの有名なアルプスの嶮を越えなけ
ればならぬ。二萬尺富士山の二倍もあらうと云ふアルプスの峻嶮がカルタゴ十萬の
軍勢の前に立ちふさがつてゐます。

義経のひよどり越えどころのさはぎではありません。流石のローマも、アルプス山
脈には氣を許してゐます。

今でも、十分の用意をして登るに危険な山脈です。勿論四季を通じて雪にとざされ
てゐます。雪崩は時を定めずにやつて來ます。ハンニバルがアルプスの麓に著いたの

は十月も、もうすぎた秋の終です。軍隊は南歐イスパニヤに生れた、暖國育ちです。未だに越えた人のないアルプス峠のふもとにハンニバルの軍勢は到着いたしました。山を越えれば仇敵ローマです。

盾を眞一文字に結んだ剛毅果斷の將軍ハンニバルは、雲の中に聳ゆるアルプス山脈を望んで高らかに叫びました。

『進軍！』

實に前古未曾有の一大壯舉です。

二萬尺を越ゆる高峰は、眞白な雪に覆はれて、雲を貫ぬき、天に連つて數百里の間に横たはつてゐます。

はてしなくつづく道を、カルタゴ軍は肅々と登つてゆきます。

陣頭に立つハンニバルの姿に魅せられた様に十萬の軍勢は登つてゆきます。

歩兵、騎兵、輜重兵、戦象隊、氷雪を蹶つて、堂々と登つてゆきます。

嗚呼、アルプス越え！　とても人間業とは思はれません。決死の進軍です。

道もありません。吹雪と雪崩です。鳥や獣のやうに敏捷な野蠻人の襲撃があります。

蠻人どもは峯から大きな石をころがします。寒さと、飢と疲れが襲つて來ます。

流血をもつて、積雪をそめつゝ、日々數千人の犠牲を出しながらも、ハンニバルの

志は屈しません。一步は一步よりも高く、九日目にはとう／＼頂上に達しました。

見よ、眼下にはイタリアの平原が一瞬の中に遙々と展開されてゐるではないか。

夢にも忘るることの出来なかつたローマだ。ハンニバルは全軍を顧みて、

『諸君！

仇敵ローマは我が足下にあり

汝等は己に勝利者なり。』

兵士達はわつと感激の歡聲をあげました。

勇氣百倍して、進撃の歩を進めました。かくして十五日目、突如としてイタリア平

原にカルタゴの軍勢があらはれたのだ。

感激に狂ふカルタゴ軍が現はれたのだ。

驍將 ハンニバルが現はれたのだ。

全ローマは驚愕に色を失つた。

ローマからは直ちに四萬の大軍がさしむけられました。十萬のカルタゴ軍も無事にイタリーに到着したのは僅かに二萬六千、象は十數頭しかなかつたのです。

ハンニバルは山を出てから三日もたゝない中に、この大軍に襲はれることになりました。

そこでハンニバルは全軍を集めて、

『諸君！

後にはアルプスの山があるのだ。前には、ポー河が流れてゐる。

我々はどこにも行けない。負けたら一人残らず死なねばならないぞ』

と、悲壯な面持ちで述べました。

この苦しい氣持ちは全軍に電氣のやうに傳はりました。

勝つより他に生きる道がない！

カルタゴ軍は、まこと、命がけで戦ひました。命がけの力はおそろしい。小勢の、しかも疲れきつてゐる筈のカルタゴ軍は、見事に、ローマの大軍を破つてしまひました。この第一戦勝の後、ハンニバルはとん／＼拍子にローマの軍勢と、戦つては勝ち、戦つては勝つて、だん／＼と深く攻めいりました。

北部イタリアの植民地は、ハンニバルの勢におそれて、皆ローマに叛いて、ハンニバルの味方となり、ハンニバルの軍勢は次第に補充されてきました。

めざすローマも次第に近くなつて來ました。

全軍の意氣ます／＼さかん、天を衝くの慨がありました。

全軍は、勇みに勇んで南へ、南へと進軍いたしました。

ローマの一大非常時です。

兵を用ゆること神の如し、復讐の權化ハンニバルの軍勢は次々にローマの軍勢を打ち破つて進みます。

敗報に敗報のつづくローマの町は、失望と恐怖に慄きました。

しかし艱難に耐へ忍ぶことのすぐれたローマ人は、直ちに勇氣を恢復して、新に軍隊を編成しては、北へ北へとハンニバルを迎へ討つ爲に出發してゆきます。

そしてローマ軍も次々に敗れていくのです。トラシメヌ湖畔の戦の如きは、激戦數刻にして、ローマ軍は慘敗し、斬られる者、湖水におぼれる者、數知れず、總大將は討死し、捕虜六千を残し、その他の者はチリ／＼となつて逃げ去りました。

シシリ島の戦でカルタゴの大艦隊を破つたローマの元氣は、一體どうしたのでせう。ハンニバルには遂にローマも勝てないのでせうか。出陣しても出陣しても皆敗れてかへつてきます。

そしてローマの町まちの目前めのまへにハンニバルは逼せまりました。

5 カンネーの戦

ハンニバルは、まこと、天下てんかの名將めいしやうでした。根據地こんきよちイスパニヤとは、アルプス連峯れんぱうでたたれ、本國ほんこくカルタゴとの間あひだは數百哩すうまいの大海原おほうなばらです。

それでも、次々つぎと、途中とちうの民族みんぞくをしたがへては、自分じぶんの軍隊ぐんたいにしてゆくのです。

流石さすがのローマも手てが出だしかねてゐました。それでも放はつてはおけません。次々つぎと軍隊ぐんたいを送おくります。最後さいごの一人ひとりになるまで戦たたかふと云いふのがローマ人じんです。

またも八萬まんと云いふ大軍たいぐんを組織そしきして、ハンニバルにあたる事ことになりました。

しかし名將めいしやうハンニバルは味方みかたの二倍ばいにあまる大兵たいへいをむかへて、ビクともいたしません。

カンネーの野のに迎むかえて、大暴風だいはうふうの日ひを選えらんで決戦けつせんをいどみました。

この日は、突風が砂塵を高く捲き上げて、空の日も暗い程でありました。大軍に混戦するには絶好の天気です。

ハンニバルは風上に陣を布いて、ローマ軍に攻めかかりました。

ローマ軍は、濛々たる砂塵に、顔も上げられません。ハンニバルは得意の三方の陣をもつて攻めたてました。正面五列に長槍隊をならべ、右左に弓矢隊を配して、ローマ軍を包圍してゆく陣形です。

かうして、カルタゴ軍は煙のやうな、砂塵にかくれて、ローマ軍を包圍し、激烈なる一大決戦が展開しました。

吹きまくる、砂塵に混戦する兩軍の將卒は筆にも、言葉にもつくされぬ大激戦を演じました。戦象部隊はタンクの様にあばれ廻る。身輕な騎兵隊は風よりも速やかに突きまくる。

カルタゴ軍に包まれてしまつたローマ軍も、國民の興望をになつて、よく戦ひまし

たが、ハンニバルの戦略に陥つてバタ／＼と、それは、あだかも、草でもなぎ倒すように討ちとられてゆきました。

驚くばかりの多数の死傷者を出して、ローマ軍はまたも大敗してしまいました。八萬餘の大軍で戦死したものが、歩兵四萬五千、騎兵二萬七千、二人の大將の中、一人は討死し、捕虜になつたものが一萬餘人と云ふのです。

まつたく、壯烈を極めた激戦でありました。カンネーの野には死骸の山が築かれました。

負け残つたローマ兵は、恐怖にかられ、元氣衰へ、今はローマを見捨てゝ逃走しようとする者さへあらはれました。

その時敢然として、彼等の前にたちふさがつた、紅顔の美少年がありました。スキピオと云ふ十八歳の少年です。刀を抜いて大音聲に、

『祖國ローマを見捨てる者は誰か！』

ローマ人の名譽めいよを汚けがす者は成敗せいばいして呉くれん。』
と、馬上ばじやうに叫さけびました。

『ローマ！』

その言葉ことばに、彼等かれらは再び元氣げんきをとりもどしました。

『ローマのために』

勝ちほこるカルタゴ軍ぐんを望のぞんで掌てのひらを握にぎりしめました。

少年スキピオは疊々でふふとして横よこたはる味方みかたの死骸しがいを指ゆびささして、

『見よ！ 祖國そこくの勇者ゆうしやを、』

ローマの光榮くわうえいと、ローマの名譽めいよのために戦たたかつた勇者ゆうしやを、

我々われは誓ちかつて、彼等かれらを犬死いぬじにさしてはならぬ。

我等われは誓ちかつて、ローマの敵てきをほろぼさなければならぬ』

この少年せうねんの言葉ことばは、全軍ぜんぐんに神かみの言葉ことばのようにひびき渡わたりました。

この敗戦はいせんのしらせはローマの町まちに傳つたはりました。

精銳せいえい八萬まん八千のローマ軍ぐんこそは、ハンニバルをたたきのめしてくるに違ちがひないと、

ローマ市民しみんは信しんじてゐました。

ローマ市民しみんは、カンネーからの使者ししやをとりまきました。

カンネーからの使者ししやは悲憤ひふんの聲こゑをはりあげて、

『みなさん！』

カンネーの大激戦だいきせんに、味方みかたは殆ほとんど全滅ぜんめつです』

市民しみんはうめいて、おどろきの聲こゑをあげた。しかしローマの大將たいしやうファビウスは靜しづかに、

『エミリウス將軍しやうぐんはどうした？』

市民達しみんたちはなりをしづめて使者ししやの顔かほを見守みまもつた。

『カルタゴ軍ぐんに包圍はうゐされて、味方みかたは總崩そうくづれです。鬼神きじんのように奮闘ふんせんしたエミリウス將しやう

軍ぐんは、満身まんしんに傷きづをうけて、立つことも出來ぬ程ほどでした。馬うまもたほれてしまつたので

す。

私が、私の馬に乗つて落ちのびてくれと、涙を流してすすめたのですが、俺は死ぬまで戦ふんだと、またもや、馬の背にしがみついて、カルタゴ軍の中に突入してゆきました。」

市民の腫には感激の涙が光りました。

『パロー將軍は？』

『パロー將軍は僅かの手勢を引き連れて、危いところを逃れました。もう一戦やるつもりで……』

『もう一戦！』

フアビウスは力強く叫びました。

『もう一戦！』

市民達もそれに和して叫びました。

完くローマ人は偉い國民です。

カンネーの報がつたはると、南イタリーの大部分はもとより、遠いマケドニヤ、近いシシリ島も、みなローマを離れて、ハンニバルに同盟を結びました。

ハンニバルの得意の時代です。

そして宿望のローマの町をかこみました。ローマはカンネーの敗戦で若者の大部分を失つてしまひました。

そして、その上にカルタゴ軍に包圍されてしまひました。

しかもなほ不屈の精神を揮ひ起して、更に老人も、子供も、奴隸も、罪人も、武器をとり得る者は皆集つて、新軍を組織して、あくまでもハンニバルと戦ふ決心をいたしました。

おどろくべき根強さです。堅忍持久、不撓不屈、この強いローマ人の精神の前に流石のハンニバルも手をやきました。

ローマ人を全滅させざる限り、ハンニバルは最後の勝利を得る事は出来ないであらう。

6 ローマ遂にカルタゴを敗る

十八年間、ローマは負け戦をつづけて、ハンニバルに抗戦しました。

若者の大部分を失ったローマは、尙戦ひつづけました。

首都ローマをかこんでしかもハンニバル將軍は最後の勝利を得る事が出来なかつたのです。

その中にローマには。スキピオと云ふ偉い人物が現はれました。

スキピオは先にカンネーで敗戦の將士を上げました少年です。

スキピオはローマの救世主としてあらはれました。彼は若い身をもつて、ローマ軍を率ゐ、ハンニバルの根據地イスパニヤに遠征して凱旋いたしました。

本國ほんこくの負けつづきで、しかも首都しよとまで包圍ほうゐされてゐる時に、敢然かんぜんたつて、敵てきの根據こんきよ地ちを突ついた青年せいねんスキピオ將軍しやうぐんの意氣いきはまた、さかんなものであります。

スキピオは、ハンニバルに勝かつ方法はうほうとして、ハンニバルの後方こうほうの連絡れんらくを絶たつ事ことにあると思おもつたのです。

それは丁度ちやうど、神功皇后じんこうくわうごうが熊襲くまそを征伐せいばつするには、その後しうだてをしてゐる三韓さんかんを討うつにあると、お考かんがひになつたのと似にてゐます。

スキピオはイスパニヤをうづばかりではなく、ハンニバルの同盟者どういしやに拔ぬけ目めなく、手てを廻まわしてハンニバルに、援軍えんぐんを送おくらないようにしておきました。

イスパニヤの本國ほんこくには、ハンニバルの弟おとうとハスドルバルが留守るすを守まもつてゐましたが、あまり突然とつぜんのスキピオ軍勢ぐんせいに一たまりもなく敗やぶれてしまひました。

この頃ごろ、ハンニバルは、今いま一いきと云いふところまで、きてゐるのに、なか／＼ローママが頑強ぐわんきやうに抵抗ていかういたしますので、どうすることも出来ないで、困こまつてゐました。

諸方の援軍が集つたら一舉に總攻撃してやらうと思つてゐるのに、一向集つてきません。流石のハンニバルも、今は本國の弟ハスドルバルに頼る以外に方法がありません。

スキピオが凱旋したあとに、ハンニバルから援軍の依頼狀が來ました。そこでハスドルバルは先年の敗戦への報復と、直ちに新軍をとゝのえて、遙々とイタリアに向つて進發いたしました。

ハスドルバルはイタリアに入り、待ち受けてゐる兄の方へ急いで使を出しました。

しかし、ローマの方でも嚴重に警戒してゐましたから、その使ひは途中でローマ軍に捕へられ、ローマでは、その手紙でハスドルバル軍の行く途を知りました。

そこで、ローマ軍は途中に待ち伏せ、不意を襲つて打ち破り、ハスドルバルは討死をしてしまひました。

そんな事は夢にも知らぬ、兄のハンニバルは、北方の天を望んで、毎日々々、弟

の到着を待ち焦れてゐたのでした。

ローマ軍はハスドルバルの首をとつて、ていねいにハンニバルの陣中に送り届けてやりました。

弟が首になつて突然に送り届けられた時はさすがに、鬼をあざむく猛將ハンニバルも、思はず、涙を流し、天を仰いで、

『あゝ天命である。』

わがことも止んだ

カルタゴの運命も汝と共に去つた』

と、すゝり泣いたといふことです。

昨日までローマを打ちなびかした神のような偉人も、もはや運命が傾きはじめたのです。

一方、スキピオはイスパニヤから華々しく凱旋すると、次いで、カルタゴ本國に遠

征せいいたしました。

更生かうせいのローマを代表だいひょうするスキピオの軍勢ぐんせいはカルタゴに上陸じやうりくすると、たちまちにして、カルタゴの諸軍しよぐんを破やぶり首都しやうとカルタゴに逼せまりました。ローマ人は都みやこを猛將もうしやうハンニバルに包圍はうゐされながらも、敵てきの都みやこを遠征えんせいする勇氣ゆうきをもつてゐました。カルタゴは都みやこをかこまれて大いおほに驚おどろき、はるくくと遠征えんせいしてゐるハンニバルに救すくひを求めなければならぬ程意久地ほどいくちがなかつたのです。急使きふしをハンニバルのところへ飛ばとしました。

思おもへば九歳きうさいの時とき、神かみに誓ちかつてローマを滅ほろさうと、父ちちにつれられて、イスパニヤに移うつつてから三十五年さんごねん、アルプスの峻岨けんそを越こえて、ローマに攻めいり、北きたに南みなみに敵軍てきぐんを惱なやまし、ローマ人の心膽しんたんを寒さむからしめた英雄えいゆうハンニバルも、今いまや事こと、志こころざしと違ちがつて、ローマ征服せいふくの望のぞみも少すくなくなつて惱なやんでゐる時とき、突如とつじよ、本國ほんこくの危急きふを知らせて來たのであります。

彼かれの心中しんちゆうはどんなであつたことであらう。遂つひに決心けつしんして、彼かれは全軍ぜんぐんを統すべて本國ほんこくに

引きかへしました。

さうしてカルタゴの南方ザマといふところで、スキピオと一大決戦を試みたのですが、英雄の知略も、傾むく運命には勝てず。スキピオ軍のためにさんぐに敗られてしまひました。

一度は敵首都ローマにせまつたカルタゴも、もはやローマを破る道はまつたくなくなつてしまひました。降参するより外ありません。

イスパニヤをローマに割き、すばらしい償金を拂ふ約束をし、軍艦は全部ひきわたして遂にローマの軍門に降りました。

ローマは遂に勝つたのだ。

幾多の尊い犠牲の血を流した、ながい苦しみに堪え忍んで來た。

ローマは遂に勝つたのだ。

ローマの喜びはどんなであつたでせう。すべての神殿は、扉をひらき、三日の間盛

んな謝恩しゃおんのお祭りまつりがありました。また赫々くわくくたる武勳ぶくんを輝かがやかして、勇將ゆうしやうスキピオがローマに凱旋がいせんした時も全市ぜんしは沸わきかへつて歡迎くわんげいいたしました。

ハンニバルは後故國のちてこくカルタゴを逐おはれて、遠くアジャの片田舎かたるなかにローマの空そらを睥にらみながら非業ひごふの死しをとげてしまひました。カルタゴも間もなく亡ほろびてしまひました。ローマは、今やカルタゴの領地りやうちを併あはせ、マケドニア、ギリシヤを併合へいがふし、かくて西にしはイスパニヤから、東ひがしは小アジャまでの實じつに廣大な領地りやうちをもつ國くにとなりました。實じつに古代だいローマは奮闘ふんたうの歴史れきしをたたかひ拔ぬきました。

ムツソリニー首相しゆしやうが

『ローマを思おもへ』

と、國民こくみんを鼓舞こぶするのは、決して、これから後の華やかはなな大ローマを指ゆびさすのではないのです。堅忍持久けんんにちきう！苦闘くたうの歴史れきしを指ゆびさして云いふのです。このローマの意氣いき、この意氣いきこそなにものを、打うちちしりぞけて完成くわんせいさす力ちからでなければなりません。

四、大英雄ユリウス・ケーザル

1 投げられた骸子

次々と強敵を破つて、今から二〇〇〇年も昔に、ローマは世界第一の國となりました。

榮えたギリシヤの文化はローマに移りました。四方の富はローマをさして流れ込みました。

上流社會の人は豪壯美麗な大邸宅を構へ、數百の奴隸を使つて、思ふ存分な豪華な生活をするようになりました。

しかしそれと共に大切な建國以來のローマ魂は次第に消え、質朴剛健な風は去つ

てしまひ、道德は腐敗して、自分の利益ばかりを考へ貪るようになってしまひました。満つればかくるのが世の習と云ふのでせう。成功すると人間の心はゆるみ易いもの

です。

そして、こんどは、だん／＼と衰えてゆくのです。注意しなくてはならぬ事です。

古代ローマ人の心を何時までも忘れずに、しっかりと胸にたたみこんでゐたら、恐らくローマは永遠に平和であり



ルザーケ・スウリユ

榮えた事でせう。

最後のカルタゴ征伐に出掛けた小スキピオ將軍（スキピオの子）は炎々として燃え

さかるカルタゴを望み見て、

『アッシリヤは既に亡び、ペルシヤ、マケドニヤも亦滅びた。而して今やカルタゴは火中に在る。』

噫々、想ふに、ローマの滅びる日も亦次いで来るであらう！』

と、嘆息したとの事であります。

ローマも外敵がなくなると、こんどはお互に國內で相争ふようになりました。

ローマの缺點は王様がなかつた事です。王様がありませんから、立派な法律をつくり、世の中がうまく治まるように工夫をこらしたのですが、お互に政治の權力を握らうと競争するようになります。

そのために、人を陥れる、友達を亡ぼすと云つた工合の争が起つてまいりました。世界的大英雄ユリウス・ケーザルも亦かうした犠牲に斃れていつた人です。西洋では英雄と云ふと三人をあげます。マケドニヤのアレクサンドル大王、フラン

このナポレオン、そしてローマのケーザルです。

世界の三大英雄の一人が大ローマに現はれました。

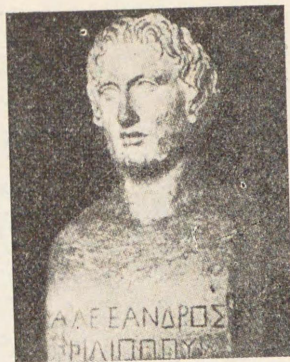
勿論ローマ第一の大人物です。政治家としても、軍人としても、これ程の人は前後にないのです。

彼は曆法、天文、土木、法律等、學問として通じないものはなく、また筆をとつては立派な文章を後世に残しました。

永い間の内輪の争ひで、傾きかけた大ローマ國の建て直しをやり、千載の後まで、誇るべきローマ帝國の基礎をつくつたのは、實にこのケーザルの手腕であつたのです。ケーザルは早く父を失ひ、賢い母の手によつて教育されました。幼い時は病氣ばかりしてゐた弱々しい子供でした。

しかし、食べものに氣をつけ、武藝をはげみ、克己の力によつて健康の人となりました。

その姿は瘡^{すがた}せて女^{をんな}の様^{よう}でした。しかし元氣^{げんき}は人並^{ひとなみ}以上^{いじやう}でありました。幼^{をさな}い時^{とき}から、海^{かい}外^{がい}を渡^{わた}りあるき、十分^{ぶん}にその天^{てん}才^{さい}をみ^みが^がき^きま^まし^した。彼^{かれ}はマケドニヤのアルクサンドル大王^{たいわう}を深^{ふか}く尊^{そん}敬^{けい}してゐ^いま^まし^した。



王大^{たいわう}ル^るドン^{どん}サ^さク^くレ^れア^あ

涙^{なみだ}を流^{なが}して、

『大^{だい}王^{わう}は自^じ分^{ぶん}の年^{とし}齡^{とき}の時^{とき}には、既^{すで}に全^{ぜん}世^せ界^{かい}を征^{せい}服^{ふく}してゐ^いたのに、今^{いま}自^じ分^{ぶん}は何^{なん}もしてゐ^いない』

と、嘆^{なげ}きま^まし^した。

ある人^{じん}物^{ぶつ}で、ナポレオン大^{たい}帝^{てい}すらも、二十^{にじゅう}五^ご歳^{さい}の時^{とき}に、

『あゝ、このち^ちつ^つほ^ほけ^けなヨ^よーロ^ろッ^ッバ^バなん^{なん}か^かと^ともつ^つま^まら^らない舞^ま臺^{たい}だ^だな』
と、云^いつ^つて、到^{たう}底^{てい}アレ^れクサ^さン^んド^るの^のよ^よう^うに、自^じ由^{いう}に東^{とう}洋^{やう}迄^{まで}も戦^{せん}争^{そう}に出^でら^られ^れない身^み分^{ぶん}を

つくぐと唧かこちました。

ナポレオンは二十五歳さいになつても、まだ砲兵士官はうへいしきわんにすぎなかつたのに、アレクサンドルは、その齡としに、ギリシヤがどうしても勝かてなかつた長年ながねんの敵てきペルシヤと大戦争だいせんそうをしてそれを目茶苦茶めちやくちやくに打ち破やぶつてゐたのです。

實際じつさい、アレクサンドルの傳記でんきは後世こうせいの若者わかものの心を發憤はつぶんさせるに、大きな力ちからがあります。

アレクサンドルは、小さい時ときに、父王ちいわうがたくさんの國々くにを征服せいふくするのを見て、友達ともだちに悲しげに打ち明あけたものです。

『おゝ、僕ぼくのやることが、みんななくなつてしまふ』

かうして悲かなしみました。

二十歳さいで父ちちの後あとを繼ついで王様わうさまになると、彼かれの華々はなぐしい活動くわつどうが始まるのです。

先まづ第一番だいいはんにギリシヤを屈服くつぷくせしめ、ペルシヤを打ち破やぶり、進すすんでエジプトに迄遠とほく

征せいしました。そして近臣きんしんに、

『エジプトの西にしには何かあるのか？』

と、尋ねました。近臣きんしんは、

『大沙漠だいさばくだけ、どこまで行つても、焼けるような砂すなしかありません』

そこで、大王たいわうは、アジャへ引きかへし、バビロンを始めはじめペルシャを破りやぶ、中央アジャへ進みすす、そして雪ゆきを戴いたく山やまに登のぼつて下界げかいを見下ろし、北方ほくほうのさびしい地方ちほうを望のぞんで、

『あれを越えこると、何かあるのだ？』

と、部下ぶかに尋ねました。

『凍こほつた沼地ぬまちだけ、いくら行つても雪ゆきと氷こほりだけであります』

大王たいわうは吐息といきをついて、軍ぐんを南みなみにかへし、印度インドの榮さかえた町まちを次つぎから次つぎと攻めとり、大イ
ンダス河かの岸邊きしべに立つて、これを越こしたものがどうかと、考かんがへあぐんでゐました。

兵隊共へいたいどもは、そんなに進すすんでは、故郷こきやうにます／＼遠とほざかつて、何處どこへ消きえてしまふか

も判らないと、心配して、

『もう、どうしたつて行けません』

そこで、大王は大河を指しながら、

『このすばらしい河の東には何かがあるのだ』

と、尋ねました。

『深く茂つた森だけ、いくら行つてもそれだけでございます』

大王はもつと、東まで攻めたかつたのですが、これを聞いて仕方なしに、船をつくつてインダス河を下り、大海に出ました。

『この向ふには何かがあるのだ？』

と、又大王は尋ねました。

『人氣のない、波と水だけ、いくら行つても深い海しかありません』

と、答へました。すると大王は、

『そうか、すると、人間の全世界はすつかり、朕が領土か、東西南北、朕が征伐するところは、もうなくなつたのか、だが考へて見れば何と小さな王國なんだらう』と、叫んだと思ふと、どつかり坐つて、さめくと泣き出したと云ふのです。

アフリカからヨーロッパ、東洋に跨る大國を建設して、まだ満足しなかつたアレクサンドル大王の心は本當に大きいものであつたと云つていゝでせう。しかも戦へば必ず勝つ、行くところ皆草の風になびく如し、と云ふ有様であつたと云ふのです。

すごい王様もあつたものです。

ケーザルは、この大王を心から崇拜してゐたのです。そして、ついに大王と並べられて、世界から尊敬される程の英雄となつたのです。

ケーザルは、ローマのために、アルプスを越え、ガリヤを征伐しました。

ガリヤといふのは今のフランスです。

そしてまだ、この頃は、文明の低い野蠻人が、たくさんゐて、恐ろしい野獸の住む

森林らんりんが一面めんにあつて、高い山たかや暗い谷くらが路みちをふさいでゐました。それをすつかり平たひらげて遠くイギリスの方はうまで、従したがへてしまひました。ローマの市民しみんは狂喜きやうきして、

『あゝ、もうガリヤの野蠻人やばんじんが、アルプスを越こえて、ローマを襲おそつて來くることはな
い。

アルプス山さんなんか凹へませろ！

あんな城壁じやうへきなんかもう要いらないのだ！』

と、喚わめきました、ケーザルの名聲めいせいは、飛とぶ鳥とりを落おとす程ほどの勢いきほひでした。

その頃ころ、ローマには、ケーザルと同じ位おなの權力くわんりよくのある人ひとがもう一人ひとりゐました。

ポンペユウスと云いひます。ポンペユウスはこの國家こくかの功勞者こうろうしやケーザルが、評判ひやうばんのよくなるのを、たいへん嫉ねたましく思おもひ、ローマに於おける軍事ぐんじの大權たいけんを握にぎり、ケーザルを免職めんしよくし、その率ひきゐてゐる軍隊ぐんたいを取り上あげようとしてました。

そこで、ポンペユウスはガリヤにあつてローマのために、大功たいこうを立てゝゐたケーザ

ルに、國家こくかの名をもつて呼び返かへしました。

それには、期限きげんまでに歸かへつて來なければ、國賊こくぞくとみなすとありました。

ケーザルは、この本國ほんこくからの命令めいれいを聞いて怒おこりました。

ただちに、部下ぶかの將卒しやうそつを集めて悲壯ひさうな態度たいどで、その無法むはふを訴うへました。

全軍ぜんぐんの兵へいも皆憤みないきどほり、尊崇そんそうするケーザルのために、舉こぞつて、命いのちを捨て、戰たたかはうと誓ちかひ

ました。

ケーザルは、部下ぶかの軍勢ぐんせいを率ひきゐて、イタリーにかへつて來きました、ローマに近ちかづく

にしたがつて、ケーザルは、ローマ市しでは、更にさらケーザルの味方みかたがいじめられてゐる

ことが判わかりました。早くはやローマに入いらなければならぬ。

全軍ぜんぐんが、イタリーの國境こくきやうルビコン河かまで進すすんでくると、

掟おきて

大將たいしやうは、軍兵ぐんべいを率ひきゐて、ルビコン河かを越こゆるべからず。

これに叛ける者は、ローマの敵なり。

容赦なく討つべし。

ローマ共和國。

と、いふ掟が、河邊にたてられてゐました。ケーザルに、軍隊を解散して、ただ一人ローマに來いと云ふのです。

言ふまでもなく、ポンペユウスのたくらみなのです。

流石のケーザルも迷ひました。國家の掟です。叛けば國賊、軍隊を解散すれば、ポンペユウスのために、おとしいれられてしまふ。ルビコン河の流れを、ぢつとながめて稀世の英傑ケーザルもしばし考へあぐんでゐました。

遂にケーザルは決心いたしました。立ち上ると大聲で、

『骸子は投げられたり!』

と、叫んで、ラツバをふき、全軍に渡河命令を下しました。

運命は決したのだ。ルビコン河を渡れば、謀叛人である。もはや後にはひかれぬ、

一か八か、あたつてくだけなければならぬ。ローマの國賊か、ローマの統治者か、勝てば官軍、負ければ賊軍である。

ケーザルは、この運命に身を委ねた。

ケーザルの大軍は嵐のような勢をもつて、イタリアの廣野を突進した。

一度決斷すれば、その行動の早いことは疾風のようなのが、ケーザルのやり口です。

ローマの町は忽ち湧き立ちました。

うろたへ叫ぶ人は町にみちあふれました。

その中に、もうケーザルの大軍はローマに迫つて來ました。

ポンペユウスも、ケーザルの神の如き早術には、應戰の暇がありません。

かれらは忽ち逃げ出しました。

ケーザルは威風堂々とローマに入城いたしました。

かくしてローマの全權を握り、市民を安心させ、部下の將軍を四方に派遣して、自分

に手むかふ者を征伐をさせ、自らは部下を率ひてイスパニヤに出征をしポンペユウスの根拠地を全滅せしめて、かへり、東方に逃げたポンペユウスを追撃して、十萬の大兵を僅五萬で打ち破り、更に逃げるポンペユウスを逐つて、エジプトに入りしました。エジプト王はケーザルの勢におそれて人を送つて、ポンペユウスを暗殺させました。

エジプトに上陸したケーザルは一代の英雄ポンペユウスの首を見せられて、流石に猛々しかつた今までの意氣も消え、一度はローマに威をふるつた、ありし日のポンペユウスの姿を思ひうかべて今は罪もなくなつた舊友の顔に涙を注いで、壯大な葬式をもつて、厚く葬つてやりました。

武骨なケーザルの目にも、かうした涙はあつたのです。

2 英雄の末路

神速、果斷、ケーザルの現はれるところ、まことに、双向ふものとしてありませんでした。

ケーザル、その名は當時の人に、神！と言ふ意味にひびきました。

その頃エジプトにも内亂がありました、忽ちに鎮めて、有名な女王クレオパトラを位につけ、更に進んで、反旗を翻した小アジアのポンツス王も、僅の間に征服してしまひました。

アフリカに居たと思ふと、もう小アジアに現れてゐる。小アジアに來たと思へば、もう勝利をしてゐる。ケーザルの機敏なことにはただ驚くばかりです。

ポンツス王を征服した時に、ケーザルは、本國ローマに戦勝を知らせました。

——來た。見た。勝つた——

古今の最簡潔なる書信として有名なものです。

更にローマの内亂を鎮め、

轉じて、イスパニヤに残敵をうち、

再びアフリカに入つて、ポンペウスの殘黨五萬餘を打ち破る。

まつたく、——來た。見た。勝つた——式で嵐の如くに世界中を吹きまくつてしまつた。

かうして、もうケーザルの敵はどこにもなくなつてしまつたのです。

そこで、始めて、ケーザルはローマに凱旋いたしました。市民は興憤して喜びました。

その凱旋式は實に盛大なものであつたと云ふ事です。

幾十輦ともなくつづく、金銀珠玉をちりばめてかざつた花馬車。

長い鼻で炬火を捧げ、錦繡をもつて盛裝されてゐる數十頭の巨象の群。

無數の大旗、小旗。

將軍の戦車の後に鎖で珠數つなぎにされて、從ふ戦敗國の王族、顯官、名將、以下

おびただしい捕虜。はりよ

山と積んだ戦利品のいろく。

未だかつて、かくの如く目覺しいものはなかつたと傳へてゐます。

ついで、彼はローマ人の歡心を得るために公道に、無數の食卓をならべて市民に自由飲食せしめ。或は競馬、競車、猛獸闘技、などの種々の娛樂を公開して市民をなぐさめました。

かくして、ケーザルは全國民の尊敬を一身に集めました。

ローマは昔から共和政治で、各種の役人がありましたが、今は全くケーザル一人でその重な役を占めました。

共和政治と云つても、實際は、ケーザルと云ふ大帝王に治められるローマ大帝國となつたやうなものでありました。

ケーザルはその大きな權力をもつて、ローマの政治の悪いところを取り去り、貧し

い人々を救ひ、大いに土木事業を起して、ローマの街を立派に飾り、圖書館を建て、文學、藝術の發達を奨勵したので、今やローマの國民は平和を樂しみ、繁榮を喜ぶことが出来るようになりました。

ケーザルは實際は王様と同じ權力をもつてゐたのであるが、しかし決して自分では『王』と申しませんでした。

それはローマでは古くから『王』と云ふ名稱をひどく嫌つてゐたからです。

けれども、彼の威勢があまり盛なものですから、世間では、彼がしまひには王とならうといふ野心をもつてゐると思ひ込んだ者も少なくありませんでした。

カシウスといふ政治家がその一人です。彼は、どうかして、ケーザルをローマから除きたいといふ、深い憎しみの感情を持つてゐました。

そうして、ひそかに同志の人を集めて、ケーザルを除かうといふ陰謀をめぐらしましたが、思ふように仲間になる人が集りませんでした。

そこで、カシウスは、人々が信用して呉れるような大人物を首領に推して、同志を集めようと考へたのです。

その大人物として、カシウスが白羽の矢を立てたのがブルタスといふ人です。

ブルタスはローマでも殊に優れた名家の生れでありました。性質が剛直であり、また正義のために屈せぬ性を持つてゐました。

カシウスはその妹婿です。

それでもケーザルはブルタスにとつては大恩人であつのです。ブルタスがかつてケーザルの仇敵ポンペウスの部下でありましたが、ケーザルに救はれ、その後も常にケーザルに愛され、高い役に引き上げられ、深い恩を蒙つてゐました。

ブルタスも、もちろん、それを感じて、決して、ケーザルに叛く心はありませんでした。

ただ、ブルタスの缺點として、見識が狭く實際の情勢を知る事が極めて下手であり

ました。

カシウスから陰謀いんぼうの相談さうだんを受けても、決して、それに加はらうと思ひませんでした
が、カシウスは熱心ねつしんに説き、誘ひ、煽動せんどうしたのです。

『ケーザルはローマの敵てきです。』

共和政治きやうわいせいを覆くつがへして自ら「王わう」とならうとしてゐます。

ごらんなさい。彼かれの政治せいぢのやりかたは専制せんせいです。

『共和制きやうわいせいの破壊はくわい』

『ローマの賊ぞく』

一本調子ほんてうしのブルタスの心は次第しだいに動うごいてきました。

『ブルタスよ！ あなたはケーザルから恩おんをうけてゐるために、正しく判断はんだんするこ
とが出来できないのですよ、

本當ほんたうの心こころが眠ねむつてゐるのですよ』

カシウスの誘惑はたくみであつた。



ケザール刺さる

ブルタスは次第にケーザルを賊であると考へるようになり、とう／＼カシウスの陰謀に加るようになりました。

ブルタスが陰謀に加つた。この事はケーザルにとつて、もつとも不幸なことでした。

ブルタスがケーザルを國賊であると云つた。かう云つただけで、ケーザルを疑つてくる人はたくさんあつたのです。二十人、三十人と同志が増してきます。

深められた陰謀を誰も知りません。

三月十五日、元老院で會議がひらかれます。そ

こでケーザルを暗殺しようといふことにきまりました。

ただ天だけは、早くから、この陰謀を見てゐたのでせう。

十五日が近づくに従つて、まづ天に不思議な現象が現はれたり、地に怪しい事件が起りました。ケーザルも、ケーザルの妻も悪い夢を見ました。しかし、そんな僅かの事で、天下の政治をゆるがせにすることは出来ません。

紀元前四十四年三月十五日元老院に少し遅れて出席をいたしました。

すると、陰謀の一味のシンバー、といふ者がケーザルの前に進んでゆき、

『兄の罪を許して下さい』

と、願ひました。

兄と云ふのは罪を犯して、外國に流されてゐるのです。

『それは、いけない』

ケーザルは、きつぱりと斷つた。

『どうしても、いけないのですか』

『斷じていけない』

それが合圖の様に、ケーザルの背後にキラリと、短劍が光つた。

『無禮者！』

大喝一聲！ その腕を捻ぢ上げた。

同時にバラ／＼と一味四十餘人が短劍を閃かして、八方から突いてかかつた。

ケーザルは一本の鐵筆をもつて、以前の大敵ボンペウスの石像の前に身構へた。
己に身に數ヶ所の傷を受けながらも、一味をハッタと睨みつけて、立ち上つた。

『何をするか！』

大聲一呼

『云ふな國賊』

『民衆の敵』

さつ！ と突いて來たのをかはして、

『迷ふな！』

八八

と、その腕をはらひのけた。前によろけて、ケーザルにはつたと顔を會はせたのはブルタスであつた。

『ブルタス、汝もか』

悲壯な一聲であつた。

あれ程に信じ、あれ程に親しんだブルタスではないか。

ケーザルは感念した。

袖でバツと顔をおほひながら、一切の抵抗をやめて、そのまゝ降るような白刃に身を委かせた。

二十三創の傷を蒙つて、其の場に斃れた。五十六歳のあえない最後でありました。その側にはポンペユウスの石像が、冷やかに、笑ふが如く立つてゐます。

すべてを何もかも、すっかり見てゐたように、ケーザルに逐はれ、遂に異域でエジ

プト人に刺し殺ろされたポンペユウスの像が立つてゐました。

ケーザルはその前に横はり、進り出る鮮血で、像の臺石を紅に染めました。

『ケーザルが刺された』

『ケーザルが殺された』

一大悲報に、全ローマ人はひつくりかへる程に驚きました。

すはこそとばかりローマの市民は、元老院にかけつけました。

一代の英雄ケーザルは斃れた。

げに、ケーザルは人の世に現れ難き大天才、ローマを大ローマに築き上げた非凡の大英雄。

ローマ市民が崇拜してゐた大傑士ケーザル、往くところ勝たざるはなき大將軍ケーザル。敵すらも神と戦きし雄將ケーザル。

しかも、彼を殺したのはローマ人自らであつた。

誤れる愛國の心は恐ろしい！

迷へる勇氣は恐ろしい！

ケーザルを斃して、ローマに何の益があつたと云ふのであらう。

ケーザルの葬式の日、ケーザルの親友アントニウスは、ケーザルの遺言狀と、ケーザルが殺された時、着てゐた血痕なま／＼しき上着をもつて、大哀悼演説を行ひました。

極めて壯重な、そしてまた悲痛な口調をもつて、ケーザルの功績を説き、その不幸をなげいて市民に訴へました。

『ケーザルは山なす戦利品も、敵から取つた償金も皆ローマに納めたではありませんか、ケーザルは貧しい人々の泣くのを聞いて、自分も心から涙を流しました。

私はケーザルに王の冠を奉呈しようとしたことが三度ありました。さうして三度それを却けられました。

ケーザルに野心やしんがあるといふのなら、どうしてこのようなことができませう。

若し涙なみだあるローマ人じんならば泣なかずにをられませうか。

この上着うはぎをごらんなさい。

カシウスが突ついた刃やいばの痕あとを。

ブルタスが刺さした刃やいばの痕あとを。

ケーザルは、常日頃つねひごろブルタスを愛あいしました。さうして酬むくいられたのがこの剣けんでありました。

大膽不敵だいたんふてきのケーザルも、ブルタスが剣けんをふりかざして迫せまつたのを見たときは絶望ぜつぱうしたのです。

さうしてこの上着うはぎで顔かほをおほつて、あけに染そんで、ポンペユウスの像ざうの下したに倒たふれました。』

ケーザルの遺骸るがいを指ゆびさして、

『ここをござんなさい。

大ケーザルが陰謀の徒に刺されて倒れてゐます。』

それからケーザルが、かねて書きとどめておいた遺言状を読み上げました。

その中にはローマ市民にその財産を分配する様にと書いてありました。

アントニウスは涙にむせんで、

『あゝ、今やローマはケーザルを失つてしまいました。

ローマがふたたびかかる英雄を迎へるのは何時の日でありませうか』

五、大ローマ帝國なる

1 オクタヴィヤヌスの制覇

ユリウス、ケーザルは殺された。

ローマ人の手によつて殺された。

異國人からは鬼神の如く、畏れられたケーザルは、自分のもつとも信賴すべき部下に殺された。

ローマの缺陷がここに存在してゐます。

ローマを強固にした、ローマを世界のローマにした、このローマの大恩人に報ゆるに二十三創の刺傷でありました。

ケーザルは自分で「王」とは云はなかつた。すべての權威を一身に集めて、事實上は帝王であつた。しかしケーザルは「王」と云はなかつた。

「王」と云はなかつたが、ケーザルは、大ローマに「王」のない事が不合理であると感じてゐたであらう。

だが、ローマの國のなりたちが「王」を持たなかつた。

その不合理にケーザルは斃れた。

王わうのない事ことが自由じゆうであつて、幸福かうふくであると思つた。そして王わうのような權威けんゐんをもつたケ
ーザルを斃たふしてみた。果たして、幸福かうふくであり得たのであらうか。

だが、ローマが、ケーザルを王わうにして、果して、永久えいきうに幸福かうふくであり得るかどうかと
云ふことは、これからの歴史れきしが明かに物語ものがたるところ、ローマは一つの不幸ふかうをもつてゐ
たと云はなければならぬ。

仲間なかまの一人ひとりが「王わう」となる。これは堪たえがたい事ことであるかも知れない。

私達わたくしたちは國くにのなりたちの有難ありがたい事ことを、そして、大切な事ことをしみじみと考かんがへさせられる
ではありませんか。どこの歴史れきしでもいゝ、外國ぐわいこくの歴史れきしを讀よんで見て、私達わたくしたちは常に祖國そこく
日本にっぽんの、けだかい、そして有難ありがたい國柄くにがらに涙なみだの出る思おもひがいたします。心こゝろから日本人にっぽんじんであ
る事ことに幸福かうふくを感じます。

古い國ふるくにもあつた。文化ぶんかの榮さかえた國くにもあつた。大きな領土りやうどを持つた國くにもあつた。
榮枯盛衰えいこせいすいは世よの習なりひでせう。治亂興亡ちらんこうばうは人ひとの世よの運命うんめいかも知れません。

しかし、私達わたしたちは、もつと、深い、大切な、原因げんいんが別べつにある様ように感じられます。

ひとり、我わが日本にっぽんだけが三千年の歴史れきしを持ちつづけてゐるのが、それです。

宇佐八幡うさ はちまんは和氣清麻呂わけのきよまろに告げて、

『我わが國くには、國始くにはじめつて以來いらい、君臣くんしんの分定ぶんさだまれり』

國くにが始はじめつたのは、また、民族みんぞくの始はじめまりです。

民族みんぞくがあつて、國くにをつくつて、王わうが出來たのではありません。

仲間なかまの一人ひとりが王わうになつたのではありません。王わうと國くにと國民くにとつたみと、一つのところから始はじめ

つてゐるのです。

日本にっぽんの始はじめまりが、天皇てんわうの始はじめまりであり、日本人にっぽんじんの始はじめまりであります。

この事ことは、今いまから決して眞似まねの出來ない事ことであります。

しかも、すべての始はじめまりの時ときから、

『皇位くわうゐの榮さかえまさんことは、天地てんちと共に窮きはまりなかるべし』

と、定まつてゐたのです。

世界の一番東に、大陸と離れて、諸國の傷ましい歴史に對して、嚴然と、この國がある事は、何か、尊い神のおぼしめしと云つたものを、思はないではいられません。

よく、日本は島國であつたから、外國におかされないですんだのだと云ひます。

島國と云へば、アメリカ大陸は何千年來、他の民族から知られないでゐた一大島國です。そこには國家もあれば、住民もゐたのです。南アメリカにはインカ帝國といふ立派な國もあつたのです。それらがやはりほろびてゐます。

尙、明治維新當時、印度を攻略し、支那と戦つた、イギリス、印度支那半島に來たフランス、フィリッピンを占領したアメリカ合衆國、シベリヤ、樺太を侵したロシア若しも、普通の國であつたら、とつくの昔に、白人に侵略される運命にあつた日本です。

島國であつたから、それは確かに島國であつたから、よかつた事もあります。

或る専門家のお話によると、日本が、今少しく、大陸に近いか、或は遠いかによつてたいへん空襲に便利になるそうであります。

今の位置が、一番に空襲困難だそうです。このお話だけでも、島國だといふよりはこの位置に尊い國が出来上つたといふことに深い、使命の存在してゐる事が感じられるではありませんか。

したがつて、日本は島國だからよかつたなどいふ事は、この崇高な日本の國體をけがす、言葉だといはなければなりません。

話がたいへん横道にそれました。

今かりに、ケーザルが日本に生れたと考へてごらんなさい。

ケーザルは、どんなに幸福な事であつたことでせう。

思へば、氣の毒なケーザルではありませんか。

偉人ケーザルが斃れた事は、早く云へばローマに首がなくなつたようなものです。

首くびのないローマ、不幸ふかうなローマ、また誰たれか首くびの座ざに坐すはるまでは、ごたつきます。

ローマの首くびは、からだから出でたものではないのです。のつかつた首くびです。首くびのおちたお地藏ぢざうさんによく首くびがのつかつてゐます。

あとからのつかつた首くびはうまく、くつつきません。地震ちしんがあればすぐ落おちてしまひます。

おちて、なくなつてしまへば、また代かりをつくらなければなりません。その間あひだ首くびなしのおかしなものがたつてゐることになります。

ケーザルが斃たふれた。

ローマは首くびなし地藏ぢざうになつたのです。

勿論もちろん、ケーザルの首くびをおとしたブルタスもカシウスはローマにゐる譯わけにゆきません。

オクタヴィヤヌスと云いふケーザルの養子やうしとアントニウスのために、滅ほろぼされてしまひました。

そして、ローマはアントニウスと、オクタヴィヤヌスと、今一人レピダスと云ふ三人に三分して治められることになりました。

しかし、三人が仲よく、何時迄もつづくものではありません。



アウグストゥス

第一番にレピダスがオクタヴィヤヌスと衝突して破れました。ついでアフリカにクレオパトラ女王と住んでゐたアントニウスが亡びて、天下はケーザルの嗣子オクタヴィヤヌスによつて、再び統一されました。

達は、全部ブルタスや、カシウスと共に滅びてしまひました。

ローマの市民も内亂にはあき／＼してゐました。そこでオクタヴィヤヌスにアウグ

スツスと云ふ尊號そんがうをあたへて。事實上じじつじやうの帝王ていわうにいたしてしまひました。

帝王ていわうがゐた方が、政權せいけんを爭あらそふ亂らんが起おこらなくて、平和へいわでいゝとローマ人じんも考かんがへて來たのです。

平和へいわになれたローマ人じんは戦争せんさうが嫌きらひになつたのです。戦争せんさうが嫌きらひになつたので王様わうさまを認みとめたのです。

天下てんかの富とみはローマに集あつまつてくるし、戦争せんさうもなくなつたから、ローマもこれからしばらく太平たいへいを、たのしむ事ことが出來できるようになりました。

2 ローマの文化

ローマは大國たいこくになつた。

大ローマ帝國たいこくは東洋とうやう、西洋せいやう、アフリカに跨またがつてゐた。

そして、各地かくちの富とみはローマに流ながれこんだ。

各地かくちの文化ぶんくわもローマに流れこんだ。

ローマは大國たいこくになつて、文化ぶんくわを更に各地かくちへひろめた、東洋とうやうの文化ぶんくわと、西洋せいやうの文化ぶんくわを混こ合がふさせた。

ローマ市しは文化ぶんくわの中心ちゅうしんになつた。

立流りつぱな文化ぶんくわをつくり上げた。

殊ことにローマ人じんは土木事業どぼくじぎやうを大仕掛けおほじかけにやつた。

それは、二十世紀せいじの今日こんにちの文明人ぶんめいじんを驚おどろかせる程ほどのものをつくり上げました。その中なかの有名人いうめいなものを二三紹介せうかいして見ませう。

コロセウム

ローマ人じんは競技きやうぎを好みこのました。それも勇ましい競技きやうぎを好みこのました。

猛獸もうじうの咬かみあひや、人間にんげんとライオンの戦たたかひや、人間同士にんげんどうしの眞劍勝負しんけんしやうぶといつた、すごい勝負しやうぶを好みこのでやりました。

ローマ人は男でも女でも、丁度、

日本人が國技館の相撲を喜んで見る様におしかけて見物いたしました。

競技が幾日もつづいて、たくさんの猛獸が殺されてゐくのを喜ぶローマ人は尙武の氣風もあつたのでせうが、私達日本人では一寸想像のつかない荒々しい性質もあつたように思へます。

眞劍勝負をやるのは奴隸がやるのですが、奴隸といつても、決して、かはつた人間ではない筈です。かうした競技をやるために、實にすばらしい競技場がつくられました。

ローマ人が、こんな競技を好むようになった。

それだけで、何かしら、ローマ人が、もはや榮へる國民ではなくなつたように思はれ



コロッセウムの闘士決闘

ます。

それを見物する爲につくられた競技場がまた驚くばかりに大きなものです。

一番大きいのをコロセウムと云ふのですが、二代皇帝にまたがつてつくられたもので、西暦八十年に出来上りました。

四階造りの圓形なもので、周りが四五五米、高さが四七米もあります。各階共に柱から間どりの仕方が違つてゐて、中には十萬人の見物人が入れる大きなものです。

ここに旅をしてきた詩人が、この大建築物に驚嘆して、

コロセウムのあらんかぎり

ローマはあるべし

コロセウムの滅びる時

ローマは滅ぶべし

而してローマの滅ぶる時

世界も亦滅びん

と、うたひました。

浴場

ローマ人は風呂にはひる事が好きで、町でも、必ず浴場を建てました。

最も有名な大浴場は、カラカラ帝の造つたもので、壯麗雄大で、二千人以上も入れると云ふのだからおどろきます。

その中には、冷水の風呂、温かい風呂、ごく熱い風呂、そして、その別に蒸し風呂まで設けられてあります。

これだけでもたいへんなものですが、更にこれに附屬してつくられたものが、また實に立派なものでした。

着物を更へる室、化粧をする室、その別に讀書室、應接室、運動場、庭園なども備

つてゐて、いづれも贅澤に出来てゐました。

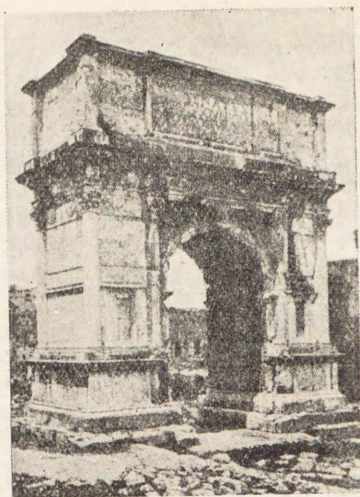
ことに床は、美しい寄せ木細工のように出来てゐて細い石が並べられ、いろ／＼な

美しい模様を現してありました。

凱旋門

凱旋門は、多くの皇帝が、遠く外國を打ち破つて歸つた記念に建てられたものです。

ローマは勿論、遠い田舎町にもあります。皆壯大華麗を極めてゐます。



門 旋 凱 の 馬 羅

門の前面の上部には、戦勝を記念する意味の文句が刻まれてあります。

その周囲には凱旋式の光景、戦捷祭の様子、などが、美しく浮き彫りされて美事なものです。

現在げんざいに残のこつてゐるものの中には、チツス帝てい、コンスタンチン帝ていとう等らのものが有名いうめいです。

道路だうろ

道路だうろは殊ことによく造つくられました。

ローマは小ちいさい町まちから起おこつて、廣ひろく領土りやうどを持つようになりました。

この廣ひろく領土りやうどを持もてるようになつたのは、一度征服せいふくした地方ちほうを上手じやうずに治をさめて、決けつして失うしなはないようにしたからです。

そのためにやつた大事だいじな方法はうはふの一つに、道路だうろを立派りっぱに造つくつた事ことです。

征服せいふくした地方ちほうには、みな、ローマまで通つうずる道みちをつくりました。

『天下てんかの道みちはすべてローマにつづく』と云いふ言葉ことばが残のこつてゐます。

道路だうろは主おほに軍用ぐんようの目的もくてきで造つくられました。一朝事てうことがあれば、直たゞちに軍隊ぐんたいを送おくる事ことが出来るきようにしてあつたのです。

もちろん、地方ちほうにも軍隊ぐんたいはゐましたが、大きな叛亂はんらんや、戦争せんそうになれば、ローマ市しか

ら大軍を速かに送らねばなりません。

そのために道路は、出来るだけ、まつすぐにして、大切な町と町とをつなぐことにし、そのためには、費用や勞力を惜しむことなくぐんぐん造つたものです。

一番早くできた軍用道路はアツピヤ街道です。これはローマの町から東南に向つて九十八哩餘の間まつすぐです。

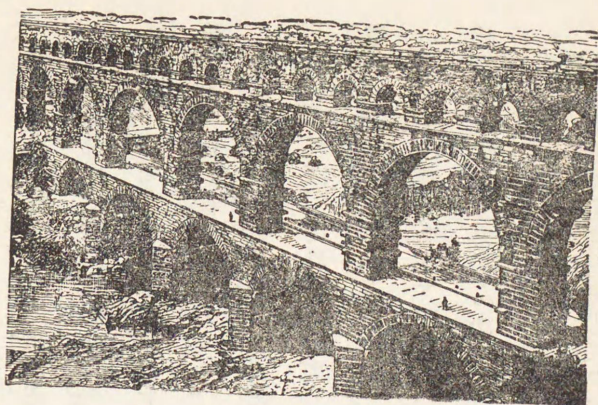
そんな長い間を直線にしたのですから、途中にいろ／＼な邪魔物がありました。

沼があれば、それを埋めてしまひ、山があれば、それを切り割つてゆきます。その道幅は九米位もありますが、全部石をしきつめて舗装されてあります。

二千年の昔、ローマでは人のゐない田舎道まで舗装してあつたといふのだから、おどろくではありませんか。

水道

水道も驚く程に發達してゐました。



道 水 の マ ー ロ

ローマの市外しぐわいには、もちろん一番ばんたくさんありますが、ずつと片田舎かたなの都會とくわいにも大規模だいきぼの水道工事すうどうこうじがあります。

凡そおよ、ローマ人じんの住すんでゐるところは、どんな邊鄙へんびなところでも、ガリヤでも、アフリカでも、必ず立派りっぱに水道すうどうが出来できてゐたのですから、びつくりいたします。

ローマ市しでは、二千數百年すうねんの昔むかしに、大きな水道すうどうをつくつて、遠い山とほやまから、水みづを引ひいてゐました。一番遠いばんとほのは、六十一哩マイルも遠くから引ひきました。高い土地たかちのところは管くだを貫つらぬき、低い場所ひくばしよには、石いしや煉瓦れんぐわを積み上げて橋はしを築きづき、その上うへに水路すうろを

作り、蛭々として、つづいてゐる光景は、實にさかななものです。

その外、港を築くことも進んでゐました。

ローマには、法律のことも、早くから考へられ、その出来上つたものは、ローマ法典といつて、今でも大切にされてゐます。

美術、文學、哲學の方面もそれゝに立派なものをづくり上げてゐます。

實に、ローマ時代の文化は、今の人の想像することゝ出来ない程に、進んでゐました。

六、キリスト教とローマ

1 キリスト生る

西洋で年代を數へるのに西曆紀元といふものを用ひます。

昭和十三年は西暦一九三八年です。これは何かもとになつてゐるのかといふと、キリストが生れた年の四年前を紀元元年としてあります。

本當はキリストの生れた年を紀元元年としたのですが、あとで考へて見ると四年前だ

け違つてゐたことが判り、紀元元年がキリストの生れた年よりも四年前といふことになつたのです。

聖母像



西洋で、このやうにキリストを大切に扱ふのは西洋の殆んど全部がキリスト教信者だからです。

て、キリスト教を信ずる者が多くなつてまいりました。近頃、日本にもたくさん教會が出来

て、世界で三人の聖人を數へる時には、印度の釋迦と、支那の孔子に、ユダヤのキリス

トと云ひます。

世界の三大聖人、歐洲人全部を信者に持つキリストが、ローマの盛な時代にユダヤ人の中へ生れました。

ユダヤ人は古代から流浪して歩いた民族でしたが、後に獨立して、丁度、ヨーロッパとアジアの境にあるエレサレムを中心に國を建てました。

ユダヤ人はエレサレムにあるエホバの神殿を中心にして、かたい信仰に結ばれてゐました。

ユダヤ人は自分達だけ、エホバの神にまもられてゐるのだと考へてゐました。しかし、ユダヤもローマの力が東に伸びてきた時に征服されてしまつたのです。けれどもユダヤ人の間には一つの豫言がありました。

『今に神の使が降つて来て、その使が、ユダヤ人を率ゐて世界中を従へてしまふ』それが、かたく信じられてゐます。

したがつて、今こそ自分達はローマに征服されてゐるが、今にローマも自分達に従ふようになるかと考へてゐました。

ところが、その神の使ひといふ者が現はれました。

イエスです。

イエスのお父さんはナザレといふところに住んでゐた大工さんのヨセフ、お母さんはマリヤといひました。

ヨセフは貧乏な大工さんで、村から村へ、町から町へとわたり歩いて仕事を頼まれて歩きました。

丁度イエスの生れた晩も、冬の寒い十二月二十五日でしたが、宿屋の厩屋であつたところに泊めて貰つてゐました。

そのイエスが三十才頃迄は何の事もなく、すごしてきましたが、三十才の時に悟るところがあつて、突然

『私は神かみの使つかひです
わたしは神かみの子こです』



キリストの説教

と、云いひ出だしました。

ユダヤ人じんはびつくりしました。失望しつぱうしました。

『何なんだい！』

イエスが神かみの使つかひだつて、馬鹿ばか々々しい

貧乏びんぱう大工だいこうの子供こどもぢやないか』

『いや！ あれは山師やましだよ』

『氣違きちがひだ』

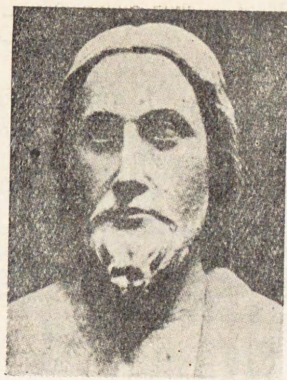
『惡魔あくまの使つかひだ』

そう云いつて、イエスを馬鹿ばかにいたしました。

ユダヤ人じんは、神かみの使つかひは金きんの鎧よろひでもつけて、天てんの一方いっぽうから降おり、ユダヤ人じんを引ひき連つれ

て、世界征伐に乗り出すものと考へてゐたのです。

ところが、イエスの言ふことは、今までユダヤ人が考へてゐたこととはまったく反對のことをいつたものです。



キ リ ス ト

イエスは武力に訴へて世界を征服しようとはしなかつたのです。

イエスの武器は『愛』といふものでした。戦争といふ方法と違つて、説法といふ方法で、諸國民に望み、己の教を信奉させようとしたのです。

だが、イエスの説教したところは、彼の生れた故郷だけであり、期間も僅かに三十才から三十三才の三年間だけでありました。

貧乏大工の子イエスが、たつた三年間しか説教しなかつた。この教が後に全地球上

にひろまり、イエスはキリストとあがめられるようになったのです。

キリストと云ふのは神の使ひと云ふ意味です。

これだけ考へて見てもイエスは偉大な人物であつたに違ひありません。

イエスの生涯のようすは、新約聖書といふ、キリスト教の方でお經文のようにな切にする書物の中にこまかに書いてあります。

ローマのケーザルも偉人です。

ケーザルは武力をもつて、歐洲を征服いたしました。しかし、今や、そのローマはありません。

ナザレのイエスは三十三才といふ短い生涯で一生を終りました。しかし、イエスは全ヨーロッパ人から、廣く全地球上に、信者をもつて、今日までつゞいてゐます。

おもしろい、二人の對照ではありませんか。

2 イエス十字架にかゝる

イエスは全地球上ぜんちきうじやうに信者しんじやをもつてゐます。

イエスは世界中せかいぢうから仰あふがれてゐます。

イエスは武力ぶりよくをもつて征服せいふくしませんでした。

イエスは世界の帝王せかい ていわうともいひませんでした。

しかし考かんがへてみれば、確かにイエスは世界の帝王せかい ていわうとも云いへるでせう。

イエスが死しんで間まもなくローマ全體ぜんたいがキリスト教けうになりました。

ユダヤ人じんが考かんがへた征服せいふくとは違ちがふが、やはりローマを征服せいふくしたことになるでせう。

イエスは撲ぶつて従したがへたのではなく、愛あいして服従ふくじうさせたのです。

説教せつけうしたのも僅わずかかに三年ねんです。

聞いた者ものは漁夫ぎよふであつたり、百姓ひやくしやう達たちでした。したがつて、イエスはむづかしい事こと

や、高尚かうしやうなことも決して云いひませんでした。

しかし、いくら考かんがへて見ても、ユダヤ人じんには物ものたりなかつたのです。

どうしても、神かみの子ことは思おもへなかつたのです。

『我われ汝等なんぢらに告つげん。惡あくに敵てきする事こと勿なかれ』

とか、

『すべて我わが言げんを聞ききて行おこなふ者ものを、磐いはの上うへに家いえを建たてたる賢かしこき人ひとにたとへん、雨降あめふり、大水出おほみづいで、風吹かぜふきて、その家いえを打うてども、倒たふるゝことなし、すべて我わが言げんを聞ききて、行おこなはざる者ものを砂すなの上うへに家いえを建たてたる愚おろかなる人ひとにたとへん』

ユダヤ人じんにはしつくりしないのです。これでは多年熱望ねんねつぼうしてゐるユダヤ王國わうこくが出來できないと思おもつたのです。

遂つひにユダヤ人じんはイエスを、山師やましだ、詐欺者きぎしやだと云いつて憎にくくむようになり、磔はりつけにしてしまふ様やうに決議けつぎして、ローマの役人やくにんに許ゆるしをもとめました。

ローマの役人も、イエスが、王國を建てるといふのは、つまり、ローマに反對してユダヤ人の獨立を恢復する爲であると誤解し、イエスを刑に處する事に許可をあたへました。

かうして、神の子として生れ、世を救はんと、念願した。聖者イエスも、遂に同胞ユダヤ人の手によつて、十字架上に三十三年の一生涯を終つたのであります。

しかも、イエスは十字架上にあつて、更に苦悶の色もなく、彼を殺さんとする人達の幸福を祈つて、

『神よ、彼等を許せ、そは彼等は爲すべき所を知らざればなり』

なすところを知らぬと、イエスに憐まれたユダヤ人は、祖國を滅亡させて二千年になります。ユダヤ人は二千年間、亡國の民として、世界中に放浪してゐます。

そして、未だに、ユダヤ人の中に神の使があらはれて、世界を征服する時がくるのだと信じてゐます。

ユダヤ人は、世界中に散らばつてゐて、常に世界統一の事を計畫してゐるのだと云はれてゐます。

ユダヤ人の間には秘密結社があつて、世界を攪亂しようともくろんでゐるのだといはれてゐます。

ドイツでは、ひどく、このユダヤ人を嫌つて、國外に全部、ユダヤ人を逐ひ出してしまひました。

キリスト教も、ユダヤ人を救ふ教とはならず、ユダヤ人以外に擴まつてゆきました。

イエスは殺されましたが、その教は、彼の弟子、即ち使徒達によつて、だん／＼と廣く、擴まつてゆきました。

3 キリスト教ローマに入る

キリスト教を、ローマに傳へたのは、使徒のポーロでした。

ポーロは、非常に學問の深い、辯舌のたくみな人でした。

初め、ローマの役人でしたが、後にキリストの弟子になつたのです。

ポーロは、ローマ人の生活を猛烈に攻撃して、神の福音をときました。

ローマ人は、贅澤三昧な生活をしてゐます。猛獸の争や、奴隸の眞劍勝負と云つた、娛樂をたのしんでゐます。

ポーロはさういふ、つまらない楽しみごとを戒めて、神の福音を、たくみな熱辯によつて説きました。

ローマ人は、ぞく／＼とポーロの弟子に入つてゆきました。

そして、宇宙に唯一のエホバーの神を信ずるようになりました。

そして、世の中でエホバーの神が一番有難く、エホバーの命ずるところに従へばいゝのだと、ローマ人は考へてきました。

それは、ローマ王を輕んずるようにすらりました。

これは、ローマ皇帝から考へて一大事です。したがつて代々の皇帝は、キリスト教をたいへん嫌ひました。キリスト教徒を迫害いたしました。

ネロ皇帝の如きは、キリスト教徒の大虐殺を行つたものです。

丁度、その頃、ローマ市に大火があつて、ローマの町の大半が焼けてしまひました。ネロ皇帝は、ローマを焼いたものはキリスト教徒であるとなし、キリスト教徒を全

部捕へてしまひました。

そして、山の様に集つてきた見物人の前で獅子、その他の猛獸の餌食としたり、幾十臺といふ十字架を一行に立て並べて、これにキリスト教徒を釘付けにし、其の下に薪を積み重ねて、焼き殺すようなむごたらしいことをいたしました。

キリストの弟子で、ポーロと共に有名な人にペテロといふのがあります。ポーロも、ペテロも、この時に十字架で殺されてしまひました。

これに就いて有名な話があります。

ペテロも、ポーロも、その身が危険になつてきました。

そこで、ペテロは暫く、ローマを避けて、時機を待たうといたしました。

朝早く、ローマの町を出て、郊外に向ふ途中、旭の光がまばゆくさし、忽ち一道の光明が、自分の前に現はれたと思ふと、そこにキリストの姿がはつきりと見えまして。

キリストは自分と反對に、ローマの町をさして歩いてゆかれます。

ペテロはびつくりいたしました。そして、自分の前に姿を現はして呉れたキリストの愛に喜び、地面にひざまづき、思はず、

『主よ！』

いづくにゆかれますか』

と、叫びました。

すると、キリストはおごそかな聲で、

『お前まへが、かはいそうなローマの民たみを見捨て、去きつて行くから、自分じぶんが再び行くのだ、そして、また磔はりつけになるのだ』

と、聞きえました。

ペテロは、たいそう後悔こうかいして、すぐローマに、戻もどつて、他の人々ひとらと共に、どんなおそろしい迫害はくがいも恐れおそえないで傳道でんどういたしました。

しかし、遂つひに捕とらへられて、十字架じくわ上に殺ころされてしまひました。

ポーロも、同じ運命うんめいを逃のがれることが出来できませんでした。

キリスト教徒けうとの迫害はくがいはそれからもつゞきました。

名高なだかい、賢い皇帝かうていでさへも、度々たびたびかれ等を迫害はくがいいたしました。

しかしキリスト教けうしんじや信者しんじやは、地下ちかに、數百哩すうまいにわたる地下室ちかじつを設けたり、秘密ひみつの會所くわいじよをつくつたりして、信仰しんかうをつゞけました。

殊に、イエスが教の爲に、一身を犠牲にしたといふ例が、キリスト教徒をして、教のために喜んで死につかせたものです。教のために死ぬことはこの上もない幸福な事であると思ひこませました。十字架にかゝつて死ねばキリストと共に天國に入れるのだと信じこませました。こんな工合でしたからどうしてもキリスト教をなくすことが出来ませんでした。

そこで、後には、遂に信仰を許しましたので、しまひにはキリスト教がローマの國教にまでなつてしまつたのです。

恐ろしいものは信仰の力です。

代々の皇帝が必死になつて、禁止をした、キリスト教は遂にローマの國教とまでなつてしまつたのです。

七、ローマ帝國衰ふ

I ローマの皇帝

英雄、ケーザルは、皇帝になる心があるのであらうと疑はれて、殺されました。

それはローマ人が、自由をもとめる民族であつたことと、仲間の一人に威張られるのが嫌であつたからです。

しかし、ローマが天下の中心になつて、ローマが榮へて、ローマ人は、思ふ存分の贅澤が出来るようになりました。

そこで、ローマ人は、たび／＼政治の權力を争ふ亂などなくして、平和でゐたいと考へるようになりましたから、遂に皇帝が出来てもいゝと自然と考へるようになった

のです。かうしてローマは帝國ていこくとなることになりました。

しかし、皇帝くわうていになつた人達ひとたちも、出來できるだけ、ローマ人じんを樂たのしませるように、ローマ人じんに好すかれるようにやつてゆかなければなりません。そういう風ふうにやることは、決してローマ人じんのためによいことではないのですがもともとローマ人じんは戰爭せんそうをなくして樂たのしみたために王様わうさまをたてたのですからやむを得えません

したがつて、これからますますローマ人じんを、きまりのない、贅澤ぜいたくを好む、弱よわい民族みんぞくにしてしまひます。

アウグスツスは内亂ないらんをしづめ、天下てんかを統一とういつした偉えらい人ひとでしたが、後のちには力ちからのある、立派りっぱな人ひとばかりが出來でてくるといふ譯わけにゆきません。

後のちの皇帝くわうていも、たとへば、アウグスツスが、たいへん偉えらかつたから、その人ひとの德とくをしたつて、その家いへを王家わうけにしたとか、實力じつりよくでローマ人じんを屈くつ服ぷくせしめて、帝位ていゐについたとかいふのでありませんから、代々よゐし子孫そんが後あとを繼つぐといふのでもありませんでした。

ローマに皇帝くわうていが出来てみたが、結局けつぎうまく行ゆかなかつたといふのも國くにのなりたちがよくなかつたからでせう。

このようにローマの皇帝こうていは今のヨーロッパや支那しなの王様わうさまとは、たいへん違ちがひます。勿論もちろん、日本の天皇てんわうとは、全然ぜんぜん違つたものです。

支那しなに出来た國々くにも、ずいぶん厄介やくかいな、困こまつた國が多おほかつたのですが、それでも、支那人しなじんは、天子てんしといつて、王わうになるのは、徳とくの高い人ひとが天てんの命令めいれいでなるのだと、考かんへてゐましたから、王様わうさまが、悪い事わるごとをしないかぎり尊敬そんけいされてゐました。

ローマの皇帝くわうていには尊敬そんけいされる理由りゆうといふものがありませんでした。

皇帝くわうていの位くらゐが、尊たふといものだなどと考かんへる者ものがありませんでした。

誰たれでもが、勝手かつてになれる皇帝くわうていの位くらゐです。これでは決けつしてうまくゆくものではありません。

せんし、よい皇帝くわうていばかり出でてくるともかぎらないでせう。従したがつて、後のちには、皇帝くわうていを脅おびかしてやめさせ、自分じぶんが代かはつてなるとか、戦争せんそうを起おこして、

天下をとつたり、軍隊を養つてその力で皇帝になるといつた者も出てまいりました。

さうなれば、自然天下が亂れなければなりません。

軍隊といつても、ローマの兵隊は、傭兵の連中ですから、主君に對して忠義といふ考など毛頭ありません。

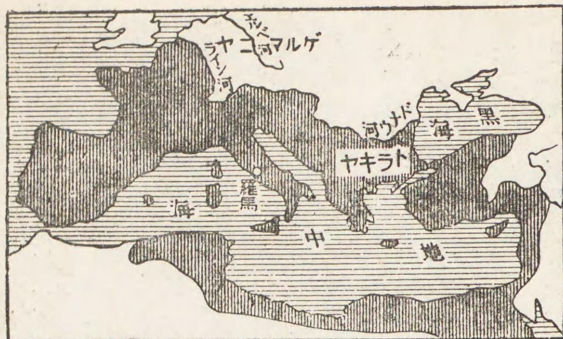
自分達の頭を推し上げて、自分達の好きな人を皇帝にもりたてゝ、後で何かまいことにありつかう、なんと考へてゐるのですから、たまりません。

したがつて、ローマの皇帝は軍隊に氣にいられるようにもしなければなりません。氣にいらなければすぐ亂を起します。

そんな譯で、九十年の間に二十三人も皇帝が、かはつたこともあり、一時に六人もあちらこちらに皇帝が出たこともあります。

昔の、伸びてきた時代のローマ人とは、大變心の持ちかたが、かはつて來ました。こんなありさまでは、もうローマも長くつゞくわけがありません。滅びて行くより

別に道はありません。



域領の國帝馬羅の代時スツスグウア

2 ローマの黄金時代

ローマの黄金時代は、なんと云つてもやはりアウグスツス大帝時代でありました。

大帝は、徳もあり、實力もあつたものですから、したがつて天下もよく治まりました。

今までつゞいて來た悪い政治は改まるし、ローマの町も美しくなる、皇帝は、

『朕は煉瓦の町を大理石にした』

と、自らも云つてゐるように、帝都を立派にいたしました。

學問がくもんや、藝術げいじゆつのことも獎勵じやうれいしたので、學者がくしやや、文人ぶんじんがたくさん出ましたから、この時代じだいをローマの黄金時代わうこんじだいと云つてゐます。

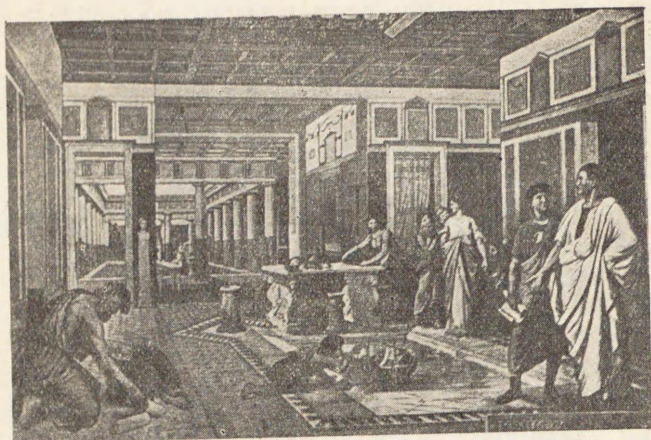
アウグスツスの次つぎには養子やうしのチベリウスが立ちました。

チベリウスは疑深うたがひふかい人で、誤あやまつた政治せいぢをたくさんしたし、カリグラ帝ていと云ふのは暴君ばうくんで臣下しんかに殺され、グラウヂウス帝ていは軍隊ぐんたいに擁立えうりつされて、皇帝くわうていになつたもの、この皇帝くわうていは今のイギリス島たうを征伐せいばつした英雄えいゆうです。

イギリス島たうはその頃ころ、ブルタニヤと云つて野蠻やばんな國くにでしたが、グラウヂウス帝ていは、こゝにローマの文化ぶんくわを傳つたへました。

その他た、アフリカの西北部せいほくぶの方面ほうめん、バルカン半島はんたうの全部ぜんぶ、シリヤの方面ほうめんと領土りやうどを擴ひろげた立派りっぱな皇帝くわうていでした。

その次のネロ皇帝くわうていは、キリスト教けうのところでも、一寸書ちよつとかいておきましたが、この皇帝くわうていは「暴君ばうくん」ネロと云つた方が通りがいゝ程ほどに、暴君ばうくんの見本みほんになつてゐます。



羅馬時代の貴族生活

支那の殷の紂王と、ローマのネロは世界に於ける二大暴君であります。

したがつて、世の中がうまく治るわけがありません。内亂が起つて、ヴェスパシヤヌスが鎮定して即位しました。

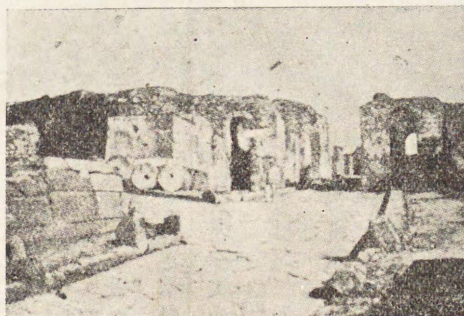
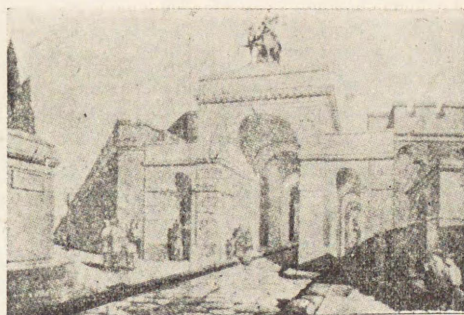
ヴェスパシヤヌス皇帝は、皇帝の權力をひろげて、本當の皇帝らしく、皇帝の位をかためました。

前に書きました、コロセウムを起したのもこの人であります。

ユダヤ人の都、エルサレムを完全に陥れユダヤ人を現在のような放浪の民にならしめ

たのも、この皇帝くわうていです。

ユダヤ人は故郷こきやうを逐おはれて、これから二千年、亡國ぼうこくの民たみ、放浪はうらうの民たみとしての生活せいかくわつを



ボ ン ベ イ 市 街

つゞけるようになりました。

ユダヤ人じんを故郷こきやうから逐おつたのは、實際じつさいに征伐せいばつに行つた皇子わうのチツスです。チツスは父ちいの後あとを繼ついで即位そくゐし、コロセウムを完成くわんせいさせました。

チツス帝ていの時の大きな出来事できごととしてはイタリーのヴェスヴィオ火山くわざんの大破裂だいはれつがありま

す。この火山くわざんは一晚ばんの中にボンベイ、ヘルクラネウムの町まちを灰はいの下に埋うづめてしまひま

した。

近頃ちかごろになつて、ボンベイの町まちが掘りはじめられてゐますが、その頃ころの住民ぢゆうみんが逃にげることことも出来できず、苦しんだ姿すがたのまゝ、化石くわせきみたいになつて、出でてくるといふことです。以上いじやうの皇帝くわうていからしばらく経たつて、ネルヴァ統とうの皇帝くわうていが五代だいごつゞきます。

ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、ピウス、アウレウスで、ローマの五善帝ごぜんていと云いひ、その治世ちせい八十餘年よねん間かんがローマ極盛時代きよくせいじだいです。

トラヤヌス皇帝はまた／＼領土りやうどを擴張くわくちやうしてアラビヤ方面はうめんまで征伐せいばつして、ローマの領地りやうちを一番廣ばんひろくした人ひとです。ピウス帝は支那しなの方はうにまで使つかひをよこし、支那しなでは安敦あんどんと呼よんでゐます。これからは名君めいくんも出でなくなつて、ローマ帝國ていこくが愈々いよゝゝ瓦解くわかいに近ちかづいてゆきます。

3 分裂するローマ

大ローマ帝國だいりょうまていこくとして、隆盛りうせいを極めたローマも、人心じんしんが弛み、皇帝くわうていにもすぐれた者ものが出なくなつて、次第しだいに衰へて行きます。

かつて詩人しじんが、

ローマの滅びる時は

また世界も滅びん

と、うたつたのですが、その頃ころの心持こころもちをローマ人じんは、もちつゞける事ことが出来なかつたのです。

紀元二〇〇年頃きげんねんころから、軍隊ぐんたいが、わがまゝになり、皇帝くわうていの威力りきよくが衰へてからは、ローマのような大帝國だいていこくを、一人にんでは治めきれなくなつてきました。

それで紀元二八四年きげんねんに、ディオクレチヤヌスが、皇帝くわうていとなると、ローマを四つに仕切つて、四人にんで分括ぶんくわつして治めることにしました。

それと共に政治せいぢの仕方しかたもいろ／＼と改めましたから、ローマも一時じよく治まりまし

さつてしまひました。



羅馬帝國分裂圖

た。

けれども皇帝がなくなつて、また／＼ローマは亂
れました。

コンスタンチヌス帝が現はれると、遂にローマの
町を捨て、ヨーロッパとアジアとの境近くにあるビ
ザンチウムに都を移してしまひました。

ローマ、ローマの始まつたローマの町、ローマの
祖先から傳えられたローマの町、美しいローマの都
を捨て、コンスタンチヌスは都を移してしまひま
した。

ローマ市に住んでゐるローマ人もすっかり心がく

ローマ市にゐる兵隊は亂暴でした。

ローマの市民は皇帝をあまり好まぬ。王の命令をきかぬ性質をもつてゐました。それ等に手を焼いたコンスタンチヌス帝は、ローマ市を嫌つて遂に都をビザンチウ



帝大スヌチンタスノ

ムに移し、コンスタンチノーブルと町名をつけた。しかし、これがローマを大きく二つに分裂させる原因になつたのです。

ローマ市を中心にしたローマとコンスタンチノーブルを中心にしたローマ、その後テオドシウス帝は、ローマを遂に東西にわけて、二人の子供に配けてから、ローマは東ローマ帝國と、西ローマ帝國と分かれてしまふのです。

大帝國ローマも、遂に大きなからだをもてあます時がきたのです。それはローマに力がなくなつた事を示すものです。

二つに分裂した、東ローマは、大ローマの一部ではありますが、もうローマとは云へないでせう。もちろん、イタリアとは縁がなくなりました。

西ローマだけがイタリアに縁があります。半分になつてしまつたローマ、これから小さくしてみても果たしてながくつゞけることができたでせうか。

自分のからだをもてあましたローマ、そこにこんどは實に思ひがけない敵が現はれました。この敵は本當に、大暴風雨のように歐洲の天地をふきまくりました。

4 ゲルマン民族の移動

ローマが衰へかゝつた頃から、ヨーロッパには、たいへんな事件が起りました。人類史にまたと見られない大事件です。

ヨーロッパの天地はこの頃から、全然變つてしまふのです。

正しく云ふと、現在のヨーロッパは、これから始まつたと云つた方がいゝかも知れ

ません。

それはゲルマン民族（みんぞく）といふ新しい分子（ぶんし）がヨーロッパに入（はい）つて來たといふのです。イギリスでも、フランスでも、ドイツでも、みんなゲルマン民族（みんぞく）です。

ギリシヤやローマと全然違ふ民族が、ヨーロッパ全體（ぜんたい）に入りこんで來ました。したがつて、ギリシヤ、ローマ時代（じだい）と、ゲルマン民族移動（みんぞくいどう）後のヨーロッパは、たいへん違つた姿（すがた）になつた譯（わけ）です。

現代（げんだい）の大部分（だいぶぶん）のヨーロッパ諸國（しよこく）の先祖（せんぞ）が、ギリシヤ、ローマではないのです。違つた世界（せかい）が、ヨーロッパに始（はじめ）つたと云つていゝでせう。現在（げんざい）ヨーロッパを形成（けいせい）する民族の大移動（だいいうどう）が行はれました。

この頃のゲルマン民族（みんぞく）は、たいへんに野蠻（やばん）な民族（みんぞく）でした。

勇猛（ゆうもう）で、勤勉（きんべん）で、戦争（せんそう）を好む民族（このみんぞく）でした。これに對（たい）して、ローマ人（じん）はもうすつかり元氣（げんき）のなくなつた民族となつてゐました。

それでもローマが強盛な國家であつた時代には、なか／＼にローマに入りこむことも出來ず、北方の方に潜んでゐたのです。

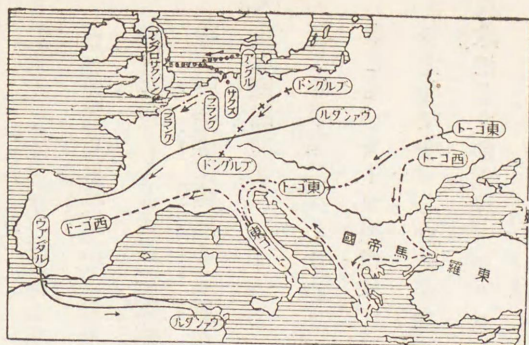
ところが質實剛健だつたローマ人も、ぜいたくになり、おごりにふけるようになつてからだん／＼と國民が軟弱となり、兵隊になることを嫌ふようになりました。

かういふ風に國民の氣風が軟弱になることは何と云つても、その國家を衰えさせる大きな原因です。

おごる平家は久しからず、といふ諺もあります。

そこで、ローマ皇帝は、ローマ人をもつて國を護るといふことが出來なくなつてしまつたのです。しかたがないから、北方に住んでゐた、勇敢なゲルマン人を傭つて、兵隊にしました。ゲルマン人は喜んで、ローマの兵隊になりました。

このゲルマン人の兵隊がだん／＼數をましてくると、何しろ強い民族ですから、だん／＼に、のさばつてくるようになりました。



ゲルマン諸族移動略圖

ローマの政治に干渉する、

後には

皇帝を勝手に代えてしまふといふ風な力まで持つ

ようになったのは、前に書いた通りです。

かうなれば、ローマ帝國の威信なんてものは、まったくなくなつてしまつたものといつてもいいでせう。

大ローマの皇帝が、ゲルマン人の軍隊によつて、自由にされ、政治もゲルマン人の考通りやらされるといふことになつたのですからいくら、意張つてみても、もはやローマ人は、ゲルマン人の自由になつてしまつたと見るべきでせう。

この頃、アジアから、蒙古族の一種のフン族といふのが、大舉して、ヨーロッパに移つて來ました。

これに逐おはれて、ヨーロッパの西境にしさかいに住すんでゐたゴート族ぞくといふのが、ローマの國くにの方ほうに入はいつてくる事ことになりました。

これから、各民族かくみんぞくが、逐おひつ、追おはれつ、大移動だいいどうすることになるのです。

ローマは弱よわくなつて、東西とうざいに分裂ぶんれつしてしまふ。東ローマは、移動いどうして來たゴート人じんを使つかつて、西ローマを攻めさせる。西ローマは、東ローマと戦争せんそうをはじめて、ゴート人じんと戦たたかふと、いつた工合ぐあひに、ローマが仲間喧嘩なかまけんくわを始はじめたから、今までローマの邊境へんきやうに潜ひそんでゐたゲルマン人じんが一度にローマ領土内りやうどないに、なだれをうつて入りこんで來きてしまひました。

ゴート族ぞくも、ゲルマン民族みんぞくの一種しゆです。

突入とつにふして來たゲルマン民族みんぞくは、忽たちまちにしてローマに攻撃こうげきしてくる程ほどになつてしまひましたから、ローマ國內こくないは大騒動だいそうどうとなつてしまひました。

5 ローマ滅ぶ



一世の頃マルゲの軍士

ゲルマン人は、ローマー^{たい}帯をふみにじつてゐます。

そのゲルマン人^{じん}を逐^おつて來^きた、アジャ人種^{じんしゆ}フン族^{ぞく}は、次第^{しだい}にヨーロツバ^いに入りこんで來^きます。

フン族^{ぞく}といふのが、また勇敢^{ゆうかん}な種族^{しゆぞく}でした。王^{わう}をアツチラ^いと云つて、アツチラ王^{わう}の軍勢^{ぐんせい}は丁度^{ちやうど}、疾風^{しつぷう}猛火^{もうくわ}のようでした。

この軍勢^{ぐんせい}が過^すぎると、すべてのものが破壊^{はくわい}されてゐました。

アツチラは、忽ち^{たちま}の中に中部^{ちうぶ}ヨーロツバ^{せんりやう}を占領^{ひがし}し、東ローマ帝國^{ていこく}を従^{したが}がへて、西^{にし}ローマ^{せま}に迫^{せま}つてゆきました。

ヨーロッパは、アジア人のために滅ぼされてしまひそうになりました。

おそろしい勢です。

おどろいたのは、ヨーロッパ人です。

ローマ人だ、ゲルマン人だといつてゐる譯にゆきません。彼等は大同團結して、フン族と一大決戦をすることになりました。

バリーの東北にカタラウヌスといふ大きな原野があります。

こゝで、白人大聯合軍と黄色人種フン族が一大決戦をする事になりました。

黄白人種の大戦争です。

東軍の王はアツチラ

西軍の將は西ローマ帝國の將アエチウス

西ゴート王テトリック、アラン王

兩民族の關原の合戦です。

アツチラは勝ち誇つた大軍を提げて、威風堂々とカタラウヌム原頭に進んで來ました。

戦は、アツチラ軍の投槍によつて開始されました。

兩軍は、しばらく投槍戦をやつてゐましたが、アツチラは部下の精兵を率ひて、まづしぐらに聯合軍の中央を突破して、敵を二つに分裂さしてしまひました。

つゞいて、疾風迅雷の勢で右翼をまもる。西ゴード軍の側面に殺到いたしました。西ゴート王テオドリツクは自ら陣頭にたち、將士を鼓舞してゐたが、遂に、長槍に當つて馬から落ち、味方の馬蹄に、蹂躪されてしまひました。

この戦は實にもすごいものでした。

たつた一日でしたが、兩軍の死者十六萬餘と云はれてゐます。

久しく雨がなくて、水涸れてゐた諸川に、兩岸から流れ込んだ戦死者の血汐は、忽ち河をなして、流れたと傳へられてゐます。

その後大決戦もなく、對陣してゐたが、西ローマの將アエチウスは、たとへ天祐によつてフン族を全滅させても、かの西ゴート人が必ずローマに仇をするに違ひない。むしろ今此の強敵を残しておいて、ゲルマン蠻族と争はせた方が得策であると考へついたので、俄に聯合軍を解いて退却しはじめた。

アツチラも不思議に思つたが、敵がかへつて行くので、自分も一先づ軍をかへしました。

かうして、黃白兩人種の決戦は物分かれとなつてしまひました。

しかし、西ローマ帝國は、その後ながくつゞく事が出来ませんでした。

西暦四七六年、ゲルマン人オドワケルといふ者のために滅されてしまひました。

ローマの建國は紀元前七五三年から、西ローマ滅亡まで、實に千二百二十九年の長年月にわたつて榮えたのでありましたが、新入民族ゲルマン人の爲に遂に滅びてしまひました。

我が雄略天皇の御代であります。

榮えに榮えた大ローマも遂に滅びました。

それは何故でせう。

つまり、ローマ人が弱くなつて、周りの蠻族を防ぎきれなくなつたからです。

なぜ弱くなつたのでせう。

それは、ローマがあまり榮えた爲に、先祖たちの國を興した千辛萬苦を忘れてしまひ、樂をすることはかり考へるようになったからです。

ローマはゲルマン人といふ強い野蠻人に亡ぼされました。

しかし、若しもローマ人が、昔のローマ人のように質實剛健であり、愛國の至誠に燃えてゐたら、ゲルマン人位はわけもなく打ち破ることが、できたにちがひありません。

ローマ人を亡ぼしたのはローマ人自身であつたといはねばなりません。

こゝで、ローマの歴史れきしが終はりますが、ローマの歴史れきしは私達わたしにいろ／＼なことを教おしへてゐます。

私達わたしはローマの榮さかえたことに學まなび、亡ほろびたことに考かんへて、立派りつぱな尊たふとい使命しめいをなしとげる國民こくみんになれるよう心掛こころがけなければなりません。

八、中世のイタリー

Ⅰ ローマ法王

大ローマ帝國たいろまていこくは遂つひにほろびた。

民族みんぞくの争あらそひにほろびた。

新入しんにふゲルマン民族みんぞくは、歐洲おうしうの天地てんちを一變べんしてしまひました。歐洲おうしうの天地てんちを縱横じうわうに蹴散けちらしめました。

ゲルマン人は野蠻未開の民族でした。

しかし、彼等は強壯でした。

彼等は剛健の氣風に富んでゐました。

彼等は信義に富み、武勇にすぐれてゐました。

彼等は勤勉で、獨立の氣風に富んでゐました。

これが、ゲルマン民族の最大の武器です。ローマ帝國の廣い領土に入つてくると、そこにくつかの國を建てました。

彼等の歴史は侵略から始まつてゐます。

彼等はローマ人の長所を學ぶ事も忘れませんでした。

野蠻未開な彼等もやがて近代文明を築き上げた、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ロシアなどの國となつてゆきます。

かうした民族にかゝつては、軟弱化した、ローマ人は競争することが出来ません。

これから先^{さき}イタリー半島^{はんたう}はながく、ゲルマン人^{じん}のために幾つかの小國^{せうこく}に分裂^{ぶんれつ}させられたり、滅ぼ^{ほろ}されたりして、立派^{りっぱ}な國^{くに}が出來^{でき}ませんでした。

しかし、ゲルマン人^{じん}は、古代^{こだい}ローマ帝國^{ていこく}を亡ぼ^{ほろ}しましたが、ローマの文化^{ぶんくわ}は大切^{たいせつ}にいたしました。

ローマの文化^{ぶんくわ}と共に榮えた^{さか}キリスト教^{けう}には敬服^{けいふく}いたしました。

そこでローマ帝國^{ていこく}は亡び^{ほろ}ましたが、ローマの文化^{ぶんくわ}と、キリスト教^{けう}だけは、イタリーの土地^{とち}と共に残り^{のこ}ました。

殊^{こと}にキリスト教^{けう}の勢^{いきほひ}は益々盛ん^{ますくさか}になりました。

キリスト教^{けう}は、ヨーロッパ^{ぜんぶ}全部にゆきわたつて、上^{かみ}は帝王^{ていおう}から、下^{しも}は百姓^{ひやくしやう}に至^{いた}るまでの心^{こころ}を支配^{しはい}することになりました。

そのキリスト教^{けう}の中心地^{ちゅうしんち}がローマの町^{まち}でした。ローマ教會^{けうくわい}でした。この教會^{けうくわい}の頭^{かしら}がローマ法王^{はふわう}です。

ローマ法王はふわうは、イタリーりやうちに領地をもつて、全ヨーロッパぜんを支配しはいする程ほどの威力みりよくを持つてゐました。帝王ていわうよりも法王はふわうの方が一そう高い位たかにあつて、全ヨーロッパぜんを支配しはいしてゐました。

ローマ帝國ていこくは亡びてしまひましたが、イタリーのローマは、依然ぜんとして全ヨーロッパぜんの中心地ちゅうしんちでありました。

今ローマいまに行つて見ますと、セント・ピーター大寺だいじと云ふのが残つてゐます。

この大寺院だいじを見ただけで、ローマ法王はふわうが、どんなに勢力せいりよくをもつてゐたかゞわかります。おそらく世界せかいにこれ程ほど大きな寺院じはないでせう。

全部ぜんぶが石造せきぞうで、入り口いぐちから奥おくまでの長さながが約二一八米メートル、幅はばは廣ひろいところが一五八米メートルもあります。

その堂だうの上うへには高い圓屋根まるやねの塔たふがあります。この屋根やねの絶頂ぜつちやうには金の十字架きんじかが輝かいてゐます。十字架じかまでの高さたかが一二一米メートルで、ローマの町まちから七哩マイル位くらゐ離れたところから

も、この高い圓屋根が白く光つて眺められます。

この寺院が出来上るには一〇〇年以上もかゝつてゐます。

2 法王の破門

當時の法王の力がどんなものであつたかといふ例に一つの有名な話をいたしませう。

ローマ法王の中に英傑グレゴリー七世といふ人があらはれました。



世七ーリゴレグ

グレゴリー七世は列國の君主の上に立つて世界の王となり、列國の是非曲直を天に代つて裁判し、世界から戦争をなくしてしまひたいと考へてゐました。

ところが、その頃、ドイツ皇帝にヘンリー四世といふ、これも英雄がゐりました。
ヘンリー四世は、グレゴリー七世の考へ方に反對して、急に宗教會議をひらいて、
グレゴリー七世を廢してしまひました。

英傑グレゴリー七世は、大いに怒つて皇帝を破門してしまひました。
そして、ドイツ國民に對して、今後皇帝に對して忠誠をつくす必要のないことを命
じました。

流石のヘンリー四世も大いに弱つてしまひました。
國內に命令がゆきわたらないだけではなく中には、自分を廢してしまはうと考へる
者も出て來たのだからたまりません。

この時代にあつては破門程恐ろしい罰はなかつたのです。

ヘンリー四世も、とうとう頭を下げなければならなくなりました。

その年も暮れようとする頃に、皇帝は、皇后と皇子の外に僅か一人の家來を伴なつ

ただけで、本國を出發し、遙々とイタリーにむかひました。

途中にアルプス山があります。

冬のアルプス越えですから、まことに困難な旅です。

或る時は雪崩に魂を冷やし、或る時は絶壁をはつて、危険な山越えをいたしました。

破門されたばかりの艱難辛苦です。

やうやくにしてイタリーに入り、グレゴリー法王のあるカノツサ城に急ぎました。

カノツサの城内にをつた法王は、皇帝が來ても、容易に面會を許しません。

皇帝は、仕方がなく、自分の罪を後悔したといふことを示すために、上着を脱ぎすて、下着ばかりとなり、靴も脱いで、跣足となり、寒さに慄へながら、城の門前に立つてゐました。

なんとみじめな有様ではありませんか。

皇帝はかうして、三晝夜も立つてゐたのです。

カノツサ城主のマチルダ夫人はあまりに氣の毒と思つて、法王にいろ／＼とりなしたりやくの事で面接が許されました。



景光の願歎に人夫ダルチマ

皇帝は城内に走り入り、泣いて法王の足下にひれ伏し、深くその罪を謝して、わづかに破門の罪が許されて、ドイツにかへることが出来ました。

3 十字軍

中世に於けるローマ法王の勢力は實に

絶大なものでありました。

イタリーは、ドイツ皇帝に治められてゐました。これが、ローマ法王を常に守護し

てゐました。このドイツ皇帝を神聖ローマ皇帝と云ひました。

中世のヨーロッパは、神聖ローマ皇帝と、ローマ法王によつて支配されてゐました。

ヨーロッパの全部はキリスト教で支配されてゐたのです。

學問でも、藝術でも、みなキリスト教のためのものでした。

裁判もキリスト教の僧侶がやりました。

ヨーロッパはキリスト教といふ色に塗られてしまひました。

迷信は流行する、不善は行はれ、窮屈な、暗い世の中となりました。

世の中で、法王が一番偉くて、次に僧侶、キリスト教を守護する、皇帝、武士が、

尊敬され、一般庶民はみじめな階級となつてゐました。

ところが、かういふ時代がくづれて、ヨーロッパの中に、また／＼大きな變化が起りました。

それは、キリストの墓地のある、エルサレムがトルコ人の爲に占領されてしまつた

ので、これをとりかへす爲に長い間戦争をしたことであります。

一五六

トルコ人を征伐して、エルサレムを取りかへさなくてはならぬ！

全ヨーロッパ人は十字架をかざして、起ち上りました。

神のために、エルサレムをとりかへす。

神のおぼしめしの戦争だ、

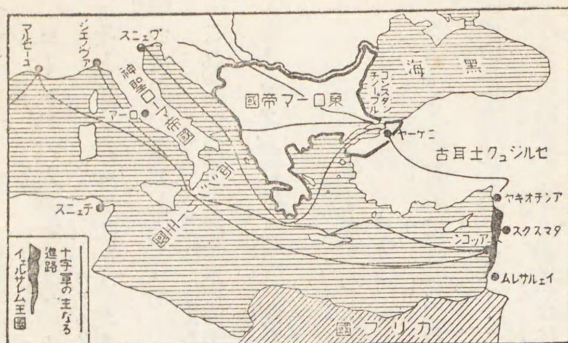
神は我等をまもり給ふ。

ヨーロッパ人は神の軍隊として、トルコに遠征をいたしました。

それが彼等のつとめであり、神の恵に浴することが出来る、この戦も勝てると信じて



十字軍の攻城



十字軍遠征略圖

ゐたのです、

この戦^{たかひ}を十字軍戦争^{じくせんせんそう}と呼^よんでゐます。

ところが、この戦争^{せんそう}を二〇〇年^{ねん}もつゞけましたが、遂^{つひ}に勝^かつ事^{こと}が出來^でませんでした。

トルコ軍^{ぐん}に神罰^{じんばつ}も下^{くだ}らなければ、十字軍^{じくせん}に神^{かみ}の祝^{しゆく}福^{ふく}もありませんでした。

十字軍^{じくせん}の方^{ほう}では子供^{こども}十字軍^{じくせん}まで出征^{しゆつせい}したのですが、この子供^{こども}達^{たち}は多く戦^{せん}死^しし、僅^{わずか}かにエヂプト^{エヂプト}に逃^にげた者^{もの}も全部^{ぜんぶ}奴隸^{どれい}に賣^うられてしまひました。

かうなると、ヨーロッパ人^{じん}も神様^{かみさま}にこりすぎてゐた事^{こと}に馬鹿^{ばか}々々^くしくなつてきます。

今まで法王^{はふわう}を尊敬^{そんけい}しすぎてゐたこと^{こと}が不思議^{ふしぎ}にな

つてきます。

ヨーロッパ人の考へ方の上に、心の上に大きな變化が起つてきました。

そしてなほ今までの大名も武士も、多く滅びてしまつたので、世の中の様子も大分變つてまいりました。

これに従つて、法王の權力といふものも今まで通り盛んにならなくなりました。
ヨーロッパには大きな變化がまた起りはじめました。

4 水の都ヴェニス

イタリーの北部にヴェニスといふ町があります。四方が海でかこまれた小さな島全體が町になつてゐます。四方が海でかこまれた小さな島全體

小さな島に、多くの人が住んで、たくさんの家が建てられてゐますから、島全體はほとんど家で埋まつてしまひ、空地は甚だ少なく、道路も極めて幅の狭いものです。

しかし海中の島ですから、細い河が、縦横に通つてゐて、島の人々は、陸の道路よりも、この狭まい川を船で往來するのを便利としてゐます。まるで、ヴェニスから生れ出たような町ですから、水の都と呼ばれてゐます。

このヴェニスの町は中世の頃、今から五六百年程の昔に盛んになつた町です。十字軍戦争によつて、武士階級が衰えてきました。

武士達は、戦争のために、その財産を失ひ、いろいろの權利も町人に賣つて戦ひました。負け戦を、二〇〇年もつゞけたのですから、戦死者も多いし、勢力もなくなつて、武士達はだん／＼と亡びて行きました。

その頃、町人達は武士が城をつくつて住んでゐるのに對して、一つの町をつくり、その町が一つの國のように獨立してゐました。

町人達は、十字軍戦争によつて、新しい東洋の世界のあることを知りました。その他、いろいろな知識を得ました。

これから、町人達は、商賣や、貿易の上に、活潑に働きました。

ヴェニスヴェニスの商人は特に海上で活動くわつどうをいたしました。市民は大きな地中海を船で自由に乗り廻まはして東洋の國々と、ヨーロッパの國々との貿易をやつたのです。

従つてヴェニスの町は、大そうお金持ちの町となり、他の立派な國々と同じように勢力がありました。ヴェニスは、金持ちの町でしたから、市内には立派なお寺や、御殿がたくさんあります。

殊に、サン、マルコ寺院と、市廳は有名です。

サン、マルコ寺院は大きなものですが、面白い形をした圓屋根がたくさんあつたり



ヴェニス市の光景

壁や柱が金色にぴか／＼輝いてゐるのが、珍らしく感ぜられます。

正面の入口の屋根の上に、大きな馬の銅像が四頭飾つてあります。

この馬は、ヴェニスの軍艦が、東ローマの都コンスタンチノールを攻めた時、あちらの寺院から分捕りしてきたものだといはれてゐますから、昔のヴェニスが、どんなに活動したかが、想像されます。

市廳の二階には大廣間があつて、その天井から壁には一面繪が描かれてゐます。

ヴェニスの歴史が描かれてあるので、皆ヴェニスの有名な畫家によつて描かれたものです。

ヴェニスの川には珍らしい舟が浮んでゐます。

立派な大理石や宮殿の影をおとした、漫々たる水に、この小さな舟は浮んでゐます。

船の舷が角のようにまがつてゐます。それが、木の葉のように輕くうかんで、すい／＼とすべつてゐます。

ゴンドラと云ひます。

ヴェニスまちの町には、コンクリートたてものの建物や、自動車じどうしゃはみられません。
中世ちゅうせいの姿をそのまゝに残のこしたゆかしい町まちであります。

九 イタリア人の活躍

Ⅰ 歐洲の中心地

大ローマ帝國たいくわばつていこく没落後はイタリアには立派りつぱな國くには出来できませんでした。

神聖ローマ帝國しんせいたいこくはドイツ皇帝くわうていがその皇帝くわうていをかねたから、ローマの國名てくめいがあつても、ドイツ化くわいしたローマであります。

イタリアの南部なんぶの方はうにはシシリー王國わうていこく、ナポリ王國わうていこくなどがありました、あまりふ

るひませんでした。

しかし、歐洲おうれうの中心地ちゅうしんちと云へば、やはりイタリアでありました。

列國れつこくの皇帝くわうていの中でも、神聖ローマ皇帝しんせい ろま ぐわうていは、皇帝中の皇帝くわうてい ちゅう ぐわうていといはれました。

歐洲おうれうからは何時いつの時代じだいでもイタリアは忘れられぬ地位ちゐをしめて居りました。

大ローマ帝國たい ろま ていこくが嚴然げんぜんとして、存在そんざいしてゐた頃は、勿論もちろん、ヨーロッパはローマによつ

て治められてゐたのです。

大ローマ帝國たい ろま ていこくが没落ぼつらくいたしますと、ローマ教會けうくわいが宗教しうけうの力で、全ヨーロッパぜん ろつぱを治め

てゐました。

一度ど、十字軍戰爭じじぐんせんさうに失敗しつぱいして、キリスト教けすや、軍人ぐんじんが衰えてくると、地中海ちゆうかいの王者わうじや

ヴェニスばうえんが貿易上ぎやういじやうの中心ちゅうしんを示します。

この様に、イタリアは常に、何かと歐洲おうれうの中心ちゅうしんを示してゐました。

今また歐洲いま おうれうは、今までのキリスト教中心けす ちゅうしんの世よの中から、新しく出直あたち でなほそうとしてきま

したが、その中心ちゅうしんもイタリアでした。

ヨーロッパでは、キリスト教けりすとうが勢力せいりよくをもつてからは、すっかり學問がくもんや文化ぶんくわが下火したびになつてしまひました。

十字軍戦争じゅうじゆんせんそうで、アジア地方あしあに進んだ文化ぶんくわをみてきて、びつくりしたのです。

キリスト教國けりすとうこくが一番ばんすぐれた國くにだと思つてゐました。

キリスト教國けりすとうこく以外は野蠻やばんなものだと思つてゐました。

ところが、野蠻國やばんこくだと思つてゐたトルコまに負け、その野蠻國やばんこくが、ヨーロッパよりも進んだ文化ぶんくわをもつてゐたのです。

歐洲人おうれうじんは何か考へなほさなくてはならなくなりました。

それにつけても思ひ出されるのが、ギリシャ、ローマの文化ぶんくわです。

キリスト教けりすとうのなかつた、ローマ時代の文化ぶんくわです。

そこでローマ時代じだいに、かへらなくてはならぬと考へてくるのは自然しぜんです。

キリスト教が、入らなかつたローマ時代に復活をしなければならぬと考へて來ます。

そういう考がイタリーから、始まつて、全ヨーロッパにひろまりました。これから、ヨーロッパに學問の研究が盛んになつて、遂に現代の文化を産むようになつたのです。

かういふ風に、イタリーは何かと、ヨーロッパの中心になつてゐました。

近頃になつて、イギリスや、フランスに、世の中の中心が移つてしまつて、イタリーはあまり、振はなくなつたのです。

これを心配して、大いに國民をはげましてゐるのがムツソリニーです。

さて、キリスト教時代が終つて、近代文化の時代に入るとき、イタリーからどんな人達がでてきたかを調べてみませう。

この時代を文藝復興といふのです。

と骨折りをいたしました。

これからだん／＼世の中が自由な春のようにのび／＼とした世の中になつてくるのです。

ペトラルカもボツカチオも詩人でしたが、今までキリスト教のお坊さん達がつくつてゐた詩と違つた、美しい詩をつくりました。

畫家の方では、同じく、イタリーからラファエルとかミケランジェロ、チチアンなどといふ、美しい畫家が出て來て、文藝復興のさきがけをいたしました。

これはたちまち全ヨーロッパにひろがつてはな／＼しい文化が生れてくるようになります。

3 地球は廻る

地球が廻る！

何なんでもないことです。

地球ちきうは西にしから東ひがしへ廻まはる！

こんな事ことは誰たれでも知しつてゐます。誰たれもかう云いつても不思議ふしぎに思おもふ者ものはありません。

ところが昔むかしの人はそう思おもつてゐませんでした。

地球ちきうは動うごかないで、太陽たいやうが、東ひがしから西にしへと廻まはつてゐると思おもつてゐたのです。

ことに、中世ちうせいの人達ひとたちは、聖書せいしよといふキリスト教けうのお經文きやうもんに書かいてあることが正ただしく

て、まちがひないと信しんじてゐましたから、決けつして地球ちきうが動うごく！

などと考かんがへませんでした。

だが、學問がくもんがヨーロッパの一般いぱんにひろまつてきて、いろ／＼と天文てんもんのことなど研究けんきうされて見みると、だん／＼聖書せいしよに書かいてあるのが正ただしくないと氣きづいてきたのであります。

地球ちきうが動うごく！

人類じんるいの中で一番ばん先さきに氣附きづいたのが、コペルニクスといふ人ひとでした。

しかし、うつかり、そんなことを云ひ出したら、どんな事になるかわかりません。何しろ、聖書に嘘がかいてあるといふことになるのだから、なか／＼大變なことです。

教會のお坊さんや、法王といった者たちが何といつておこるかわかりません。

そこでコペルニクスは三十六年間も黙つてゐて、死ぬるときにはじめて、書物にしました。

しかし、コペルニクスは、その書を見ないで死んでしまひました。

印刷屋ではびつくりいたしました。もしこんな書物が外に知れたら、どんなことになるか知れぬと、職工さん達は、側に鐵砲を用意してゐて、仕事をしてゐたといふことです。

まことに、もの／＼しいことではありませんか。もちろん本になつても、ひろくゆきわたりませんで、ごく秘密にされてゐました。

ところが、これをひろく世の中に云ひ出した者がイタリーから現はれました。
ガレリオです。

ガレリオはイタリーのビザの人です。

ビザには有名な斜塔と云つて、斜にかしいでゐる高い塔があります。

この塔の中に下つてゐたランプの揺れるのを見て不思議に思ひました。

どんなに大きく揺れても、小さく揺れても揺れる時間がどうも同じらしいと氣づいたのです。

そこで、自分のドキン／＼と打つてゐる脈を數へて、ランプの動く回数調べて見ると、同じ時間に、同じ回数だけ動くといふことがはつきりいたしました。

それからいろ／＼研究して、遂に振り時計の理を發見したのです。

なほ、ビザの斜塔の天井から、おもりを下げて振子を研究してゐる中に、また一つの不思議な事に氣がつかしました。

それは長い間に次第と振子の方向が變るといふことです。

そこでガレリオは振子の方向の變るのは、地球が動くからと考へつき、望遠鏡で天體を觀測し、遂に地球が動くものであるといふことを、確めることが出來ました。

そこで、その事を書物に書いて出しましたから、たまりません。ローマ教會の僧達けうくわいそうたちが讀んで、かん／＼に怒りました。

ガレリオをローマに呼びつけて、地球が動くものでないと云ふことを誓へと云ひました。ただが彼はやはり、

『しかし、地球は廻る』

と、口の中で云つたので、ローマ法王は怒つてしまひ、彼を罰してしまひました。

地球は廻る！

まちがひはありません。

この正しい學者をローマ教會は罰してしまひました。

ローマ教會けうくわいひとたちの人達は、ガレリオを罰ばつしてしまへば地球ちきうがうごかなくなるとでも思おもつたのでせうか。

たとへ、ガレリオが死しんでも、この正ただしい眞理しんりにはかはりありません。かうして、イタリー人じんは科學くわがくの方ほうの先鞭せんべん者しやともなりました。

4 東方見聞記

イタリー人じんは、次つぎから次つぎへと、全ぜんヨーロッパ人じんに新あららしい事ことを教をしへてゆきます。ダンテや、ミケランゼロ等らは、キリスト教けうの藝術げいじゆつ以外いぐわいに、もつと美うつくしい、のびのびした藝術げいじゆつの世界せかいのあることを知しらせ、ガレリオは、命いのちを捨すてゝ、天文界てんもんかいの不思議ふしぎを教をしへました。

こんどは、ヨーロッパ以外いぐわいに東洋とうやうといふ、たいへん立派りっぱな世界せかいがあり、その中なかには日本にっぽんといふすぐれた國くにがあると、知しらせたマルコ、ポーロといふ人ひとが、またもやイタ

リーのヴェニスから出て來ました。

ヨーロッパ人はたゞ／＼びつくりしてゐるばかりでした。

マルコ、ポーロはベニスの大商人の子として生れました。



マールコ・ポーロ

マルコの父は支那の方まで商賣に出掛けてゐたものですから、いろ／＼と珍らしい話や、おもしろい話をたくさん知つてゐました。

マルコは、父の話を聞いてゐると、だん／＼に東洋の事が面白くなり、どうしても東洋に行つてみたいと思ふようになりました。

そして十六才の時に、やうやく、父にゆるして貰つて、支那の方へ出掛けました。その頃、支那では、世界最大の國を建てたと云ふ元の時代でした。

マルコは、ベニスを出發して、中央アジアを通り、途中、たいへんな困難をおかし

て、四年めに、元の都につきました。

大王勿必烈は、マルコを、たいへんかはいがつて、朝廷に重く用ひました。

それから、マルコは十七年も、元に住んでゐました。

その間にマルコは、すっかり支那の生活になれてしまひ、方々の様子も研究いたしました。

マルコは數ヶ國の言葉に通じてゐました上に、諸國の地理や事情も知つてゐたので元帝勿必烈は深くポーロを愛しました。

元が日本に攻めよせてきて、大敗したのもこの頃です。

ポーロは、ヨーロッパと支那以外に、もう一つ、日本といふ立派な強い國があることを知つてびつくりいたしました。

後にポーロ達は二十五年振りで故郷ヴェニスにかへりました。

何しろ二十五年振りに歸つたのですから、浦島太郎と同じで、故郷の様子がすつか

り變かはつてしまつてゐました。

ながい支那しなの生活せいかうをしてゐた爲ために、顔かほかたちまで變かはつてしまひました。

なか／＼故郷こきやうの人達ひとたちが判わかつて呉くれませんでした。元げんの皇帝くわうていからいたゞいたためづらしい土産物みやげものをたくさん見みせて、いろ／＼と説明せつめいして上あげて、始はじめて判わかりました。

それから、市内しなの少年達せうねんたちが毎日まいにち、マルコのところにやつて來きては、東方諸國とうほうしよこくの珍めづらしい話はなしをきいておどろいてゐました。

マルコはあまり毎日まいにち、たくさんな人達ひとたちが話を聞ききに來くるので、一々話はなしをするのも大變たいへんなので、東方諸國とうほうしよこくのことを一冊さつの書物しよぶつに書かき上あげました。

『東方見聞記』がそれです。

この本ほんには印度いन्द、マレー半島はんたう、支那しなの事ことなどが、おもしろく、珍めづらしく書かいてあります。

日本の事ことも書かいてあります。

日本にっぽんの事をヂバンにっぽんグと云いふ名なで書かいてあります。

日本にっぽんといふのを、なまつてヂバンにっぽんグと云いつたものです、

西洋人せいやうじんが、日本にっぽんの事ことを知しつたははじめです。今いまでも、西洋人せいやうじんは日本にっぽんの事ことをヂヤバンな
どゝいふのは、ヂバンにっぽんグと云いふのが更さらになまつたものです。

東方見聞記とうほうけんぶんきには日本にっぽんの事ことを、こんな意味いみに書かいてあります。

『日本にっぽんは、支那しなの海岸かいがんから東ひがしの方ほうへ一五〇〇里かいりも離はなれた海うみの上うへの一大島國おほしまぐにです。
國民こくみんは色白いさしろく、禮儀作法れいぎさの正ただしい立派りっぱな人達ひとたちです。

神かみをあつく信しんじ、天皇陛下てんわうへいかが治をさめてゐます。

此この國くには黄金わうごんが、實じつにおびたゞしく產出さんしゅついたします。

どの位くらゐまだ埋うづつてゐるか見當けんたうもつかぬ程ほどです。

天皇陛下てんわうへいかは輸出ゆしゅつすることを嚴禁げんきんしてゐますから、貿易ぼうえきはあまり盛さかんではありません。

宮殿きうでんは、屋根やねでも、天井てんじやうでも、すべて純金じゆんきんでもつてつくられてゐます。

各室には、黄金製のテーブルや、器物がおかれてあります。

寺院の窓や床も金でつくられてゐます。

此の國はまた多くの眞珠を出します。その色は淡紅く、その形は圓るく大きくて白い眞珠よりも美事です。

この國は完全な獨立國です。

元の勿必烈が、大艦隊をもつて、征服せんとしたが失敗しました。

實に日本は、美しい寶の國です』

今まで、ヨーロッパ以外に世界がないと思つてゐた、西洋人は、この東方見聞記を讀んで、どんなにおどろいた事でせう。

そして誰でも、一度は日本に行つてみたいと考へないものはありませんでした。

したがつて、これから、どし／＼と西洋人が東洋へ、東洋へとやつてくる事になり遂にアメリカ大陸發見といふ大事件となるのです。

5 コロンブスのアメリカ發見

ヨーロッパ人は、マルコ・ポーロの「東方見聞記」を讀んでからは、しきりと、支那や日本に憧れました。

誰でもが、支那や、日本に行つて見たいと思ふようになりました。

ところが、ヨーロッパとアジアの境に、オスマン、トルコといふ強い國が出来てしまつたので、ヨーロッパ人は東洋の方へ行けなくなつてしまひました。

これで一番困つたのが、イタリーの貿易商人です。

今までインドから、いろ／＼と珍らしいものを輸入して、商賣をしてゐたものが、急にトルコの爲に途が中斷されてしまつたのですから、もう商賣が出来なくなつてしまひました。

そこで、どうしても、新らしくインドに行く途を開かなくてはなりません。

その途の一つとして、アフリカをぐるりと廻つて、インドに行く道を見つけようとするものがありました。

これは、たいへんな苦勞した揚句に、ポルトガル王の助けによりヴァスコダ、ガマといふ人によつて成功いたしました。

ところが、この頃、また新しい事を云つて人々を驚ろかした人がイタリーに出てきました。

天文學者のトスカネリです。

トスカネリは、地球が圓いのであるから、インドに、行くには、アフリカを廻つてゆくよりも、反對に西の方へ直航した方が早途だといふのです。

東方のインドに行くのに、西の方へ行つたが近いと云ふのだから驚きます。

この説を信じて、實際にやつてみたいと考へたのが、これも同じイタリー人コロンブスです。

コロンブスは幼い頃から、船乗りになつた勇敢な性質の持ち主でした。

どうかして、西の方からインドに出たいと考へたコロンブスはポルトガルが航海に熱心であつたので、ポルトガル王に、

『私は西の方からインドに出たいと思ひます。そして、インドに出る近路を發見したいと思ひますから、お援助をしていただきたくございます』と、願ひ出しました。

一體、そんなことが、できるのかできないのか、夢のような話ですから、王も決しかねて、家來達に相談いたしました。

ポルトガル人は、コロンブスの話を聞いておどろきました。

そして、新しいインド航路をイタリー人によつて、發見されるといふことを、美ましく思ひ、何とかして、そのてがらをうばつてやらうと思ひました。

そこで王に、

『コロンブスから委しく説明をきかなければ成功するか、どうかと、いふ見當がつきません』

と、返答を申し上げたのです。

コロンブスは、此の話をきいて、早速、細い計畫や、明細な地圖を提出して明瞭に説明いたしました。

ところが、卑怯にも、ポルトガル人はこれをとりあげてしまつて、しかも、ひそかにこの計畫と地圖に依つて、探検隊を出してみたのです。

もとより、こんな卑怯未練の人達によつて行はれたことですから、とても成功する筈がありません、悉く失敗に終つてかへつてきました。

そこで、家来達はくやしがつて、王様に、コロンブスの計畫はでたらめで、とても成功なんか出来そうもありませんと、申し上げてしまつたのです。

コロンブスはこの事を知つて、烈火の如くに怒つて、本國にかへつてしまひました。

本國にかへつて、本國政府に願つてみたのですけれども、やはり用ひて呉れませんでした。

しかたなく、ヴェニスに行き、計畫しましたが、また失敗いたしました。

しかし、コロンブスの志はそんな事位でくぢけるような弱いものではありませんでした。かならず、やつてみせるといふ心はます／＼強く、こんどはイスパニヤに行つて、王に歎願いたしました。

コロンブスの立派な計畫と、強い意志は、遂に、皇后イサベラによつてみとめられました。

イサベラ皇后は、コロンブスを助けて、新航路を發見させようと、決心いたしました。

コロンブスの多年の宿望が達せられたのです。彼は天にも上る心地がして、用意萬端を整へ、勇みに勇んで、イスパニヤのバロス港を出發いたしました。

西曆一四九二年八月三日

一八四

コロンブスの乗つたサンタ、マリヤ號を先頭に三隻、乗組員百二十餘人でした。寢ても忘れられぬ、ジバング、即ち日本に行けるのだ！コロンブスの胸はよろこびにあふれてゐました。

未知の大海に漕出したのです。

果たして、インドにゆけるか、日本に出るかわかりません。

地球は圓くなくて、海の果ては絶壁になつてゐるのかも知れません。考へて見れば、これ程の冒険がまたとありませうか。

船は本國を遠ざかつてゆきます。

次第に陸地から離れてゆきます。

乗組員は、だん／＼心細くなつてきました。

或る一隻の乗組員は、わざと舵を折つてしまつて、途中から引き返さうとしました。

しかし、コロンブスは許しません。

アフリカのずつと端にある島に寄航して、舵を修繕し、ふたゝび、航海をつづけました。

これからは、いよいよ未知の世界です。

アフリカともわかれてしまひます。

アフリカとわかれて、三日間といふものは、全く海に風がなく、船は油を流したような海面を、愉快に進んでゆきました。

白い鷗も飛んでゐます。

九日目の夜明け頃から少しく風が吹いてきたものですから、十分に帆を張つて、西へ西へと船を走らせました。

いまはもうすつかり陸地の影も見えません。

見渡すかぎり青海原です。

いくら行つても水ばかりです。

帆に一ぱい風をはらんでまつしぐらに、一體どこに向つて進んでゐるのでせう。

乗組員の中には寂しくなつて、泣きだすものも出て來ました。元氣がなくなつて黙りこんでゐる者もありました。

コロンブスは、そういふ人達をなぐさめるのにどんなにか骨を折りました。

かうして幾日か進んでゐる中に、船は熱帶地方に入つて、毎日猛烈な暑さがつゞきました。

おじけついてゐた乗組員達だからたまりません。

『あゝ、今に熱湯の海に行くに違ひない』
『地獄の海だ！』

そういつてゐたときに、どうでせう。風もないのに、すさまじい海鳴りがしてきました。

それとともに忽然と怒濤がわき起りました。

船は顛覆しそうです。

『いよ／＼地獄だ！』

『海神の怒りだ！』

船員達は蒼くなつて、ふるへ上りました。

これは大洋中の遠方についた暴風の餘波をうけたものですが、かつて、かうした事に出會つたことのない船員は、すっかりおじけてしまひました。

『陸なんか見えやしないぢやないか！』

『地獄海だよ』

そして、ひそ／＼と相談して、コロンブスを海に投げいれ、船を引き歸さうとしました。

その時一人が、

『陸地だ！』

陸地だ！

陸地が見えた！』

と、叫びました。

船員一同は驚いて、海の彼方を見渡しました。

見える！ 地平線に陸地の影が見える。

彼等の喜び方はたいへんなものでした。

だが、明る朝になつて見ると、その陸地は影も形もなくなつてゐました。

恐らくは暮方の雲であつたのでせう。

かうして、月日は流れて十月七日になつた。二ヶ月間は水ばかり見てゐたのである。

もう、かへるのもたいへんな距離になつてしまひました。

二〇〇〇哩以上も航行して來てゐるのであります。

コロンブスが、ジバングを發見出來ると測定した距離はとつくにすぎてしまひま

した。一同はたゞ運を天にまかせて航行しはじめました。

と、丁度この日、それは何日振りであつたらう。

『鳥だ！』

と、誰かゞ云ひました。

『鳥だ！』

皆集つて來ました。

『飛んでゆく方向を調べよ』

コロンブスは云ひました。

『西南！』

羅針盤係が云ひました。

『舵を西南へ！』

船長の命令だ。

——陸がある——

皆の胸の中にそう響いた。

『草が！』

水面を眺めてゐた一人が云ひました。

船上は急に、活き／＼として來ました。

船は西南に舵をとつて、翌朝まで進みました。

翌朝午前二時頃

先頭の船から一發の號砲がなりました。

ふと、見ると、彼方に火がちら／＼と見えるではないか。

『ヂバンダ！』

コロンブスは叫んだ。

『デバンダ！』

乗組員は狂せんばかりに喜んだ。

やがて陸影が現はれた。

船は夜更け頃、海岸についた。

陸地に安着したのだ。

コロンブスは大地にひれ伏し、感極つて泣きつゝ天に感謝いたしました。

新大陸が発見された瞬間です。アメリカ大陸が世界に発見された瞬間です。

しかし、コロンブスは、あくまでも東洋だと、思つてゐました。日本の近くか、印度

の近くだと思つてゐました。

三二三〇哩、六十九日間の苦闘だつた。これから、コロンブスは四回もきたのであ

つたが、遂に死ぬまで、東洋だと思つてゐたのであります。

後に、これもイタリー人のアメリカ、ヴェスブツヂが極めて、詳細に、研究して、

新大陸しんたいりくであることをハッキリさせた爲ために、この人ひとの名なをとつてアメリカと名づけられたのであります。

このように、アメリカは、イタリアに縁えんの深いものです。だが、このアメリカも、イタリアの發展はつてんする天地てんちになることが出来できませんでした。

とにかく、世界せかいに一つの新大陸しんたいりくが加くはつたのです。これから、ヨーロッパ人じゅんはますます學問がくもんを研究けんきうし、海外かいがいに發展はつてんするようになったのです。

このように、イタリア人は近代きんだいのもとを次第しだいに開拓かいたくして行つたのであります。たゞ、イタリア本國ほんごくが立派りつぱな獨立どくりつをしてゐなかつたばかりに、かうした寶たからは、全部ぜんぶ他國たこくにとられてしまはなければなりませんでした。

おいしいことです。

そこで、イタリアは立派りつぱな建國けんこくをしなければならぬと考かんがへてくるのも當然たうぜんでせう。こゝに近代きんだいイタリアの建國運動けんこくうんどうが始はじつて來きます。

しかしすでに他の諸國に遅れて、建國するのですから、他國と競争するには、ずいぶんと困難があるといふことも、またやむを得ないことでせう。かうして、イタリーはおくればせながら建國運動を起してゆきます。

一〇、イタリーの統一

1 建國の志士ガヴール

大ローマが亡びてからも、イタリーは、何かと、ヨーロッパの中心をなしてゐました。

ローマ法王は宗教の力で、全ヨーロッパを支配してゐました、ヴェニス、フロレンス、ゼノアなどは商業の上から、全ヨーロッパの中心になつてゐました。

その他、學問でも、藝術でも、イタリーは、ヨーロッパの中心を示してゐました。しかし、國內は幾つかに分裂してゐて、あまり振ひませんでした。



ル　　ー　　ヴ　　ー

いくら、新航路を發見しても、新大陸を見つけても、うまい汁をすふのは、全部、他國でありました。國內が統一されてゐないからです。

あのせまい、イタリーの中には、幾つも小さな國があり、法王領があつて、またお互が相争つてゐました。

フランスのナポレオンが盛んであつた頃は、ナポレオンに屬してゐました。ナポレオンはイタリー王とも云つてゐたのです。

後にオーストリアが盛んになると北の地方はオーストリア領になつてゐました。こんな工合ですから、イタリーが盛んになれる筈がありません。

どうしても、イタリーが全部統一されなくては、今に、他民族の爲に、亡ぼされてしまふかも知れません。

すでに、イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤなどは、立派な國を建國して、強大になりつゝあります、

イタリーも統一しなくてはなりません。國中がうつて一丸となつてゆかなくてはなりません。

これはイタリー人民の、全部の願になつて來ました。

この時に現はれたのが、英傑ガヴールです。ガヴールは、幼い頃から、頭がよくて十八才で、士官學校を卒業してゐます。

ガヴールは、どうしても、全イタリーが統一されねばならぬといふ考を、熱烈に持つてゐましたから、一たん、軍人をやめて、列國の間を廻つて歩きつゝ知識をひろめてきました。

そこで、カヴールは、イタリーが統一とうされるには、どうしても、他國たこくの力を借りなければならぬと、考へかんがました。

ガヴールは、イタリーの中にいくつかの國くにがありましたが、その中のサルヂニヤの國民こくみんであつたのです。

したがつて、ガヴールは、サルヂニヤの力ちからで、全イタリーを統一ぜんしようと思へたのです。

それには、誰たれか味方みかたをして呉くれなくては、他國たこくを統一とうすることが出来できないわけです。丁度ちやうど、その頃ころ、クリミヤ戦争せんそうが起つてゐました。

クリミヤ戦争せんそうといふのは、ロシアと、トルコ、イギリス、フランスの聯合軍れんがふぐんとの戦争せんです。

ロシアとイギリス、フランスとは昔むかしから仲なかが悪わるかつたのです。しかし、この戦争せんそうでは聯合軍れんがふぐんが非常ひじやうに、苦戦くせんをいたしました。

これを見たガヴールは、

『よし！ 今だ！』

と、起ち上りました。

彼はサルヂニヤ王、エマニエルに進言いたしました。

『王様！ 今です、

我國が、イギリス、フランスに近づくのにたいへんいゝ時です、
兵を出して、英佛を助けませう』

そして、遂にサルヂニヤは一萬五千の兵をクリミヤに出して、英佛を救ひました。
かうして、クリミヤ戦争は、聯合軍の大勝になりました。

英佛は、サルヂニヤから恩を受けた譯です。これで英佛はサルヂニヤに對して、何
時か恩返しをしなければならなくなりました。

このような様子につけてこんで、ガヴールはフランス王ナポレオン三世にイタリー

立運動りつうんどうの相談さうだんをもちかけたのです。

フランスは強敵きやうてきオーストリアを、おさえる爲ためにも、それが便利べんりであると考かんがへ、ガヴールに二十萬まんの兵へいを出だして獨立戰爭どくりつせんそうを助けようと約束やくそくをし、イギリスも場合ばあひによつては出兵しゆつせいしてもいゝと約束やくそくして呉くれたのですから、ガヴールの喜びよろこは、たいしたものです。

イタリー半島はんたうを統一とういつして、獨立出來どくりつできる！

ガヴールの血ちは湧わきたちました。

サルヂニヤ人じんの意氣いきも盛さかんです。

エマニエル王わうは遺書ゐしよをしたゝめて、決死けつしの覺悟かくごで一線せんに立つ事ことになりました。

光榮くわうえいのイタリーが獨立どくりつするのだ！

かくして宿敵しゆくてきオーストリアに、宣戰布告せんくふこくをいたしました。

一八五九年四月三十日にち、兩軍りやうぐんは遂つひに戰端せんたんを開ひらきました。

五月二十日に戦闘が開始されて、サルヂニヤ熱血兒は縦横に狂ひ戦ひました。

愛國の熱火に、流石オーストリアも支へる事が出来ません。

みるゝ敗退して、六月二十四日のソリフエリノの激戦では、九時間の交戦に二萬の死傷を出して、オーストリア軍は退却いたしました。

オーストリア軍は國境に退いて、堅固な要塞にたてこもりました。

長期抗戦です！

然るに、臆病なナポレオン三世は、この長期戦を嫌つて、勝手にオーストリア軍と和議を結んでしまいました。

かくして、獨立運動は半にして、ナポレオン



ナポレオン三世

三世の變心により、サルヂニヤ王の心をくちいてしまひました。

收まらぬのは憂國の志士ガヴールの心中です。王の優柔不斷を憤り、ナポレオン三世の變心を罵り、遂に官を捨て、故郷にかへつてしまひました。

折角の獨立戦争も途中で折れました。

サルヂニヤ人の心も収りませんでした。

一旦は和議を結んだサルヂニヤでしたが、ウツ／＼として、樂しめぬ日を送つてゐました。この風雲に乗じて現はれたのが、奇傑ガルバルヂーです。

2 奇傑ガルバルヂー

イタリーの三傑と呼ばれる人にガヴールとマツチニと、ガルバルヂーがあります。マツチニも早くから、イタリー獨立の事を考へてゐましたが、サルヂニヤが、オーストリアと和議を結び、ガヴールが失意のあまり、故郷にかへつてしまつたといふことをスイスにゐて聞きましたから、急いで歸國いたしました。

イタリーの人達は、皆ナポレオン三世の變心を憤つてゐます。そしてだんぐと『我々は、我々で獨立を立派にしよう』と、考へるようになりました。



サルバルガ

サルズニヤ以外のイタリー諸國もだんぐと『我々は、サルズニヤに合併しよう』と、考へて來ました。

其處にマツチニがかへつてきたのです。

マツチニは、それ等の諸國の間にあつて、たぐみにとりなし、遂にサルズニヤと中部イタリーの

大合同の下準備をつくり上げました。

その中には數百年來つゝいて來た法王領もあります。

マツチニは、この下準備を、提へて、サルズニヤ王エマニエルに、謁見して、建議

しようとなりました。

王は、再びガヴールを任用して、マツチニの計畫を相談しました。

ガヴールは喜びました、大賛成いたしました。英雄二人はこゝに手を握りあつて、イタリー建國を誓ひました。

この頃、南部イタリーにも奇傑ガルバルダーがありました。

二人は、遙かにガルバルダーに手をさしのべました。

こゝに名トリオ、イタリー建國の三英雄がしつかと、手を握り合ふことができたのです。

ガルバルダーは、イタリーのカプレラ島に生れました。

少年時代には、舟乗りが好きで、常に大海に乗り出して遊んでゐました。

彼の身體も精神も、この海上生活で、鐵のように、かたく、鍛鍊されました。

その上に彼は生れつき、燃えるような、愛國心を持つてゐました。

おほ 大きくなつて、しば／＼イタリア統一とういつの爲ために力ちからをつくし、幾度生命いくどいのちを失うしなはうとしたことがあるかれない程ほどです。

しかも、志こころざしを翻ひるがへしませんでした。

ガルバルデーはガヴールの獨立運動どくりつうんどうのしらせをうけて、血ちを躍おどらせた。

更にシシリー島たうにもイタリア統一とういつの運動うんどうが起おこりかけました。

ガルバルデーは、カブレラ島たうの義勇兵ぎゆうへい千九百をひきつれて、シシリー島たうに渡わたりました。

シシリー島たうの人民じんみんは歡呼くわんこして、彼かれを迎むかえました。あらそつて、彼かれのところあつまに集あつつてきました。忽たちまちにして、シシリー島たうはガルバルデーのために、征服せいふくされてしまひました。

ガルバルデーの軍隊ぐんたいは、皆赤色みなあかいの軍服ぐんぷくを着きてゐたために、赤色軍服軍あかいぐんぷくぐんとも赤色黨あかいりたうとも云いはれてゐました。

赤色軍服軍の偉力は、忽ち、全イタリアに傳はりました。士氣は過激で、猛烈でありました。

シシリー島を統一した赤色軍服軍は、突如南イタリアに上陸いたしました。

人民は喜び勇んで、彼の部下になります。

誰一人として、ガルバルヂーと戦ふ力はありませんでした。

南イタリアシシリー王國の都ナポリは難なく、ガルバルヂーに占領されてしまひました。

一方、ガヴール、マツチニはサルヂニヤ王を奉じて、次第に南下して來て、法王領を收めローマ市に入り、こゝに王軍と、赤色軍服軍が歴史的會見をいたしました。

ガルバルヂーは進んで、自分の占領地を王に獻上し、イタリア全土は、略々征服統一され、エマニエル王はイタリア王冠を戴き、フロレンスに都して、イタリア建國の大業が完成されました。



見會のとーヂルバルガと王ヤニヂルサ

イタリーは遂に獨立した。

光輝ある大ローマを生んだイタリーは遂に獨立した。

ガルバルヂーはイタリーが獨立すれば、もう自分の任務が終つたと云つて、一切の名譽も地位も捨て、飄然と故郷カプレラ島の我が家にかへり、一農民として靜かな一生を終つたと云ふことです。

奇傑ガルバルヂー、その美しい、尊い一生は全イタリー人に神の如き尊敬をはらはせてゐます。

その後、イタリーはプロシヤ、オーストリヤ

戦争に、プロシヤに味方をし、イタリーからオーストリヤを逐ふことに成功し、プロシヤ、フランス戦争の時に、ローマを守つてゐたフランス兵を敗つて、ローマを占領し、イタリーは光輝あるローマに都をして、全島を統一することに、成功いたしました。

この後、イタリーはヨーロッパ強國の一たる勢となり、トルコとの戦争に勝つて北アフリカに領地をひろめました。

世界大戦には聯合軍に加はり、オーストリヤを撃つて、また此の方に領地を加へました。

今はムツソリニーといふ大政治家に率ゐられて、ますます隆盛を加えてゐます。次にムツソリニーのお話をいたしませう。

一一、驍雄ムツソリニー

1 鍛冶屋の子ベニト

一代の風雲兒ムツソリニー、今歐洲はムツソリニーに依つて動いてゐると云つていい。

ギョロツとした大きな眼で睨むムツソリニーの顔は全世界の人達を恐れさせてゐます。世界中の人達で、一番日本人に親しまれてゐるのも亦ムツソリニーであります。

このムツソリニーを生んだのは、イタリーのロマニヤ地方にある、ドヴィアといふ小さな村でした。

一八八三年、七月二十九日、日本で云へば、明治十六年、うららかな日曜日、村の

鎮守祭ちんじゆさいの日ひに生うれましました。

ムツソリニーは日曜にちようつ子こです。

昔むかしから日曜にちようつ子こは幸運かううんにめぐまれてゐるといはれてゐます。

ムツソリニーはこの日曜にちようつ子こ、幸運かううんじ兒じとして生うれました。

ムツソリニーの名前なまへを、ベニトと云いつてゐます。ベニトは鍛冶屋かぢやの子ことして生うまれました。

『喧嘩鍛冶けんくわかぢ』と云いはれる亂暴らんばうな父親ちちおやの子ことして生うまれました。

このお父さんとほは、子供こどもに對たいして非常ひじやうに嚴格げんかくな人ひとでした。

ベニトも、大おほきくなると、お父さんとほの手助けてだすをしなければなりませんでした。

ベニトのやる仕事しごとは鍛冶場かぢばで、鞆ふいごを吹くことです。

暑あつい中うちなどに鍛冶場かぢばで、お父さんとほの助手じしゆめをやるといふ事ことは、たいへんな仕事しごとです。
熱鐵ねつてつから進ほとばしり出でる恐おそろしい火花ひばな。

子供のベニトが鍛冶場で、火花が飛んできたときに、顔でもそむけたり、瞬きでもし
ようものなら大變です。

『馬鹿！』

そんな事で一人前になれるかッ』

お父さんの大きなげんこつが、ぱん／＼と、頬に飛んで來ます。

しかし、少年ベニトは、口答へ一つしませんが、じつと涙を噛みしめて、我慢して
ゐました。

お父さんは云つてゐました。

『子供が、世間に出て、人に二つ打たれるより、今の中に父の手で一つ殴つておい
た方が、親のなさけだ』と。

ベニトは、少年時代から、鐵拳で鍛へ上げられました。

それが、何物をも恐れぬ、一代の英雄ムツソリニーをつくりあげたのです。

『人生は険しいものだ、

十分にきたへなければとても、人並みに生きてゆけない。』

お父さんは、また、そういつてゐます。

2 不敵な少年

鍛冶屋の子として生れ、鐵のように頑固な父親に育てられたベニトは、負けぬ氣の一徹な少年となりました。

七つの時の話です。

この村に、新しい、珍らしい機械がきました。

勢よく、ガラ／＼と廻つて、小麥を粉にしてゆく機械を、子供等も、わい／＼云

ひながら見物してゐました。

勿論ムツソリニーも見物に來てゐます。

早くから、一番見よい場所を占領して、いい氣持になつてゐました。
脚をぶら／＼させながら、おでこの下の大きい眼を輝やかして一生懸命に見てゐます。

『おい！ ベニト、

彼方で、戦ごつこだ！ 行かないか？』

突然、後から聲がしました。見ると、年上の遊び友達です。

『戦ごつこ？』

ベニトは、ひらりと、自分の場所を飛び下りました。すると

『お前なんか、こない／＼場所で見てるなんて、生意氣だ！』

横面を殴りつけておいて、いう／＼と、その子供は、場所を占領してしまつたのです。

まんまと欺された。

殴られたのも口惜しい。

しかし、欺うそまされたのはもつと口惜くやしい。その子供こどもは、強つよそうな腕うでを組くんで、口笛くちぶえを吹ふいてゐる。

ベニトは口惜くやしくたまらぬ。憎にくらしくてたまらぬ。泣なきながら、家うちへかへつて行き
ました。

七つのベニトである。

家うちにゐるのが頑固ぐんこな鍛冶屋かぢやの親爺おやぢ、

『馬鹿ばか！』

喧嘩けんわして泣ないてかへる奴やつがあるか！』

幼をさないベニトを奴鳴どなりつけました。

すると、ベニトはぴたりと泣なくのを止やめた。大きな眼めで父とほさんの顔かほをちつと凝みつめて
ゐたが、やにはに家うちを飛とび出だしました。

元もとの場所ばしょにやつてきたのです。

手にしつかと石塊いしころを握にぎつてゐる。

『おい！ 下りてこい』

『何だい！ 欺だますんだろ』

にや／＼笑わらひながら、その子供こどもは下りてきた。

『欺だますのはお前まへぢやないか、

卑怯ひけふ者！』

ベニトは年上としうへの子供こどもに組くみついた。

そして手てにもつてゐた石塊いしころで、相手あひての眉間みけんをつづけざまに、打うつた。

赤あかい血ちが、タラ／＼と、子供こどもの眼めの上うへを流ながれた。

年上としうへの子供こどもは、痛いたさに我慢がまんが出来できなくて、泣なき出だした。

それを見ると、ベニトは、安心あんしんしたように、悠然いうぜんと立たち去さつた。

『我々われは弱よわい者もの苛いぢめを許ゆるしておいてはならぬ！』

だい
大ムツソリニーは今でもそう云つてゐます。

かうしたムツソリニーは少し大きくなるともう餓鬼大將になりました。

五つや六つ年上でも、ベニトの一撃にかなふ者はなくなつてしまひました。

この少年ムツソリニー黨は、ある日、一本の林檎の木を發見いたしました。

『おい！』

あれをとつてこい！』

『よしきた』

ベニトの命令に、部下の一少年がするくと木に登りはじめました。

その時大喝一聲、

『誰か！』

持ち主だ、林檎泥棒に癪癢を起してゐた、持ち主は、いきなり鐵砲を持ち出して、狙ひをつけた。

『あぶない！』

みつかつたぞ！』

その聲と一緒に、亂暴な男もあつたもので、

ガンと一發！

『あつ！』

と、云ふ間に、木の上から子供が落ちてきた。

脚をやられたのだ。

下に待つてゐた子供達は、蜘蛛の子を散らすように、逃げ去つた。

ただ一人、少年ムツソリニーは逃げなかつた。

『どうした？』

えい！ 足か』

ムツソリニーは、素早く、ハンケチをさいて、繃帶をしてやつた。

『どうだい！ まだ痛いかい、

泣くな！ お前は勇士だ！』

少年ムツソリニーは、鐵砲をもつて、まだ怒つてゐる大人の前を悠々と、その子供を背負つて、家にかへつて行つた。

『卑怯！』

それを、彼は極端に嫌つた。

何者をも怖れず、身をもつて友をまもる！ あまりの豪膽なようすに、大人は啞然として見送つてゐました。

ムツソリニーは、いたづら者でありました。いたるところで、亂暴をいたしました。しかし、あくまでも、正々堂々とやるといふのが、ムツソリニーの、やりかたでした。

卑怯！

と、云ふ事は、命を捨てても、やらぬといふのが彼のやりかたでした。

3 故郷を出づ

餓鬼大將で、亂暴者の、少年ムツソリニーは村の嫌はれ者でした。

大人はみんな、彼の敵でした。

でも、彼は、平氣であばれまはつてゐました。

たつた一人、ムツソリニーのお母さんだけは心から、彼を愛してゐました。

お母さんをローザといひました。

優しい、物しづかな、お母さんでした。

ムツソリニーに勉強を教えたのもお母さんでした。

世間の嫌はれ者になつてゐたムツソリニーを、

『この子は、變つてゐる、

『今にえらくなる』

そう思つたのもお母さんでした。

あばれまはる、ムツソリニーの心の中をよりく知つてゐたのもお母さんでした。

ムツソリニーは本當に悪い子供ではないのです。ただ、身體中にみちてゐる元氣と、誰よりも偉らくなりたいたと云ふ功名心とが、ムツソリニーを亂暴にしてゐたのです。

お母さんはそれをよりく知つてゐました。だから、亂暴なムツソリニーも、優しいお母さんの前では、靜かにしてゐました。

彼は自叙傳の中に、

『僕が勇氣を示すごとに、僕の身體には、生傷が残つた。僕は、その傷を、お母さんに見せまいとして骨を折つた。

晩のごはんのとき、肱にうけた傷が、見えやしないかと、パンをとるために、手をおぼすにも、ヒヤ／＼した』

と、書いてゐます。

かうしたムツソリニーも、だん／＼大きくなつてくると、せまい村がいやになつてきました。

村の餓鬼大將ぢやつまらなくなつてきました。

何か、もつと、大きな世界がある！ そんな氣がしてなりませんでした。

その頃から、彼は夢中になつて、書物を読み始めました。

書物は、彼に、いろ／＼な珍らしい事を教えて呉れました。

コルシカ島に生れた、一世の英雄ナポレオン、ボナバルト、世界の王と云つた、アレクサンドル大王、ローマの英雄ケーザル、どれも、これも、少年ムツソリニーの血を湧かしました。

餓鬼大將では駄目だ！

そう考へてきたのです。

お母さんのローザは、このムツソリニーの心をよく知つてゐました。

——この子を、こんな片田舎においてはいけない——
そう思ひました。

『ベニトは、ただの子供ではありません。』

だから、中學校に入れて下さい』

と、お母さんは、お父さんに頼みました。

『馬鹿！』

あんなところは人間の屑のゆくところだ』
頑固な鍛冶屋さんは、怒鳴りつけました。

優しいお母さんは、子供の爲にと、幾度も、幾度も、涙を流して頼みました。
流石のお父さんも、たう／＼我を折つて、

『仕方がない、』

やつてやらう』

と、承知しょうちをしてくれました。

町まちへ行く！

中學校ちゅうがくかうへ行く！

ムツソリニーの心こゝろは躍おどつた。

やるぞ！

何かなにしら出來できる。大きい仕事しごとが出來できる！ そんな氣持きもちちがして、ムツソリニーは村中むらぢゅうかけまはつて喜びよろこびました。

そして、もうこの村むらとも別れねばならぬと思おもふと、寂さびしくもなりました。
なつかしい故郷こきやうの山野さんや。

一緒にしよ、いたづらをして歩あるいた友達ともだち、

お母さんかあ、

おとうと いちろうと
弟や妹、

お父さん、

みんなと別れねばならぬ。

ベニト、ムツソリニーは村中をかけまはりました。愈々明日出發と云ふ日には、友達と喧嘩して、なぐりとばした、積りで、柱を、げんこつで力一ぱいぶつつけました。亂暴の仕納めと殴ぐりつけたのが柱だからたまりません。指の關節をいためてしまつて、家を出る時は繃帶をしてゐたといふのだから愉快な少年ではありませんか。お父さんは、自分で、馬車の支度をしました。馭者臺に父が乗つて、ムツソリニーがその側に乗りました。

お母さんは戸口に立つて見送りました。

溢れる涙を、ヂツとこらへて、病身のお母さんは青ざめた顔で立つてゐました。

お母さんは一滴も涙を出しません。

一言も言葉（ことば）を發（は）しません。

ただ黙（だま）つたまま門口（かどぐち）に立（た）つてゐました。

優（やさ）しかつたお母（か）さん。世（よ）の中（なか）で一番（ばん）なつかしいお母（か）さん。身（からだ）體（たい）のお弱（よわ）いお母（か）さん。

今日（けふ）かぎりお別（わか）れしてしまふのだ。

ムツソリニーは「ちら！」とお母（か）さんの方（ほう）をみ（み）ました。

お母（か）さんは、かすかに微（ほ）笑（え）みました。

亂（らん）暴（ぼう）なムツソリニーも、思（おも）はず、熱（あつ）い涙（なみだ）が臉（まへ）の底（そこ）から湧（わ）いてきました。

馬（ば）車（しゃ）は走（は）り出（だ）しました。

お母（か）さんは何（い）時（じ）までもたつてゐました。

ムツソリニーはとめどもなく、涙（なみだ）があふれてきました。

後（あと）を振（ふ）りかへて、小（ち）さくなつたお母（か）さんの影（かげ）に、

『お母（か）さん、

ベニトはきつと偉えらくなりますよ』
と、叫まけびました。

4 中學校を放校

ムツソリニの入はいつた學校は、キリスト教けろの教會けうくわいのやつてゐる、宗教學校しうけうがくかうであります。
た。その頃は、この近所きんじよにそれ以外いぐわいの學校がくかうはなかつたのです。

亂暴者らんぼうもののムツソリニの入はいつた學校がくかうが、宗教學校しうけうがくかうです。

『學校は牢屋ろうやだ！』

はちきれそんな元氣げんきをもてあまして、ムツソリニはそうつぶやきました。

檻をりに入はいつた虎とらのように、のしつ／＼と校庭かうていを廻まはり歩あるきました。

そして、彼は、勉強べんきやうをそつちのけにして、歴史れきしや英雄えいゆうの傳記でんきに讀よみふけりました。
古代ローマこだいの歴史れきしを貪むさばり讀よみました。

『あゝ！ 光榮ある古代ローマの歴史よ！』

彼は絶叫いたしました。

『チベル河の畔り、七つの丘に始つて、遂に、當時の世界を支配した祖先の赫々たる功業は今何處にあるか』

ムツソリニーは古代ローマの昔を思ひ出しては現在のイタリアの姿が物足りなく考へられて來ました。

『大ローマ時代の光榮にかへれ、

大ローマは世界を征服してゐたではないか』

少年ムツソリニーは胸の血を湧かしながら、

『よし！

俺がやる！

俺は古代ローマと新イタリアを結びつける鋼鐵の鎖になつてやらう』

ムツソリニーはそう決心けつしんしました。

ローマ、ローマ

彼は教科書けうくわしよにも、ノートにも一ぱいかきつけた。ローマ、ローマ。

ナイフで机つくえにも、椅子いすにも刻きざみつけた。

勉強べんきやうはそつちのけにしてゐたが、ムツソリニーの一生しやうの決心けつしんはこゝでしつかりときめられました。

そして、大ローマ帝國たいていこくの基もとを開ひらいたケーザルを尊敬そんけいして、

『ケーザルの如ごとく國くにを起おこして、ケーザルの如ごとく刺さされて死しなう』

と、心こゝろに誓ちかつた。

かうしたムツソリニーであるから、他の坊主ぼうずくさい生徒せいとと、うまくゆく筈はずがない。

或ある日ひ、遂つひに喧嘩けんかをしてしまつた。

喧嘩けんかをすれば昔むかしの亂暴者らんぼうものである。

『何を！』

と、云つた時は相手は血を流してたほれてゐた。

彼は直ぐ校長の前に呼びつけられた。

『神の名によつて放校を命じます』

『謹んで、お受けいたします』

彼は、いうくくと校長室を出て行つた。

彼は、晴れくとした心になつた。

『村の方がいいや』

そうつぶやいた時、彼は突然足をとめた。

『アッ！ お母さん』

村を思ひ出した時に、お母さんのまぼろしが浮んだ。

故郷を出る時に、門口にシヨンボリと立つてゐたお母さんを思ひ出した。

『ベニトはきつと偉くなりませうよ』

と、誓つた言葉を思ひ出した。

彼の頬には涙が流れてゐた。

『俺はかへらんぞ！』

偉くならん中へはかへらんぞ！』

彼は、その日の中に荷物をまとめると、こんどは次の町に出かけて、翌くる日は、もう師範学校の生徒になつてゐた。

實にアツと云ふ間の出来事です。

ムツソリニーのやりかたの中にはぐずぐずしたことがあります。

物事の機敏なことは電光石火の如くでした。

5 ムツソリニー先生

師範學校しはんがくかうに入はいつて三年間ねんかん、ムツソリニーには腹はらがたつても、面白おもしろくなくても、がまんしようけんしやうと決心けつしんいたしました。

『お母さんかあにすまない』

そう思おもふと、何なんでも、がまんでできると思おもつたのです。

『一日いちにちでも早くはや、お母さんかあを安心あんしんさせなくてはならん』

そして彼かれは、

『よし、俺われは人ひとが三年ねんで卒業そつげふするところを二年ねんでやつて見みせるぞ』
決心けつしんをすると、ムツソリニーは全まったく別人べつじんのようになる。

誰たれとも話はなしをしない、遊あそばない、ただ黙々もくもくとして、猛烈もうれつな勉強べんきやうをつづけて、彼かれは見事みごとに二年ねんで師範學校しはんがくかうを卒業そつげふいたしました。

卒業證書そつげふしやうしょを握にぎると、ムツソリニーは飛とぶように、故郷こきやうへかへつてゆきました。
なつかしの故郷こきやうへ！

ムツソリニーは卒業間近の時、よくお母さんの夢を見ました。

學校を卒業した。

小學校教員になつた。

十八才のムツソリニーは胸を躍らせて故郷へかへつた。

眞先きに迎へたのは、幼い弟や、妹であつた。なつかしいお母さんは優さしい微笑で、

『お歸り、ベニト』

嬉しそくに、大きくなつたムツソリニーをしげ／＼と眺めながら、そう云つただけでした。

それだけで、ムツソリニーは十分でした。

亂暴なくせにお人好しのお父さんは躍り上つてよろこびました。

かうしてムツソリニーは月給二十圓の小學校の先生になりました。

未來の大宰相ムツソリニーも、第一歩の踏み出しは二十圓の月給取りでした。

その二十圓の中から十五圓は下宿代になつてしまつたのです。

おでこの大きい、目玉のギョロツとした先生は、しかし、子供達に一番なつかしまれた先生でした。

ムツソリニー先生は、子供達と一緒に、かけつこをしたり、相撲をとつたり、お話の時は大きな聲でローマの話をよくして呉れました。

子供達は、みんな、ムツソリニー先生が好きになりました。

丁度この頃、この村に、イタリア建國の志士ガルバルズの銅像がたつことになりました。

近郷近在の大騒ぎです。

何しろ、イタリアの神様のよう慕はれてゐるガルバルズ將軍の銅像が建つといふのですから、たいへんなものです。

ところが、いよ／＼その日になつて、一つのコまつたことが出来ました。

それは、この日にガルバルヂの演説えんぜつをしてくれる約束やくそくになつてゐた人が急にこられなくなつてしまつたからです。

『こまつたなー』

『どうしよう?』

と、村人達むらびとたちは相談さうだんしました。

『これは町長ちやうさんにやつてもらふんだね』

『町長?』

あんな靴屋くつやのおひぼれなんかになになにが出来できるものか』

『うん、いゝことがあるぞ』

『いゝこと?』

『そうだ!』

學校のムツソリニー先生に頼まう、あの人はガルバルヂ崇拜家、きつとうまく話すぞ』

『それは、うまいところへ氣附いた』
と、十八才のムツソリニー先生に白羽の矢がたちました。

ムツソリニーは演説がたいへんうまいのです。生れつきの雄辯家です。
胸にひびくような力強い言葉で、熱心に話してゆくのですから、聞いてゐる中に誰でも夢中になつてしまふ。

そして、ガルバルヂが、イタリー青年に叫びかけたように、愛國の至誠に燃えて語るムツソリニーの演説は、聞く人の心に砲彈の様にぶつかつてゆきます。

『ガルバルヂの再來！』

萬歳！

ムツソリニー！』

拍手はくしゅと喝采かつさいの嵐あらしです。

演説えんさつは大成だいせい功こうでした。

ムツソリニーの人氣にんきは素張すばらしいものです。

ところが、町長ちやうちやうの靴屋くつやの親爺おやぢさんは苦にがり切きつてゐます。

自分じぶんの領分りやうぶんでも侵をかかされたように考かんがへてゐます。

この事ことがあつてから、町長ちやうちやうさん、何かと、ムツソリニー先生せんせいにあたなりちらします。

『先生せんせいともあらうものが除幕式じよまくしきに上着うはぎを抜ぬいで話はなしをするとは何事なにことだ！』

と、喰くつてかかります。

あまりいろ／＼と、邪魔じゃまをするので、ムツソリニー先生せんせい面倒めんたうくさくなつて、ボンと

辭表じへうをたゞきつけると、さつさと先生せんせいをやめてしまひました。

そして教室けうしつに行いつて、

『甚はなはだ殘念ざんねんですが、先生せんせいは今日限けふかぎり、この學校がくかうを去きらなければなりませんね』

皆ぢーつと、先生の顔を見てゐます。その中に誰かすすり泣きをはじめました。

『最後に！』

先生も涙ぐみました。

『一言だけ！』

そう云つて、黒板に「堅忍不拔」と書きました。

『これをおぼへてゐて、立派な國民になつてゐて呉れ』

子供等は、先生にとりすがつて別れを惜しみました。皆泣いてゐました。

6 賢母ローザ

失業したムツソリニーは故郷へ歸れません。失業しましたと歸れば、またお母さんに心配をかけるに定まつてゐる。

『そうだ！』

働から

それにはスイスがいゝ』

だが、ムツソリニーには旅費がありません。

彼はお父さんに旅費を送つて呉れるようにと、電報をうちました。

その頃、家はどうかであつたのでせう。

ムツソリニーのお父さんは、頑固な人であると共に、政治狂でありました。

選舉など始まると、仕事を放つておいて、演説をして歩きます。

ムツソリニーの手紙のつく、前の日、お父さんは反對黨の選舉に防害をあたへたと

いふので警察に連れて行かれてしまひました。

後に残つた病身のお母さんは、全く途方にくれてしまひました。

夫は牢獄、

幼ない子供は二人もある。

しかも、自分^{じぶん}は病身者^{びやうしんもの}、

『ベニト、お前^{まへ}がゐてくれたらねー』

と、悲^{かな}しみに暮^くれてゐました。

『いつそ、全部^{ぜんぶ}でベニトのところへ行^ゆかうかしら』

お母^{かあ}さんは、その晩^{ばん}まんじりともしないで考^{かんが}へてゐました。

その長男^{ちやうなん}ムツソリニーから、

『スπισニユク、リヨヒスグオクレ』

と、電報^{でんぱう}が來^きたのです。

自分^{じぶん}達^{たち}だつて、くらしが出來^{でき}なくなつてゐるではないか、それなのに――

しかし、お母^{かあ}さんは、

『出世^{しゆつせまへ}前の大切^{たいせつ}なからだ』

と、自分^{じぶん}の身^みのまはり品^{しな}を賣^うりのはらつて、二十圓^{ふんだま}黙^{もく}つて送り^{おく}ました。

血の出る様な苦しい二十圓だつた。

杖とも柱とも頼むムツソリニーが遠く、スミスに行つてしまふ。

先生をやめて、スミスに行くからには、何か事件があつたに違ひない。

しかし、ベニトは、必ず運命を切り開いて立派に成功するに違ひない。

子供の爲には、どんな苦しい事でも忍ぶのが、親としての務だ。

弱々しいお母さんの心の中には、尊い力がありました。

家の事は何にも知らせないで、お母さんは二十圓の金を送つたのです。

そして、

『神様！ どうぞ

ベニトをお助け下さいまし！』

と、獨り、神に祈つてゐました。

勿論ムツソリニーはそんな事を知る筈がありません。

町長さんちやうくの靴屋くつやの親爺おやぢと喧嘩けんくわをすると、生徒達せいとたちに見送みおくられてスキス行ゆきの汽車きしやに乗のつてしまひました。

『田舎ゐなかぢや駄目だめだ！』

廣ひろい天地てんちが俺われを待つてゐる』

失業青年しつげふせいねんムツソリニーは、遙はるか遠とほい自分じぶんの未來みらいを想像さうぞうしながら、汽車きしやに乗りのました。

『お母さんかあ！』

ベニトはきつと偉えらくなります』

と、口くちの底そこで強つよく云いひました。

國境こくきやう近くの驛えきで、最後さいごのイタリヤ新聞しんぶんを買かひました。

スキス行ゆきの汽車きしやに乗りかへるために下車げしやしたからです。

買かつた新聞しんぶんを何心なにげなく開ひらいて、

「あ！』

ムツソリニーは思はず、聲を出しました。

お父さん捕縛の記事が出てゐたのです。

『お父さんが牢獄に！』

はじめて、家の事情を知つたのです。

いまごろは、幼い妹や弟は、病にやつれたお母さんの膝にもたれて、自分の事

を考へてゐるのではなからうか。

お母さんは途方にくれてゐるのではなからうか、

もう、景氣のいいお父さんの鐵槌の音も聞こえない。

淋しいだらうな、今晚あたりは………

何を考へてゐるだらうか、

せめて、俺でもゐてやれば、

あゝ、そうだ、

歸かへらう！

歸かへらう！

山間さんかんの停車場ていじやちやうに、新聞しんぶんを握にぎつて、ムツソリニーは、考かんがへ込んでゐました。

しかし！

何故なぜお母かあさんは、黙だまつて金かねを送おくつてくれたのであらう。

さうだ！

心配しんぱいせずに、新あたしい運命うんめいを拓ひらけ、

そう、心こゝろに念ねんじてゐられるのだ、

すまない！

このお母かあさんの心こゝろを無むにしては……………かへりたい。

かへつて、お母かあさんをなぐさめたい。

しかし、それは本當ほんたうに親孝行おやかうになるだらうか？

いや！ 違ふ

俺は偉らくならなければならぬ。

ムツソリニーの心が、いろ／＼と亂れてゐる時に、スミス行きの列車が入つて來た。
發車のベルがなつた。

『行かう！』

彼は、スミス行きの汽車に飛びこみました。

『お母さん

すみません

ベニトは、今に、きつと、偉らくなつてかへります』

7 どん底生活

牢獄につながれたお父さん！

幼い二人の子供をかかえた病身のお母さん。腸がちぎれるようなムツソリニーは國境を越えて、スミスに入つて行つたが、果たして、スミスにムツソリニーの幸福が待つてゐたでせうか、

見ず、知らずの外國に、たつた一人入りこんで、どうなるといふのであらうか。木賃宿に陣どつて、ムツソリニーは、職を探がさなくてはならぬ。

働かなければ食へぬ。

食はなければ、何も出来ぬ。

世界の大ムツソリニーと云はれる彼も、スミスに入つて、シヨボ／＼と職業を探し歩いたこともあつたのです。

探しあてた仕事、

手押車に石を載せて、建築中の二階に搬ぶといふ、労働者になりました。

大望を抱いて、

血の出るようなお母さんの金を旅費で、スミスに來たムツソリニは一介の勞働者になりさがつてしまひました。

教員上りの十八歳の勞働者である。なれない身體で、よた／＼と、その單純な運搬を百二十一往復した時には、神經がなくなつてしまつたように疲れてしまひました。

その晩は、焼いた馬鈴薯を晩食にして、藁の寢床の上に眠りました。

翌朝になつて見ると、全身が疲れきつてしまつて、起き上げられない程でした。それでも仕事に出かけなければなりません。

流石不敵のムツソリニも、この激しい勞働には一週間でまいつてしまひました。

重い足を曳つて、親方の前に立ち、

『親方、もう止めます、

賃銀を計算して下さい』

『何だ、もう止める？』

どうして止すんだ⁺』

『身體がつづきません』

『身體がつづかない？』

馬鹿！ だから、苦しいぞと云つたぢやないか』

ムツソリニーは黙つて、その顔を見上げてゐます。

『何を黙つて、人の顔ばかり、睨みつけてゐるんだ』

『賃銀を計算して下さい』

『賃銀？』

この泥棒奴！』

親方はいきなり、ポケットから、一握りの銀貨をつかみ出すと、机の上に抛りつけた。

ムツソリニーは、あまりの口惜しみに、ムラ／＼として來たが、昨日から食べない

空腹と疲勞でたほれそうである。

着物も、靴もぼろ／＼である、

彼は黙つて、抛り出された銀貨を拾ひあつめて、出てゆきました。

それからロザンヌの町に行きましたが、こゝでも、彼は幸福になれませんでした。

彼はそれから、方々に自分と同じようなイタリー人がごろ／＼してゐるのをみつけ

ました。

ムツソリニーも無一文の放浪者になつてしまひました。

朝から何にもたべてゐません。公園のベンチに腰掛けて、見てゐると、立派な様子をして歩くのは大抵イタリー人ではありません。

別の連中は、

『錢を下さい』

と、すぐ寄つて行くのであるが、

ムツソリニーは決して乞食をしなかつた。

共同便所きょうどうべんじょの中に寝ねたり、古い船ふねの中で夜よを明あかしたり、橋はしの下したに宿やどをとつたりしたこともありました。

しかし、ムツソリニーは、このどん底生活どんせいくわつの中で、何なにを感じかんじ、何なにを考かんがへてゐたことであらう。

『どうして、イタリー人じんは、外國人ぐわいこくじんに馬鹿ばかにされるのだらう』

と、云いふことと、

イタリー人じんは金かねにきたない。

イタリー人じんは怠なまけ者ものだ。

イタリー人じんは勇氣ゆうきがない』

と、いふ、イタリー人じんの缺點けつてんを知しりました。

『そうだ！

俺われはこのイタリーを、根底こんていから救すくはねばならぬ』

と、決心けつしんしたのです。

昔むかしのローマのように立派りっぱな國くにをつくり上げなければならぬと考かんがへたのです。

えらい人ひとは、どんな境遇きんぐうにあつても、普通ふつうの人ひととは違ちがつた考かんがをもつてゐます。

無む一文もんになつて、橋はしの下したに寢ねてゐたムツソリニーは、ローマを救すくふものは自分じぶんであると考かんがへてゐたのです。

しかし、これからもまだ／＼彼かれの苦くるしい生活せいくわつはつづきます。

天將てんまさに大命たいめいを下くださんとするや、その身心しんしんを苦くるしめる

と、昔むかしから云いつてゐます。

どんな乞食こじきよりも、どんな貧乏びんぱうよりも、もつと苦くるしい生活せいくわつをやつてきたのが、ムツソリニーです。

現在げんざいのムツソリニーに、何者なにものをも恐れぬ力ちからと何者なにものをも打ち碎くだく強い力ちからのあるのは、かうしたどん底生活時代どんせいくわつじだいに鍛きたえられた力ちからです。

これからいろいろな勞働をいたしました。その中でも、ムツソリニーは左官屋の腕前は一人前になりました。

冬になつて、建物の仕事がなくなると、酒屋の樽拾ひにもなるのです。

左官屋さんになつたり、樽拾ひをしてゐる間に、だん／＼と、生活も樂になり、夜は大學の夜學に通つて勉強してゐました。

その中にムツソリニーの名前は、若い青年の間に評判になつてきました。

その頃から、また／＼昔の亂暴と、負けじ魂が首をもたげて、こんどは餓鬼大將ではなく、青年達の間の一方の大將となり、喧嘩はする、演説はやる、社會主義者の仲間入りはすると云つた工合で、牢獄にはぶちこまれる、國外に追放されるといふ、流浪生活がつづけられます。

スピスを追はれて、ドイツへ、ドイツからフランス、オーストリア、と、どここの牢獄にも打ちこまれ、どこの國からも追はれつづきでありました。

そうした中にも、ムツソリニーの名は、擴つてゆきました。

傑い若者だ！ 今に何かするに違ひない！ そう云つて、青年達から尊敬されてゐ

ました。

列國から追放されて、彼がイタリーに歸つて來た時には、多くの青年達が、彼を停車場に迎えてゐました。

8 母の死

偉い人になります。

そう云つて、故郷を出たムツソリニーは、どん底生活と、牢獄生活の旅をつづけてゐます。

その間に丈夫な身體と、強い心を養つて、歸つて來ましたが、相變らずの無一文でした。

苦勞くろうしつづけのお母かあさんに、何なに一つ報はぐゆることなく、こんどは兵役へいえきの義務ぎむを果はたす
爲ために狙撃兵そげきへい第十一聯隊れんたいに入營にふえいいたしました。

鍛冶場かぢばから小學校せうがく教員けういんへ

教員けういんから流浪るちうへ

流浪るちうから軍隊生活ぐんたいせいくわつへ。

運命うんめいの神様かみさまは、次々つぎにムツソリニーを曳ひきづり廻まはします。

その間あひだやさしいお母かあさんは、病身びやうしんのからだで、ぢつと、子供こどもの成功せいこうを待つてゐまし
た。

たとへ、どんな生活せいくわつに陥おちいつても、お母かあさんはムツソリニーを信しんじてゐました。

ムツソリニーの志こころざしは大きかつたのです。

大きな志こころざしはなか／＼達たつしられるものではありません。

『ムツソリニー二等兵とうへい！』

一寸こい』

『ハッ』

中隊長の緊張した顔でした。

中隊長は一枚の電報を渡しました。

ムツソリニーの顔色は土のように蒼白となつた。

『ハハキトク』

彼は歸休を乞うて、停車場へかけつけた。とるものもとりあへず、家にかけてつけた。

『お母さん！』

お母さん！

ベニトです』

室に入るや、いなや、母の手を握つて叫んだ。

だが、母は答へませんでした。

微かにうなづいたようであつたが、一言も言はないで、息をひきとつてしまひました。ムツソリニーは聲をあげて泣きました。

橋の下で寝てゐたときも、

牢獄にゐたときも、

一日も忘れたことのなかつた

お母さん！

そのお母さんが死んでしまつたのだ、

この世でたつた一人の味方であつたお母さん、

思へば氣の毒なお母さんでした。

ムツソリニーの出世は信じてはゐたが、

餓鬼大將

浮浪人

ふりやうせいねん
不良青年

にふくしゃ
入獄者

と、^{みぢめこども}惨な子供だけしか知らないで、^し死んで行つたお母さん！

イタリーの^{だいさいしやう}大宰相となつた姿を^{ずがた}一目見たらどんなに^{よろこ}喜んだであらうに、^{びやうしん}病身なお母

さんはそれまで^{いのち}生命を保つことが出来ませんでした。

ムツソリニーはどんなに^{かな}悲しく、^{ざんねん}残念であつた事^{こと}でせう。

それからのムツソリニーは人間^{にんげん}が變つたようでした。

^{ひるうち}晝の中はお父さん^{とほ}を助け、^{よるしづ}夜は靜かに讀書してゐました。

^{がきたいしやうじだい}餓鬼大將時代も、^{ふらうじだい}浮浪時代も忘れてしまつたように、^{どくしよ}讀書を靜かに、つづけまし

た。

^{あひだ}この間にムツソリニーの^{かんかへ}考は深まつて行つたのです。

^{みちあるとき}道を歩く時でも、^{みやきんじらう}二宮金次郎のように本を讀んでゐました。

深い谷川ふか たにかはの上うへにかくると、本ほんをとちて、ぢーつと考かんがへこんでゐました。
その間に中學校教員の免許狀あひだ ちうがくかうけうるん めんきよじやうもとりました。

9 ムツソリニータンク

浮浪生活ふろうせいくわつによつて、ムツソリニーは、あらゆる苦難くなんに打ち勝かつ、身心しんしんを鍛鍊たんれんいたしました。

列國れつこくを流浪るちうして、彼はイタリー人じんが、外國人ぐわいこくじんに、どんなにか、馬鹿ばかにされてゐるかを見みました。

イタリー人じんの、怠け心なま ごころ、だらしなさ、をも知りました。

しかし、イタリーはかつての歐洲おうしうの支配者しはいしやであつたではないか。

かつての、イタリー人じんは、勇猛果敢ゆうもつくわかん、勤勉力行きんべんりよくかうの、人民じんみんであつたではないか。

このままでは、イタリーは先祖せんぞに申し譯わけない。

このままでは、イタリーは滅びるより別に仕方がない。

無一文のムツソリニの心には、烈々たる、愛國心が湧いて來ました。

イタリー人の心をたたきなほさなくてはならぬ！

イタリー國を大ローマ帝國の昔にかへさなくてはならぬ！

『そうだ！』

俺はケーザルのように戦つて、ケーザルのように刺されて死のう！』

かくすればかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂

日本の志士吉田松陰は、かう詠つてゐます。一生を國家に捧げた吉田松陰は、遂に幕府のために小塚原で、首を斬られました。

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何ときくらん

ムツソリニ一の心は、日本人によく似てゐます。浮浪生活、牢獄生活の中で恐らく

ムツソリニ一は、やさしお母さんローザを思ひ出して、

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何ときくらん

と云ふ氣持ちになつてゐたでせう。

しかし、ムツソリニ一の中に流れてゐる、愛國の血潮の中には、

やむにやまれぬ大和魂

に似た、力がふくまれてゐたのです。

なつかしいお母さん

不幸なお母さん

何一つ樂しませる事なく、死なしてしまつた、お母さんの事を思つて、大ムツソリニ一の心は暗くなりました。

毎日、お母さんのお墓に来ては、ながいこと、涙を流してゐたムツソリニーの姿を
村人達によく見かけました。

しかし、お墓に詣るたびにムツソリニーは

『ベニト！』

勇氣をお出し

お前は必ず偉らくなるんだよ』

と、お母さんが云つてゐるように思へました。

『そうだ！』

女なら、なげき、かなしんでゐるのもよからう。

だが！ 男は勇氣を出して世の中のために闘はなければならぬ。

社會のために働き、わが家、わが國の名をあげんために、なげき、かなしんでゐてはならぬ』

ムツソリニーは奮ふるひたちました。

これから、ムツソリニーは、タンクタンクの如ごとくに勇敢ゆうかんに、はげしく、活動くわつどうを開始かいしいたします。

第一だい、イタリー人じんの心こころを根本こんぽんから、たたきなほさなくてはならぬ。

彼かれはどんな人ひとの集あつまりの中にでも、どしどし出掛でかけて行いつた。そして火ひの出でるような熱辯ねつべんをふるつて、彼等かれらの心こころをふるひたたせました。

彼かれはあらゆる雑誌ざっし、新聞しんぶんに書かきたてた。しまひには自分じぶんで新聞しんぶんを出だして、猛烈もうれつに書かきたてました。

その新聞しんぶんは、弱よわり、かなしんでゐる者ものに元氣げんきをあたへるようように書かき、悪い政治せいちが行おこなはれれば、遠慮會釋えんりよあしやくなくビシ／＼とやつつけました。

愛國あいこくの至誠しせいが迸ほとばしるところ、聞きく者ものをして、感激かんげきせしめずにはおかぬ。

役人達やくにんたちは彼かれを邪魔者じゃまもの扱あつかひにした。

かれは牢獄ろうごくにつながれてしまふかも知れない。そんな、噂うはさがたちました。友達ともだちは心配しんぱい

してムツソリニーの下宿げしゆくにやつてきました。

扉ドアを開ひらいて友人達いうじんたちは、思おもはず、

『呀あッ』

と、云いひました。

もう、ムツソリニーを捕縛ほげくするために警官けいくわんが來きてゐるではないか。

鋼鐵かうてつタンク、ムツソリニーは、その前まへで悠々いうくと、新聞しんぶんを讀よんでゐます。

『君きみ！』

ムツソリニー君くん！』

友達ともだちは思おもはず叫さけびました。

『あゝ一寸待ちよつとまつて呉くれ給たまへ

この記事きじを讀よんでしまふから』

落ちつきはらつて、新聞を讀んでしまふと、友達と、氣輕な調子で話をすまし、警官の方をむいて、

『お待ちどうさま』

と、兩手をさしのべました。

牢獄に行けば、牢獄で、法廷に出れば法廷で、彼は熱辯をふるひました。

皆、愛するイタリー人だ。

みんなの心を、たたき直さなければならぬ。これが、ムツソリニーの考でした。

彼は法廷で叫びました。

『無罪の宣告は、我輩にとつて喜であるが、有罪の宣告は、我輩の名譽である。

それによつて我輩は、始めて、罪人にあらずして、理想の主張者であり、良心をもてる者であり、正しきことのために闘ふ勇士であることが、いよくはつきり

するからである』

10 世界大戦

一介の青年、ムツソリニーが如何程に叫んでも、ゆるみきつた全イタリア人の心を、たゞき直すのは容易な事でありませんでした。

そこに忍びこんで來たのが社會主義です。ます／＼イタリアは、目茶苦茶になつてゆきます。

イタリアの政府には、深く國家の事を心配するような立派な人は一人もゐません。そうした時に、突如世界大戦が起りました。イタリア人は魂が飛ぶ程に驚きました。

隣國のドイツ、オーストリアが戦争をはじめたのです。

イギリス、フランス等が相手です。

そうした國々は、あらかじめ戦争の起ることを心配して、充分に準備をしておきま

した。

イタリーの政治家には、廣く世界の事を考へるような者がなかつた爲に、何にも用意がしてありません。

しかも、イタリーは、ドイツや、オーストリアと同盟を結んである國です。

その隣國の同盟國が戦争を始めたのですから、丁度隣から火事が始つたようなものです。

放つておく譯にはゆきませんが、戦争をしたくも準備がありません。戦争が出来ませんから中立するより他に方法はないのです。

中立したが國境で戦争があるのですから、何時、侵入されるかわかりません。

そこでムツソリニは新聞を發行して、軍備を整へる事を主張しました。

その中に戦争は、全歐洲に擴がり、遂に世界戦争になりました。

この大戦争は世界の様子を一變させようとしてゐます。



オチンダと相首ーニリソツム

戦争に勝つた者が、次の世界に強國となれる勢になりました。

戦はなければ、列國から蹴落されてしまふ。

イタリー人は勇敢であつた筈である。

イタリー人は世界を支配した勇猛な民族であつた。

ゲルマン民族は、ライン河を渡つて、ラテン民族の文明をふみにじつてゐるのではないか。

起て！ 全イタリー人

國家の名譽の爲に、イタリー民族の發

展てんのため

全ぜんイタリー人じんよ。

銃じゅうをとつて起たち上あれ。

と、叫さけんだのが、愛國詩人あいこくしじん、ダヌンチオと、ムツソリニーであつた。

ムツソリニーは全ぜんイタリーにむかつて叫さけんだ。

『諸君しよくん！

行動かうどうしなければならぬのだ。

動うごかなければならぬのだ。

戦たたかはなければならぬのだ。

そして、必要ひつようとあれば死しなければならぬのだ。

見みよ、中立ちゅうりつを守まもつて、かつて事件じけんの決定權けつていけんを握にぎつたものはなかつたのだ。

彼等かれらは必ず没なし去さつた。

諸君！

歴史の車輪を動かすものは、血である！』

この叫びは、雷の如く、全イタリア人の愛國心に響いて行つた。

ムツソリニーは毎日、自分の新聞、イタリア國民新聞に、熱烈な戰爭論を書きつけた。一方、同志を集めて愛國ファツショと名づけた。この同志達は全國に散つて、救國戰爭を訴へた。

『ドイツ軍はすでにライン河を渡つた。』

歐洲の文明は再び、この北方蠻族の爲に脅かされつつある。

嗚呼！我等地中海民族よ！

光彩あり、文雅なる民族の手本たる、我等意大利人よ！

偉大なる文化と事業を産み出したイタリアの同胞よ！

最後の戦にむかつて足を投ぜよ！』

『諸君！』

やがて戦争が終つて、フランスや、ベルギー人が、我々がカイセルの野心より歐洲を救ひ出し、ドイツ、オーストリアの軍隊と、必死に戦つてゐたとき、イタリア人は何をしてゐたんだと訊ねられた時に、何と答へるつもりなのか、その時、諸君は、イタリア人たる事を恥ぢるであらう。だからその時は手遅れだ』

ムツソリニーは獅子奮迅の勢であつた。

『今日、歴史は塹壕の中でつくられてゐる。天をつく意氣は、イタリア全土を動かし始めた』

イタリアの愛國青年の血は湧きたつた。かくして、イタリアは、遂にドイツ、オーストリアに對して宣戦を布告いたしました。

イタリアはムツソリニーの熱によつて動きはじめたのです。

戦線へ！ 戦線へ！

イタリー軍は、堂々と出陣してゆきます。

11 陸軍々曹ベニト・ムツソリニー

ムツソリニーの意氣は遂に全イタリーを動かした。

宣戦は布告された。

彼は直ちに國民にむかつて叫んだ。

『今日、武器を執れの命令が、國民に響き渡つた。

もはや、我々舉國一致、祖國イタリーの爲に戦へばいいのだ。

我々の胸より迸り出づる唯一の叫びはただ伊太利萬歲！ これあるのみ。

あゝ！ 母國イタリーよ。

我々は、おそれなく、くひなく、我等の生と死を、御身に捧げる』

かうして、イタリー全土に愛國の歌は響きわたり、祖國の旗は、ひらめきわたりまし

た。

我がムツソリニーも、第十一狙撃兵聯隊の豫備兵として召集令が下りました。

イタリー全土を愛國の情熱にわきたたせた熱血の志士、イタリー國民新聞社長ムツソリニーも一兵卒として戰陣にかけました。

祖國イタリーの爲に銃をとつて進む幸福をしみくと味ひながら、戰線に出兵いたしました。

彼の最も尊敬する、ユリウス、ケーザルは百萬の將として、遠征をしたのですが、ムツソリニーは一兵卒として、しかもケーザルに劣らぬ意氣を持つて第一線に立ちました。

從軍して、間もなく、突然聯隊司令部から呼ばれました。

ムツソリニー一等兵は、背囊を背負つて、銃を肩に、司令部に行つて見ると、參謀中佐が親しそくに手をさしのべて、

『今日は命令ではない。イタリアー國民新聞社長としてのムツソリニー氏に相談するのです。』

貴下の生命を、絶えざる危険にさらしおくのは、あまりに勿體ないと思ふ。就いては後方勤務にかへつて、我が聯隊史の編纂に従事して下さらんか』

すると、ムツソリニーは、起立のまゝ、凜として答へました。

『私は戦ふ爲に來たのです。私は書かんがために來たものではありません』

かうして彼は、第一線の塹壕に歸つて行きました。

戦場の様子を、ムツソリニーの塹壕日誌により、うかがつて見ませう。

『十時、榴散彈が頭上に唸つた。』

五分後、第二の榴散彈が、物凄い音をたてゝ、我等の前方三米、中隊長から一米のところで、破裂した。

私は立つてゐた。

さつと風がたつて、つづいて碎かれた石の嵐が來た。

私は塹壕を出た、誰か側で唸つてゐるけたゝましく呼ぶ聲

「擔架！ 擔架！」

兵が二人、塹壕の中で重傷を負つてゐるらしい。

大きい岩が文字通り、血潮にちめられてゐる』

ムツソリニーは幾度か、危険なる激戦に參加して、幾度か負傷して、傷が癒ると、又

第一線に立つた、その感狀に、

「ソノ儀表タルベキ活動、ソノ果敢ナル勇氣ト沈着 如何ナル激務ニモ堪へ、大膽ニ

シテ、ソノ任務ヲ行フニ際シテハ、不快ナルヲ厭ハズ、熱心、勤勉ナリ」

かうして、一兵卒だつたムツソリニーは、次第に昇級して軍曹となりました。

ムツソリニーの部隊は、最も勇敢でした

敵前二十二米の對陣を一ヶ月もつづけました。

そして、カルソの大砲戦が行はれた時、ムツソリニー軍曹は全身に四十二ヶ所の大重傷を負つて、後方に送られました。

しかし、あくまでの勝氣なムツソリニーは、その大重傷にも、不思議に生命をとりとめるのでありました。

12 銃後ゆらぐ

ムツソリニーによつて點火された全イタリーは、愛國の至情に燃え上がりました。舉國一致！生活物資は次第に不足し、パンも砂糖も、十分に得られなくなりました。たが、イタリー人はよく忍びました。

戦争は第一線に戦ふ軍隊と、銃後の國民が一つにならなければ、決して勝つものではありません。

全イタリーの指導者ムツソリニーも第一線で戦つてゐます。

だが――

ムツソリニーを第一線に送つて、戦がながびいて來た時、恐しいことには、イタリア銃後の守りが、だん／＼とゆるんできたのです。

戦争に勝つて、イタリアが、平和會議の時に、フランスやイギリスに見くびられて何等得る事がなく、戦ひ損をしたと云ふのは、銃後がゆるんでゐたからです。

古代ローマ人は、如何なる長期戦にも、如何なる苦難にも、よく忍んで、最後の勝利を占めたのですが、護國の神様、ムツソリニーが戦地に行つてしまふと、次第にイタリア人の心がゆるんでまいりました。

それは社會主義者や、共產主義者が、入りこんで、銃後を亂したのです。

私達は、これからのイタリアの話をきくと共に、十分に私達の銃後の心を緊めてかならなければならぬと思ひます。

その頃、ロシアの共產主義者は革命を起して、戦争をやめました。

ロシアの共產主義者は、その勢で、世界を赤化してしまふと、全國に陰謀の手を伸べしました。

イタリアにもぞく／＼赤化の手が伸びてきました。

『イタリアもロシアの云ふ通りにやれば、戦争を中止して、しかも、國民は平和になれる。』

國民はたつた一日に二時間働いただけでいくらでも贅澤が出来るぞ』
共產主義は、イタリア人の心をだらけさせ、イタリア人から愛國の心を奪つてしまふとしきりと、活躍をはじめました。

あぶないことです。

ムツソリニーは負傷して、野戰病院に人事不省に陥つてゐます。

イタリア人は次第に、共產主義にかぶれて戦争を嫌ふようになりました。

戦争に反對するようになりました。

銃後のゆるみは、直ちに戦線にもひびきます。銃後の人達は注意すべきです。どんなうまいことを云つて來ても、どんな誘惑がきても負けてはならないのです。心を許してはならないのです。

イタリー國民はそれを忘れました。

イタリーの銃後は亂れて來ました。

それがどんな恐ろしい結果を生んだ事でせう。武勇にきこえたイタリー軍が、ゆるんできたことは、ドイツ側にも直ちに判明いたしました。

一九一七年十月二十三日、ドイツ、オーストリア軍はイタリー軍のゐるカボレットに向つて猛烈なる總攻撃を開始いたしました。

イタリー軍は、無残にも總崩れに崩れました。

イタリー軍のゆるんでゐた結果です。

捕虜になつたものが三十萬もゐたのです。大砲が二萬五千も捕獲されてしまひまし

た。その他、ふんどられたものは數へきれない程です。

ドイツ軍はどつと北イタリーに攻め込んで來ました。

イタリーの都市と工場と農地は、悉く敵軍に蹂躪されてしまひました。

恐るべき事は、國民のゆるみです。

13 ムツソリニー獅子吼

名譽の戦傷をして病院に横はつてゐるムツソリニーは次第に回復して來ました。回復したムツソリニーの耳にきこえて來たことは一體何であつたでせう。

イタリー軍は勇敢である。

イタリー國民は愛國の至誠に燃えてゐる。

そう信じてゐた、ムツソリニーのところへどんな報告がもたらされたことでせう。

銃後はゆるんだ。

共産主義が入りこんだ。

そして、カボレットで、イタリー軍は大敗した。



ムツソリニー獅子吼

ムツソリニーは憤激した。

憤激のあまり、七日七夜は一睡もしな

かつた。友達は憤死しやしないかと、心

配してモルヒネ注射をした程であつた。

重傷が何だ、祖國があぶない。寝てゐ

る譯にはゆかぬ。

病床からムツソリニーは再び、全イ

タリーに向つて獅子吼いたしました。

『舉國一致が崩れたら、幾千萬の大砲

も何になるか！

幾百萬の勇士が祖國のために尊い血を流してゐるのだ。

この犠牲を空無にしてはならない。

得手、勝手な理屈は反逆である』

『親愛なる國民諸君！

希望に燃えよ！

石炭は十分か、パンはなくなりやしないか、薪はどうか！

昨日までは、そんな小うるさい問題にかゝりあつてゐた。

今日、國民の間ふところはかうだ。

鐵は、彈藥は、銃劍は十分にあるか！

我等は、寒氣も、飢えも堪へることが出来る。そんな事は問題ではない！
侵略は、寒氣や、飢よりも、遙かに悪い事だ！

それは恥である！

我等は勝たねばならぬ！

そして、我等はきつと勝つんだ！』

『今日は一大決心の秋である！

共産主義や、社會主義を蹴とばせ！

自由とか、わがまゝとかを、葬つてしまへ！

われ等の行く道は二つしかないのだ。

明日の勝利をうるために、一致團結するか？

或は、勝手な熱をふいて、滅亡するか！』

未だ、全快せぬ、ムツソリニーは、一大國民運動の中に飛込んだ。矢繼早に大會を開

いて國民を鼓舞した。

『イタリー國民よ！

一致團結せよ！

今ぞ戦ふべき秋である。

抵抗し、攻撃し、そして捷つべき秋である！』

イタリア全土に、再び新しい元氣が湧いて來ました。

國民は再びふるひたちました。

苦しい生活の底から、ぞく／＼と獻金されて來ました。

心をこめた慰問袋が戦線に送られて、勇士の心を感激させました。

軍備も整ひました。士氣さかん。イタリア國王から、ありがたい勅語が下りました。

かくて、カボレット敗戦の日より一年目、一九一八年十月二十四日全攻撃令が、イ

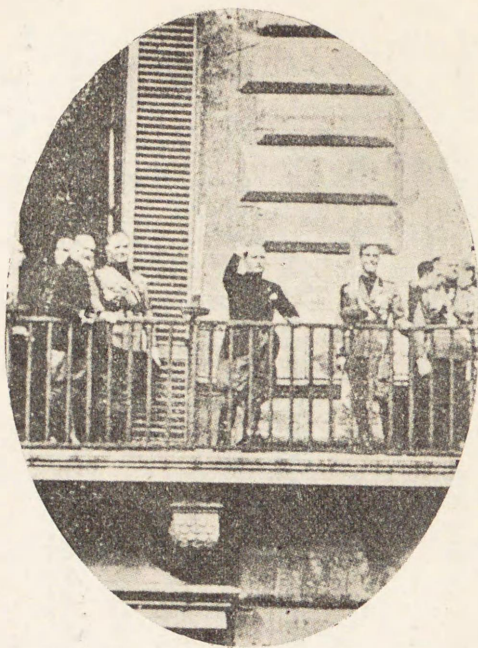
タリ全軍に下りました。

打つて、一丸になつた力は強い。

あゝ！ イタリア國民の永遠に忘れ難き日は遂に來た。

ヴェトリリオ、ヴェネトの大捷！

オーストリア軍七十三軍團を全滅せしめた。



獅子吼 — ニリソツム

遂にオーストリアは白旗を掲げて、降伏した。

イタリーの頭上には燦然として、勝利の榮光が輝いたのである。

強いのは團結の力である。堅忍、舉國一致の力である。持久、舉國一致の力は何物をも、成功せしむる力である。

る。
長期抗戦下の我々が、深く心をとめなければならぬことであります。

一度は大敗したイタリアも、遂に舉國一致の力で大勝利を得たのです。
ムッソリーニは感激に堪えずして、

『偉大なる時はつひに來た。』

この聖なるよろこびの瞬間に於いて、交々至る萬感は心臓の鼓動を止め、肺臓は咽喉まで飛上るのを覺へる。

我等の永かりし受難の日は、つひに勝利の榮冠をいただいた。悲涙につかれたる臉には喜びの涙が光る。

アルプス山よりシシリ島に至るまで、街より街に、大なる叫びを響かさん。
イタリアー萬歲！』

14 イタリアの苦杯

世界大戦争は聯合國側の勝利で幕を閉じました。

頑強な敵軍に最後の攻撃をあたへたのは、イタリアでした。

そして、イタリアは六十萬の尊い生命を犠牲にし、百萬の戦傷者と、二十二萬の不具者を出しました。

この尊い犠牲に對して、イタリアにいつたい何が酬ひられたのでせうか。
バリーの平和會議に於いて、イタリアは何を得たのでせう。

ドイツ植民地の大部分は、好むがまゝに、イギリス、フランスが、併合してしまつた。

イタリア人の住むフューメもイタリアのものにならなかつた。

増殖する國民のために土地を求めてゐたイタリアは、一寸の土地も與へられなかつた。

『噫！ イタリアは何のために戦つたのか、何のために、寒さをしのぎ、飢をしのいで四年も戦つたのか』

齒をくひしばつて憤りました。

一體何故イタリーはかうした憂目を見なければならなかつたのでせう。

舉國一致！ イタリーは敵軍を粉碎いたしました。この強い力がバリーの平和會議までにつづけられてゐればよかつたのです。

ところが、平和會議で、いよ／＼領地の分配をやる頃は、イタリーの國內には再びごた／＼が起り、社會主義や、共產主義が、はびこり、人民の心はぐらついてゐたのです。

そこで、イギリスや、フランスなどに、

『もう、イタリーは駄目だ、

意久地のない國になつてしまつた。

領地など、一寸もやらなくなつて、人の心がゆるんでゐるのだから、おこることも出来やしない。』

と、馬鹿ばかにされてしまつたのです。

領地りやうちの分配ぶんばいも一つの戦争せんそうです。

弱よわければ、領地りやうちは一寸ちよつとだつてとれません。戦争せんそうの中うちだけ、強いつよのでは不十分ふぶんです。

戦争せんそうが終はつて、平和へいわになつた時とき、更に一層そうつよ強つよくなければなりません。

かつて、日清戦争にっしんせんそうの時とき、日本にっぽんは遼東半島れうとうはんとうを支那しなから譲ゆづりうけました。ところが戦争せんそうで日本にっぽんが弱よわつたと見るや、忽たちまち、ドイツやフランスやロシアがやつて來きて、無理矢理むりやりに、遼東半島れうとうはんとうを、とりかへして、しまつた事ことがあります。

したがつて、戦争せんそう中は勿論もちろん強つよくなければなりません、戦後せんごは更に強つよくなければなりません。

イタリーが平和會議へいわくわいぎで、ひどい目めにあつたのも、イタリー人じんの心こゝろがゆるんだからです。

戦争せんそうが終はつて、ほつ！ とした時とき、その時ときから人間にんげんの心こゝろがゆるんできます。

急にきふになまけ心こころが湧わきます。贅ぜい澤たくがしたくなります。

だが、四年ねんも戦争せんそうしてゐた後あとですから、品物しなものが十分にありません。品物しなものが十分ぶんでありませんから、物價ぶつがが高いたかいのです。貨銀ちんぎんは上あがりません。人民じんみんは不満ふまんと不平ふへいをもつようになりしました。

そこへ、共產主義きやうさんしゆぎのロシアから、

『今いまだ！ 人の心ひとこころがゆるんだのにつけこんでイタリアを赤化せきくわさせよ

イタリアをかきみだせ。』

と、指令しれいが來きたのです。イタリアの共產主義者きやうさんしゆぎしやは、その手てにのつて、祖國そこくを崩壞ほうかいしてしまふと、恐ろしい國賊こくぞく的活動きわつどうをはじめたのです。

『諸君しよくん！

諸君しよくんがロシアの云いふ通とほりになれば、地上ちじやうに天國てんこくをつくることできが出來きるのだ。

ロシアは一日二時間いちにじかんしか働はたらかなくて、しかも、幸福かうふくに暮くらしてゐるのだ。』

更に赤化の指令が來ました。

『イタリアを赤化するために、國內を亂さなくてはならぬ。

國內を亂すために、ストライキを起らせよ。』

そこで、共產主義者がイタリア人に云ひました。

『諸君！

諸君の賃銀は安すぎる。

賃銀を上げて呉れなければ、仕事を休んでストライキを起せ。』

一度ゆるんできた、イタリア人は何一つ國家のためを考へることが出來なくなつてゐました。

イタリア國中にストライキが起りました。

工場といふ工場は皆休業です。

電車も、自動車も動きません。

そして、労働者は喜んで歌をうたつてゐます。

ただでさへ、苦しい、イタリアです。かうして、各工場が仕事を休んでゐるのですから、いよゝゝ困つてきます。

『イタリアに内亂が起る。』

そういう風に、各國では見てゐました。

かうした時にバリーで平和會議が開かれてゐたのです。

『内亂の起つてゐるイタリアに領地をやる必要はない。』

と、云ふ譯になつたのです。

憎むべきは共産主義です。

イタリアがひどい目にあつたのは、共産主義のためです。

更に赤化の指令です。

『イタリアの軍隊をたたきこはせ！』

絶えざる砲彈の危険に身を曝し、愛する祖國のために、久しき塹壕生活に身の苦難を忍んで、武勳の數々をたて、凱旋して見ると、

『我々が、こんなに品物の不自由してゐるのは、軍隊が戦をしたからだ！』

軍人は我々の敵だ！ 憎むべき敵だ！』

共産主義者はかういつて、イタリー人民をそそのかすのです。

凱旋祝ひどころではありませんストライキをやつてゐる近所に行くと、凱旋兵は袋だたきになつてしまふ有様です。

恐るべく、憎くむべきものは、共産主義者ではありませんか、

ドイツが戦争に敗けたのも、共産主義者が國內を亂したからだと言はれてゐます。

共産主義者は、勝つた國にも、負けた國にも入りこんで、國內を亂してゆく、まるで、傳染病のように、憎くむべきものです。

今、ムツソリニーが、日本と防共協定を結んで、共産主義を世界からなくしたいと

骨折りをしてゐるのは、かつて、イタリアが共産主義のためにひどい目にあつて、よくその悪いことが判つてゐる爲です、

この時のイタリアは捨てゝおいたら、どうなるか譯りません。幾度か、國難を救つた、大ムツソリニーが、いよゝ偉大な決心をもつて、徹底的にイタリアをたゝきなほし、イタリアを救ふために立たぬ筈がありません。ムツソリニー以外にイタリアを救ふ者はありません。

15 ローマ進撃

イタリアに恐ろしい嵐が吹いてゐます。

共産主義者は、イタリアを滅してしまふとしてゐます。

共産主義者は平氣で、

『我々の祖國はイタリアではなくて、ロシヤである。』



隊 ツ ヤ シ 黒 る す 撃 進 と へ マ ー ロ

我々^{われ}の都^{みやこ}はローマでなくて、モスコ

ーである』

と、云^いつてゐます。

共産主義^{きやうさんしゆぎ}の魔術^{まじゆつ}にかゝつたイタリー人^{いたん}

は、自分^{じぶん}がイタリー人^{いたん}であるのか、ロシ

ヤ人^{じん}であるのかわからなくなつてしまひ

ました。

あゝ、歐洲大戦^{おうれうたいせん}に大勝利^{だいしょうり}をしたイタリ

ーはまさに滅^{ほろ}びようとしてゐます。

町^{まち}にはストライキ^{おこ}が起つてゐます。

村^{むら}には百姓^{しやう}一揆^{おこ}が起つてゐます。

役場^{やくば}や市廳^{しちやう}の役人^{やくにん}の中^{なか}にも共産主義者^{きやうさんしゆぎしや}

が入りこんでゐます。

國內にはイタリアの國旗がなくなつて、いたるところに赤い旗がたちました。

「イタリア萬歲」と云つた爲に共產主義者に殺されてしまつた人もゐます。

大ムツソリニーはこの國內の様子をどんなに残念に思つたことでせうか。

『覺めよ、イタリア人！』

祖國を賣らうとする、惡人にならうとするのか。

君達は光榮ある、イタリア人であるといふことを忘れたのか』

至るところに現はれて、ムツソリニーは愛國心を呼びさました。

『同志よ來れ！』

しつかと、腕を組んで、祖國イタリアを守る勇士は來れ』

ムツソリニーは、今や叫び、教えるだけでは十分でないことを知りました。

全國にむかつて、愛國の志士を募りました。救國の勇士を求めました。

イタリア人全部が赤化してゐるのではありません。イタリア全部の人達がくさつてしまつたのではありません。

イタリア人の中にはまだ、正しい心の残つた者があります。イタリア人の中にはまだ、愛國心が残つてゐます。

そした英雄はぞく／＼と、ムツソリニーのところに集つてきます。

全國に支部が出来ます。そのあつまりを、ファツシヨと云ひました。ファツシヨは黒いシャツを着てゐましたから、黒シャツ黨とも云ひました。

ムツソリニーの爲に生命を捧げて働いてもいいと云ふ同志ですから、頼もしいものです。

その中にだん／＼と、共產主義者は騒動を起こしました。劇場を爆破する、罪のない子供を虐殺する。

ムツソリニーはこの時遂に

『悪の武力に對しては善の武力を！』

と、全國の同志に武裝を命じました。

かくして、國民ファシスト黨は全國に三十數萬となつたのです。

これを見た、共產主義者連は慌てました。全國の共產主義者が一時に蜂起して、内亂を起こし、ファシスト黨を撃破しなければならぬと祕密指令を發して、突如總罷業を起し、暴動を開始しました。

ムツソリニーは直ちに全國の同志に向つて、動員令を下しました。

勇敢なるファシスト、黒シャツの一隊は、魔法の如く、イタリーの町々村々に一齊に現はれました。

意久地のない政府は、ただ、うろ／＼してゐるだけです。何をすることも出来ませ

ん。

ムツソリニーは政府にむかつて、

『我々は政府に四十八時間の猶豫をあたへる、その間に政府が、暴動を鎮めることが出来ないのなら、ファシストは自由なる行動をとるものである』

四十八時間たつて、政府は何もすることが、出来なかつた。もはや捨てておくわけにはゆかぬ。ファシストは政府にかはつて、國家を顛覆せんとする、騒動を慎めなければならぬ。

『きつと征伐して見せるぞ、

いや木葉微塵にしてしまふのだ。

あの惡獸共を、一思で！』

ムツソリニーの命令が下りました。

『起て！ 起て！ ファシストよ！

起つてイタリーの國家と、市民を救へ』

ファシスト黨は活動を開始いたしました。

休んでゐた交通機關はファシト黨員の手で動きはじめました。

全國の工場もファシスト黨の手によつて、仕事をはじめました。

役所にあたつてゐた赤旗は下ろされて、イタリア國旗が翻つてゐます。

共產主義者は役所から逐ひはられてしまひました。

イタリア人は始めて、そこに、偉大なファシストの姿を見、愛國心に覺めました。

イタリアを救ふものはファシストであると強く感じました。

『救世主！ ムツソリニー！』

全國民は一齊に叫びました。

イタリア政府の中にも共產主義者が居りました。

ローマ市には共產主義者の本部もありました。

ファシストは、これを征伐しなければならぬ。

そして、新しい、輝やかなしいイタリアを建設しなければならぬ。

救世主きゆうせいしゅ ムツソリニーは、ローマ入りを斷行だんかうすることになりました。

七萬まんの健兒けんじを率ひきひて、肅々しゆくくと、ムツソリニーはローマに進撃しんげきを開始かいしいたしました。政府部内に巢喰すくふ共產主義者は卑怯ひけふにも、このファシストを軍隊ぐんたいの力で、壊滅くわいめつせしめようとなりました。

時の首相しゆしやうファクタを、そゝのかして、戒嚴令かいげんれいを布しかせようとなりました。

戒嚴令かいげんれいが布しかれゝば、ファシスト隊たいと、國王陛下こくわうへいかの軍隊ぐんたいと、衝突しょうとつしなければならな

い。

イタリー人同士じんどうしで血ちを流ながさなければならぬ。ファシストは賊軍ぞくぐんになつてしまふのだ。

ムツソリニーの一大危機だいききである。

時の内閣ないかくは己すでに辭表じへうを提出ていしゅつしてありましたが、裁下さいかが未だいまになかつたのである。

そこでファクタ首相しゆしやうは、ローマ全市ぜんしに戒嚴令かいげんれいを布しいて、ファシスト隊たいを撃滅げきめつせんも

のをと、そのかさされるまゝに、慌てゝ宮中に参内いたしました。

『陛下、ムツソリニーが叛亂を起しました。戒嚴令を布かねばなりません。御裁下

を申し上げます』

然るに意外

『朕は、戒嚴令に反對ぢや』

『しかし陛下！』

事態は急でございます。一刻も猶豫が出来ません』

英明にわたらせ給ふ國王陛下はムツソリニーの誠忠を已に感じられてゐた。

『ならぬ！』

斷乎！御許しが下されなかつた。

だが！首相は、ファシスト隊、ローマ進撃と聞くや、直ちに戒嚴令を布いてしま

つたのであります。

彼は恐る／＼御前に進んで、三たび奏請いたしました。

『陛下！ ファシスト隊は、もはやローマに進撃してゐます。實は先刻、緊急の處置として、戒嚴令は、すでに發令が終つたのであります』

陛下の顔色はサツと變られました。

『何！』

戒嚴令を命令した？

何の權限をもつて、汝はその命令を發したのか？

戒嚴令を命ずるの權は、イタリ―國王の大權に屬することは、知らぬ筈はあるまい。汝は國王の大權を干犯しようといふのか！』

ファクタは思はず面を伏せて、答ふる言葉がなかつた。

『それに汝はすでに、辭表を提出してゐる。すでに内閣總理大臣を辭したものは戒嚴令を奏請する權限すらないのだ！』

フアクタ首相は恐懼して闕下を去り、直ちに戒嚴令の取り消しを、各地に電報しました。

つづいて、進撃中のムツソリニーに電報をもつて、組閣の大命が降下しました。

かくして、鍛冶屋の息子が、イタリー王國大宰相の印綬を帶ぶべき日が、つひに來たのだ。

いや、新イタリーの夜明けだ。

ムツソリニーは九萬の黒シヤツ隊の先頭に立つて、ローマの都に入りました。

見よ！ 彼等の顔は、汗にまみれ、ほこりに染みてゐる。しかし胸の中に燃ゆるものはただ一意専心國を憶ふ、愛國の至情である。われらの力をもつて、イタリーを救はんとの決意である。

かくして、新イタリーは明けてゆく。

英雄ムツソリニーの手によつて、イタリーは甦生してゆくのであります。

16 新イタリアの偉力

滅亡の淵を追つてゐたイタリアは、遂に英傑ムツソリニーに依つて、救はれる事になりました。

ムツソリニーは共産主義者や、社會主義者を撃滅いたしました。だらけきつた、イタリア人の心を根本的にたゞき直しました。

イタリアは、まさに、世界のイタリアになるのだ！

イタリアは、まさに、世界の指導者になるのだ！

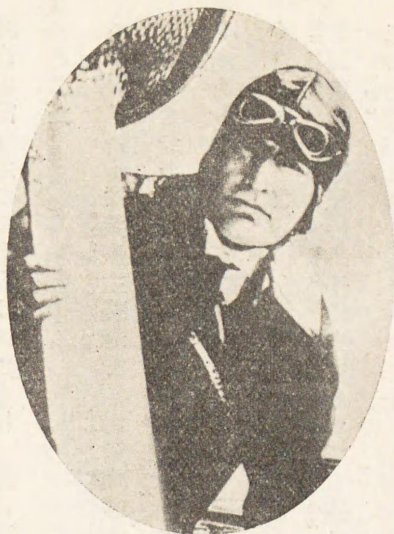
片田舎の鍛冶屋の息子の力をもつて、全イタリアが甦生した。

この力だ。

この力でイタリアは、世界を甦生せしむることが出来るのだ。

人口の多いのと、領地の廣いのが強いのではない。

どんなことでも、必ずやつてのけようといふ強い心が一番強いのだ。
 イタリア人は、心から目覚めた。



つてしまつた。

世界は眼をみはつておどろきました。

ーニリソツムぶとを空

目覚めたときから、イタリアはみる／＼強くなつていつた。

産業は發達した。

軍備はととのつた。

文化は進んだ。

ムツソリニーが政權を握つて、僅かに二年の後には、もう歐洲ではおしもおされもせぬ一大強國とな

世界大戦争の時、イタリアを馬鹿にしてゐたイギリスや、フランスは、ひそかにイタリアをおそれてきました。

その頃、世界大戦によつて惨敗したドイツにもヒットラーと云ふ英雄が現はれて、めき／＼と國力をあげて行つた。

かうなると歐洲はイギリスや、フランスだけが意張つてゐるわけにはゆきません。ドイツ、イタリアに相談なしには歐洲の事が、何にも出来ない程になつて、英佛獨伊の四ヶ國協定が出来上りました。

これよりもつと、世界がびつくりした事は、イタリアのエチオピア併合の事件です。

世界大戦争の結果、イタリアは植民地を一寸も貰へなかつた。

しかるに、イタリアは年々五十萬の人口が増加してゆく。

そのイタリア人は、イタリアの國內で出来るものだけでは、生活することが出来な



大演習に於ける部隊の中閲檢のツムニ相首

い。

どうしても、イタリアは植民地がなければ自滅してしまふ運命にある。

アフリカの黒人帝國エチオピアは、イタリアの三倍の領地と無限の産物があるのに對して人口は僅かに一千萬人しかない。

無限の富である。

鐵がある、石炭がある、金がある、白金がある、石油は無盡藏、栽培法を改善すれば全ヨーロッパの必要位、棉花も出る。

しかも約百年前、エチオピアは、イタリア軍をアドワで、敗走せしめた宿怨の國である。

このエチオピアは歐洲列國並にイタリアを馬鹿にしてゐる。

イタリアは、エチオピアから骨無しだといつて馬鹿にされてゐる。

どうして、エチオピア黑人帝國が、白人の侵略を逃れてゐたのかと云ふとその一つは、エチオピアがまはりに天然の要塞を持つてゐるからである。

エチオピアに入るには、灼熱の沙漠を通るか、千仞の斷崖をよちのぼつてゆかなくてはなりません。

いま一つは、エチオピアの周圍には、フランス、イタリア、イギリスの領地がとりかこんでゐて、誰もが手を出せない様子にあつたのです。

したがつて、イタリアがエチオピアに手をつけることは、イギリス、フランスと開戦する決心がなければ出来ません。

かうした時にエチオピア兵とイタリア兵が争を起しました。

ワルワル事件と云ひます。

この時ムツソリニーの決心がつきました。

『今だ！』

ムツソリニーが決心すれば、必ずなしとげます。

忽ちに大軍がアフリカに送られました。

フランスは、その頃、ドイツが強大になつて來ましたから、イタリと争ふことが出來ません。フランスは、廣大なサハラ領域と、ソマリランドを、イタリにあたへてしきりと、イタリの機嫌をとつてゐます。

イギリスは、しかし、これを黙つて見てゐる譯にゆきません。

イギリスは世界平和の指導者だと云つて、威張つてゐたのですから、それだけでもイタリの戦争をやめさせなければ、列國から信用を失つてしまひます。

信用を失ふだけなら、まだ我慢も出來ませうが、もしも、エチオピアに強力な、イタリみたいなファシヨの國が出來てしまふと一大事です。

埃及エジプトがあぶなくなる。アフリカ各地かくちに於おける、イギリスの植民地しよくみんちがあぶなくなる。印度インドだつて危険きけんである。イギリスの各領地かくりやうちが皆みなあぶなくなつてしまふのである。

イギリスの一大問題だいもんたいである。

イギリスは何なんとかして、イタリーの進軍しんぐんを中止ちゅうしさせようとして、いろ／＼の權利けんりをわけるからと云いつたのであつたが、ムツソリニーは強硬きやうかうに拒絶きよぜついたしました。

イタリーは世界せかいの強國きやうこく、イギリスと正面衝突しやうめんしやうとつをいたしました。

世界せかいは、どうなることかと、はら／＼しました。

イギリスは早速さつそく、地中海艦隊ちゆうかいかんたいに出動命令しゆつどうめいれいを下くだしました。

航空母艦かうくうぼかん、戦艦せんかん等二十隻せき、堂々たう／＼とイタリーとエチオピアの間にあひだ出動しゆつどういたしました。

これに對たいして、イタリーは、ただちに、七十隻せきの潜水艦せんすいかんを出だしました。

エチオピアとイタリーが開戦かいせんすると見るや、イギリスは更さらに二十隻せきを増艦ぞうかんいたしました。

そして、國際聯盟は、兩國に對して、戰爭停止を要求いたしました。

『今更そんなことが出来るものか』

ムツソリニーは一言の下にはねつけました。

更に國際聯盟は五十二ヶ國の名をもつて、

『イタリアは侵略國なり』

と、定め、進んで、

『イタリアに對して、經濟封鎖をす』

と、宣言しました。勿論、イギリスが中心になつて決めました。

しかし、ムツソリニーは少しもおどろきません。イギリス艦隊の上に、その世界に誇る、優秀航空隊を飛ばせて、若しも、經濟封鎖をすれば、たちどころに、地中海艦隊を撃沈せしめてしまふような氣勢を示しました。

その中に、どん／＼イタリア軍はエチオピアを攻略してゐます。

イギリスも、國際聯盟も、あまりの、イタリーの元氣一杯におそれをなして、手が出せませんでした。

世界五十二國からなる國際聯盟と、イギリス艦隊を、向ふに廻して、イタリーは、少しも恐るゝところなく遂にエチオピアを併合してしまひました。

イギリスも、國際聯盟も、それに對して經濟封鎖をするとか、制裁を加へると、大聲で叫んばかりゐて、何をすることも出来ませんでした。

堂々たる態度で、ムツソリニーは聯盟國を尻目に、エチオピアを併合してしまひました。

今や、イタリーは世界の最強國の中に數へられるようになりました。

ムツソリニーも世界のムツソリニーになりました。

イタリーは完全に救はれました。

ムツソリニーは進んで、世界中を、今よりも、もつと、正しい幸福なものにしようとする。

かんが
考へて來ました。

それには、人類の敵である、共產主義を撲滅しなければなりません。

同じく、世界を正しく、立派なものに導くことを大使命としてゐる我が日本と、イ

タリーの願望とが一致しています。

イタリーは日本と共に世界を明るく、正しものにしようとして手を伸してきました。

防共協定の締結がこれです。

日伊協定は、世界のもつとも、神聖にして、強い結びつきです。この力は世界を着々

と正しいものに改造してゆくのです。

支那事變もそのあらはれの一つです。

友邦イタリーは、日本の美しい、正しいこの大事業を心から、援けてゐて呉れます。

私共も友邦イタリーの繁榮を祈らうではありませんか。

一二、歴史は教へる

私達わたしどもは、今いま、數千年すうせんねんにわたる、イタリーの歴史れきしを知る事ことが出來できました。

それは、實じつに、いろ／＼と變化へんくわに富とんだ物語ものがたりでした。

偉えいい英雄いゆうゆうの話はなしもたくさんありました。

たいへんに盛さかんな時代じだいのイタリーもありました。

あまり元氣げんきのない衰おとろえた時代じだいもありました。最後さいごには、イタリーを救すくふ大ムツソリ

ニーの話はなしがありました。

そうした話はなしは、本當ほんたうに、私達わたしたちの心こゝろをふるひたせます。

カルタゴを破やぶるローマ、

ハンニバルの猛軍もうぐんを撃滅げきめつするローマ。

五十二ヶ國の聯盟國の反對を押し切つて、エチオピアを攻略したイタリア。

私達は、かうした話から、一體何を學ぶことが出来るでせうか。

今、日本は、東洋永遠の平和確立といふ、尊い使命にむかつて、邁進してゐます。

これは、頑迷な蔣政權を打倒するといふだけでは、完成するものではありません。

この尊い使命を完成するには、丁度、ローマが、カルタゴを破つたように、舉國一

致、堅忍持久に加へて、盡忠報國と云ふことが、どんなに大切なことか、よくお判

りになつたと思ひます。

勝つたイタリアが世界大戰の結果、何等、報を得られなかつた歴史は、平和の時に

於いても、國民の心が緊張してゐることの、どんなにか大切であるかといふことを、

私達に教へてゐます。

イタリアのエチオピア攻略に際して、流石の英國ですら、手が出せなかつたといふ

ことは、私達に、國力が充實してゐるといふことが、實に偉大な力であるといふこと

を教へて呉れました。

私達は大切な使命を達成させるために、心をしめてかからなければなりません。

更に、私達は、いま、イタリアの歴史を読み終つて、一番強く感じたことは、日本の國體の尊嚴さであります。

イタリアは世界でも、すぐれた立派な國です。そのイタリアと比べてみて、更に一層尊い國體である日本です。

尊嚴な國體をもつ、日本には、また、他のどの國でもなし得ない、尊い使命があるといふことも、當然な事であります。

私達は、尊嚴な國體に生れた幸福に感謝すると、共に、この尊嚴な使命を達成すべき、光榮の義務あることを心から決心しなければなりません。

昭和十三年十月十五日 印刷
昭和十三年十月二十日 發行

定價 金 壹 圓
郵送料 金 拾 錢



タイ リ ー 物 語

奥付

著 者 荏 原 二 郎

東京市四谷區新宿二丁目八十八番地
發行者 北 村 幸 雄

東京市四谷區本村町四番地
印刷者 鈴 木 芳 太 郎

發 行 所

東京市四谷區新宿一の八八
振替口座東京二七一三〇番

合資 會社 三 友 社
電話四谷(35)三三二一 番

はにるへ與を識知の那支に童兒

沼田利三郎著

文庫童 支那の歴史物語

四六判 美本
定價 六圓
送料 金十錢

尋常五六年の生徒が讀んでとても面白い支那歴史の物語りである。今日の小學からはあまりにも支那を知らないといふ事から、國雄さんと云ふ小供が御父さんからの面白い御話しを毎夜毎夜聞いたのをまとめた本である。家庭の讀みものとしても極めて適當である。課外讀本としておすすすめする。

栗原 靜一著

文庫童 支那の地理物語

四六判 美本
定價 六圓
送料 金十錢

今度の事變でどこを占領したと云つても、その場所を知らなくては、御話をきいても面白くない。この本は先生と生徒とが、支那の各地を飛行機に乗つたり揚子江を舟で上つたり下つたりして、各地見學した物語である。小學四五年生でも樂々とよめる面白い支那の地理書として、家庭的にだれが讀んでもためになる書物である。課外讀本としておすすすめする。

渡邊 哲夫著

文庫童 支那童話讀本

四六判 美本
定價 六圓
送料 金十錢

支那の童話を平易に書いたものである。其の内容は裸の王様・蟻の恩返し・駝・四つの願ひごと・命の木外十八種。類書少なき支那童話をして興味深き讀物

三友社發行

東京市四谷區 宿新八ノ一

振替口座 東京 〇三七一